

救急搬送データからみる 日常生活事故の実態

平成30年

東 京 消 防 庁
防 災 部 防 災 安 全 課

目 次

データ・用語	1
--------	---

ピックアップ 1 身近に起きているこんな事故

○ 指等を切断する事故	3
○ 乳幼児の窒息や誤飲の事故	7

ピックアップ 2 熱中症による救急搬送 11

第1部 平成30年の概要

1 年別発生状況	15
2 年齢層別搬送人員	15
3 月別・時間帯別搬送人員	16
4 事故種別ごとの搬送人員	17
5 発生場所別搬送人員	17
6 初診時程度別搬送人員	18

第2部 種別ごとにみる事故

1 ころぶ	21
2 落ちる	23
3 ぶつかる	25
4 ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む	27
5 切る・刺さる	29
6 はさむ・はさまれる	31
7 やけど	33
8 かまれる・刺される	35
9 おぼれる	37

第3部 年齢からみた事故

1 年齢層別での比較	
(1) 年別搬送人員での比較	40
(2) 事故種別（その他、不明を除く）ごとの比較	42
(3) 時間帯別での比較	44
2 年齢区分からみた事故	
(1) 0歳～5歳（乳幼児）の事故	47
① 0歳～5歳	47
② 0歳	51
③ 1歳	53
④ 2歳	55
⑤ 3歳～5歳	57
(2) 6歳～12歳（小学生）の事故	59
(3) 13歳～18歳（中学生・高校生）の事故	62
(4) 19歳～64歳の事故	65
(5) 65歳以上（高齢者）の事故	68
① 65歳以上（高齢者）	68
② 65歳から74歳（前期高齢者）と75歳以上（後期高齢者）	72

第4部 関連器物からみた事故

1	エスカレーター	75
2	エレベーター	80
3	自転車の幼児用座席	84
4	遊具	87
5	ガスによる事故	90

デ ー タ ・ 用 語

日常生活事故

救急事故のうち、運動競技事故、自然災害事故、水難事故、労働災害事故、一般負傷に該当するものをいう。

分析データ

平成26年～平成30年中の救急搬送データ（救急搬送したもの）における日常生活事故に該当するデータ

初診時程度

- ・死亡・・・・・・・・初診時死亡が確認されたもの
- ・重篤・・・・・・・・生命の危険が切迫しているもの
- ・重症・・・・・・・・生命の危険が強いと認められたもの
- ・中等症・・・・・・・・生命の危険はないが入院を要するもの
- ・軽症・・・・・・・・輕易で入院を要しないもの

関連器物

受傷原因に直接または間接的に影響があった器物のことをいう。

事故種別

- ・落ちる・・・・・・・・倒れた際に高低差の移動を伴って受傷したもの
- ・ころぶ・・・・・・・・倒れた際に高低差の移動を伴わず受傷したもの
- ・ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む（ものがつまる等）・・・・食物または、食物以外のものを飲み込んで受傷したもの（目・耳・鼻へ異物が入ったものを含む）
- ・ぶつかる・・・・人と人、人と物との衝突により受傷したもの
- ・はさむ・はさまれる・・・・物体間または物体内に挟まれたもの
- ・やけど・・・・・・・・高温の液体、気体等により受傷したもの
- ・切る・刺さる・・・・刃物や鋭利物等により受傷したもの
- ・かまれる・刺される・・・・動物や虫などにかまれた、刺された等により受傷したもの
- ・おぼれる・・・・浴槽、プール、河川等で溺れたもの

年齢区分

- ・乳幼児・・・・・・・・5歳以下
- ・小学生・・・・・・・・6歳以上13歳未満
- ・中学生・高校生・・・・13歳以上19歳未満
- ・高齢者・・・・・・・・65歳以上
- ・前期高齢者・・・・・・65歳以上75歳未満
- ・後期高齢者・・・・・・75歳以上

東京消防庁管内

東京都のうち稲城市、島しょ地区を除く地域

ピックアップ1

身近に起きているこんな事故

東京消防庁管内では、平成30年中に日常生活の中で起きる様々な事故により約14万4千人が救急搬送されています。ここでは、「指等を切断する事故」と、乳幼児の特徴的な事故である「窒息や誤飲の事故」の発生状況を取り上げました。

指等を切断する事故

1 年別救急搬送人員

平成28年から平成30年までの3年間で、727人が指等を切断する事故により救急搬送されています。平成30年は247人が救急搬送されています（図1）。

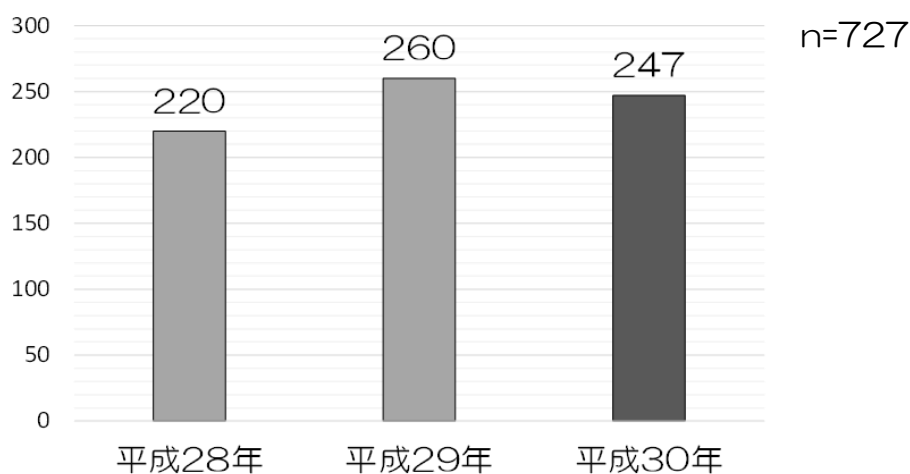


図1 年別の救急搬送人員

2 年代別救急搬送人員

40代が最も多く157人、次いで50代が129人となっており、20代から70代にかけて多くなっております（図2）。

また、0歳～4歳でも18人と乳幼児でも発生しており、保護者の注意が必要です。

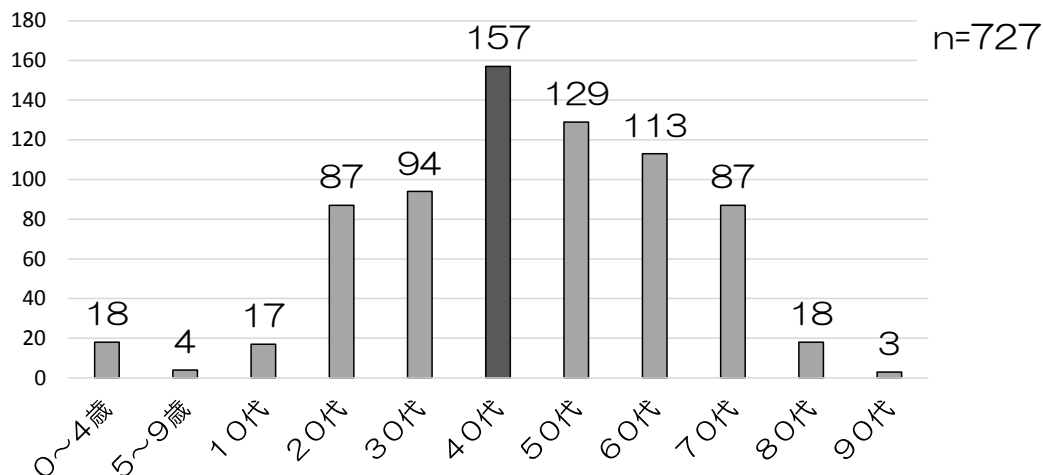


図2 年代別救急搬送人員

3 事故発生場所別の救急搬送人員

事故発生場所別の上位5か所をみると、工場・製造所・作業場が276人と最も多く、次いで住宅（専用・共同・寮・寄宿舍）が148人と多くなっています（図3）。

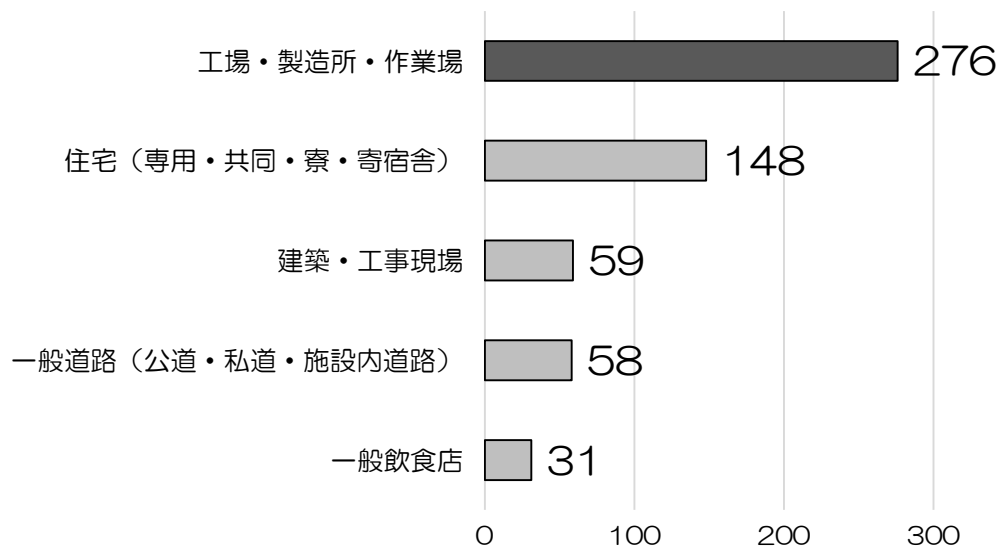


図3 事故発生場所別の救急搬送人員（上位5か所）

4 初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度をみると7割以上が入院の必要がある中等症以上と診断されており、生命の危険が強い重症と診断されている事例もあります（図4）。

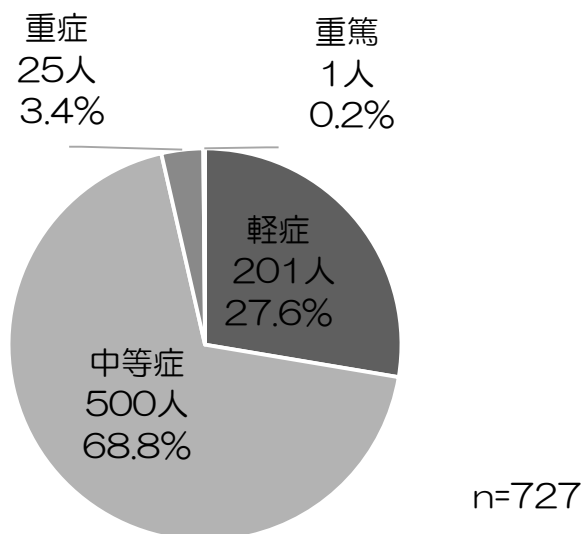


図4 初診時程度別救急搬送人員

5 関連器物別事故発生状況

関連器物別の事故発生状況（上位5つ）をみると、電気のこぎりやプレス機などの機械によって受傷した人が364人と顕著に多く、次いで開き戸や引き戸などの開口部が61人、自動車などの車体が48人となっています（図5）。

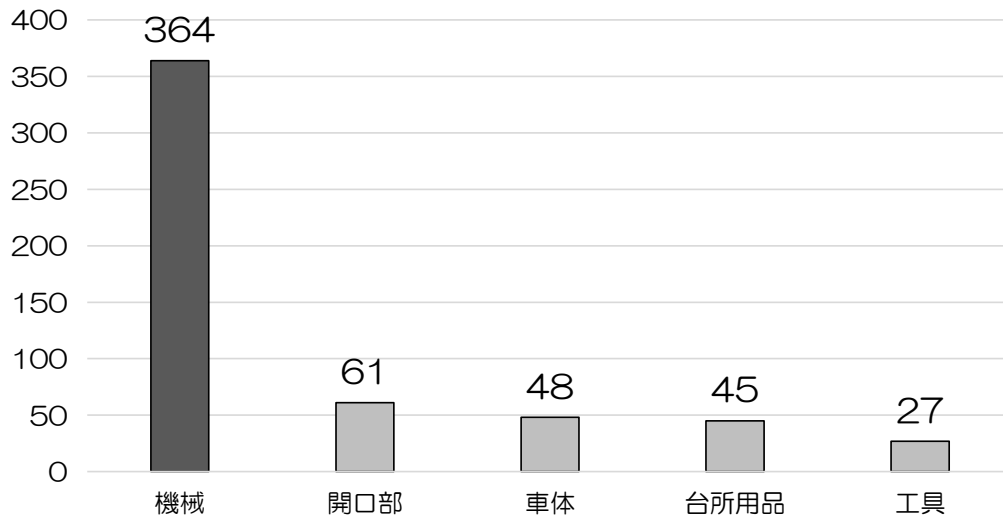


図5 関連器物別事故発生状況（上位5つ）

6 12歳以下の子供による事故

12歳以下の子どもに注目した関連器物別では、手動ドアなどの開口部で指等を切断する事故が顕著に多くなっています（図6）。

また、発生場所別では自宅が9件と最も多くなっており、自宅以外の外出先や幼稚園・保育園などでも多く発生していることがわかります（図7）。

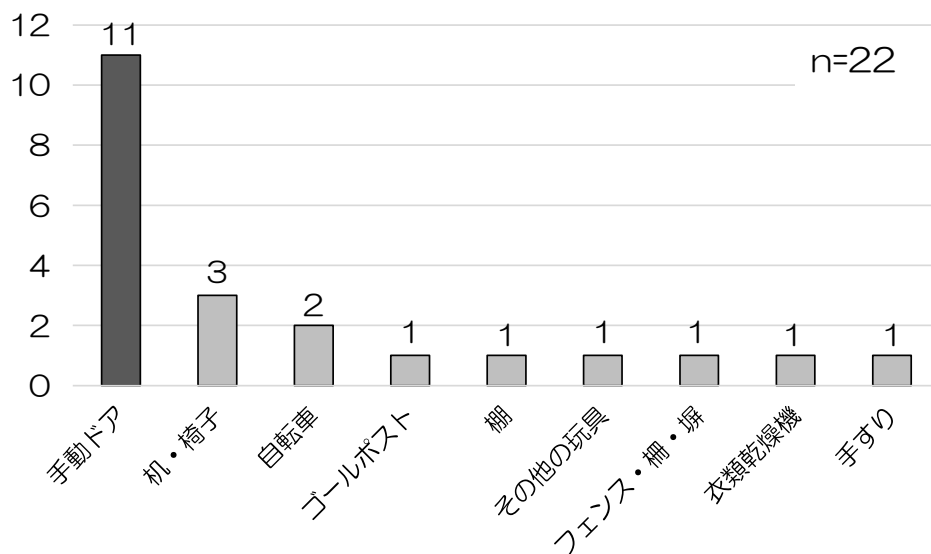


図6 関連器物別救急搬送人員（12歳以下）

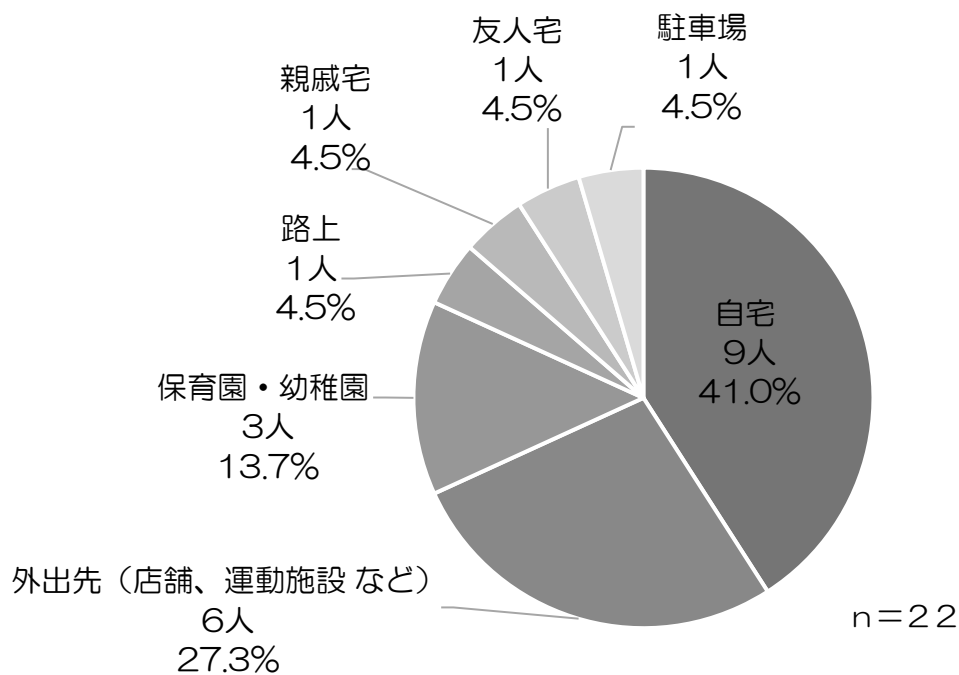


図7 発生場所別救急搬送人員（12歳以下）

7 事故事例

【事例1】

母親がドアを閉めた際に、蝶番側に息子の指が入っており切断した。
（12歳以下 中等症）

【事例2】

工事現場で電気のこぎりを使用し、資材を切断中に誤って手を切断した。
（40代 中等症）

【事例3】

自動車整備中にファンベルトに軍手が巻き込まれ人差し指の第一関節を切断した。（40代 中等症）

【事例4】

自宅トイレに入った際にトイレドアの隙間に手を置いていたところ、家族がトイレドアを閉めたため指が挟まり切断した。（70代 中等症）

乳幼児の窒息や誤飲の事故

1 年別搬送人員

平成26年から平成30年までの5年間に、6,224人の乳幼児が、窒息や誤飲等※により医療機関に救急搬送されています（図8）。飲み込んだものによっては、体の組織を破壊するなど重大な事故となる恐れもあります。

※耳や鼻等に入ったものも含む

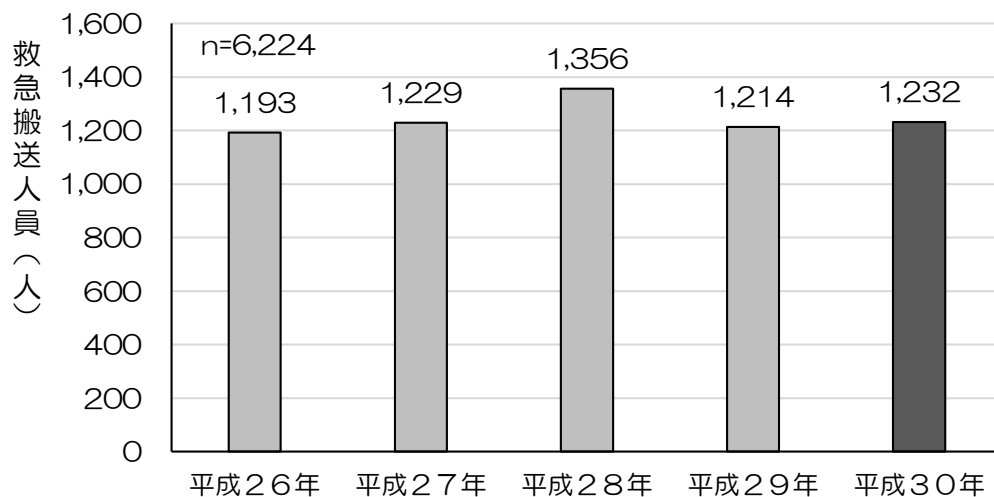


図8 年別の救急搬送人員

2 年齢別搬送人員

年齢別では、0歳児の救急搬送が最も多く、成長とともに減少しています（図9）。

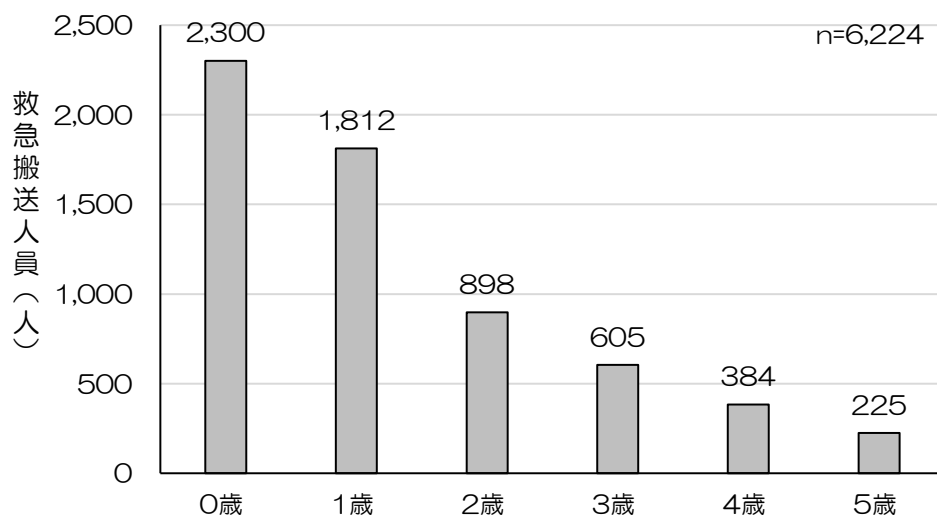


図9 年齢別救急搬送人員

3 発生場所別搬送人員

発生場所別では、住宅等居住場所が全体の9割以上を占めています(図10)。

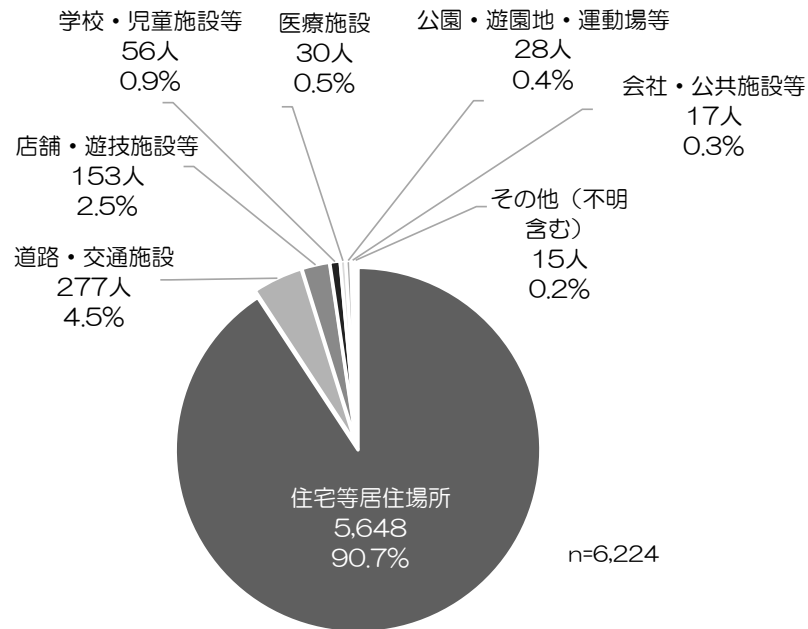


図10 発生場所別救急搬送人員

4 初診時程度別救急搬送人員

初診時程度別では、軽症が約9割を占めており、入院の必要がある中等症以上は約1割を占めています(図11)。

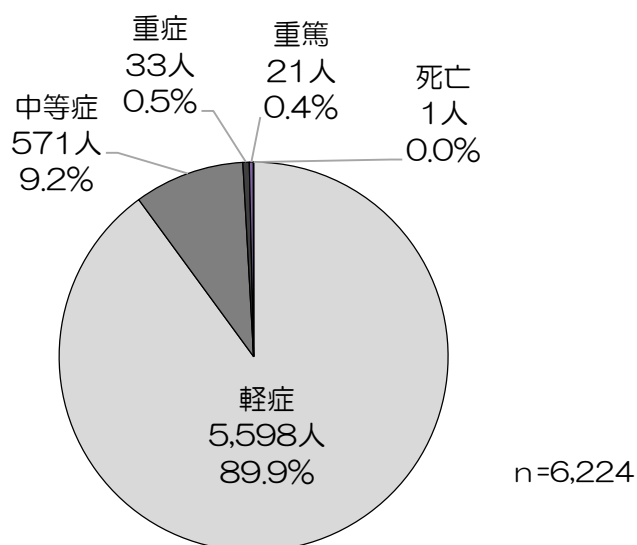


図11 初診時程度別救急搬送人員

5 関連器物別救急搬送人員

関連器物別では、食品・菓子や玩具が多いですが、乳幼児の窒息や誤飲に係る製品等は、菓子の包みやたばこ、薬剤等、様々です（図12）。

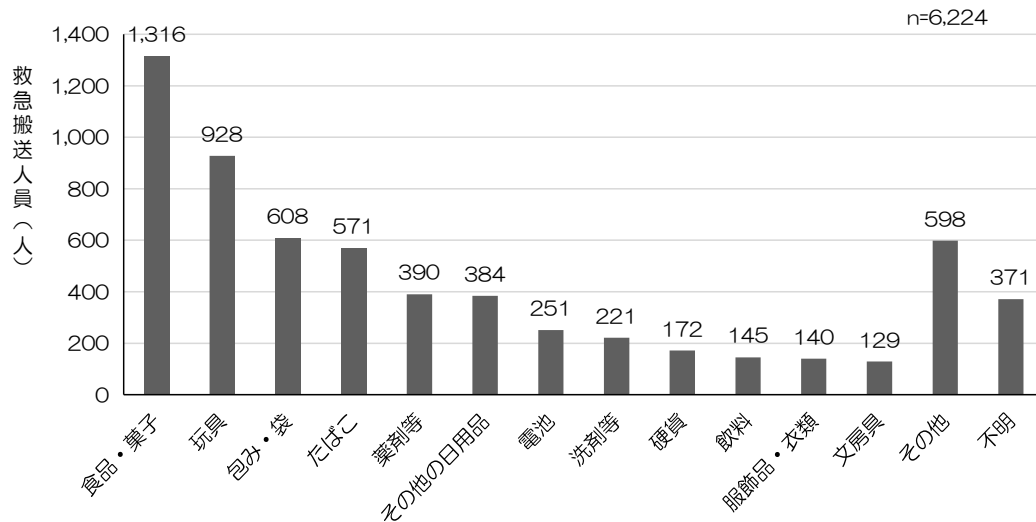


図12 関連器物別救急搬送人員

6 窒息や誤飲の事故の事例

【事例1】

親が少し目を離した隙に、ミニトマトを喉に詰まらせ窒息した。
（3歳 重症）

【事例2】

電子たばこのカートリッジを誤飲してしまい、その後ミルクを飲んだ後に嘔吐があり、嘔吐物にたばこの葉が含まれていた。
（1歳 中等症）

7 窒息や誤飲の事故を防ぐために

- 家の中では、子供の目の高さで危険がないかチェックしましょう。
子供が飲み込めそうなものが、子供の手の届くところがないか日頃から整理整頓をこころがけましょう。
- 飲み込むと危険性が高いものを知っておきましょう。
ボタン電池：ボタン電池は放電能力が高いため、非常に短時間で消化管壁に潰瘍を作ります。また、直径が大きく食道にとどまる可能性が高いため、誤飲すると死に至るおそれがあります。
(出典：東京都生活文化局消費生活部生活安全課 ボタン型電池 コイン型電池を子どもにさわらせないで！ リーフレット)
- 灯 油：胃から逆流すると気管に入りやすく、気管に入るとひどい肺炎を起こします。キャンドルオイルも、これと同じ状況で、肺炎を起こします。



ピックアップ2

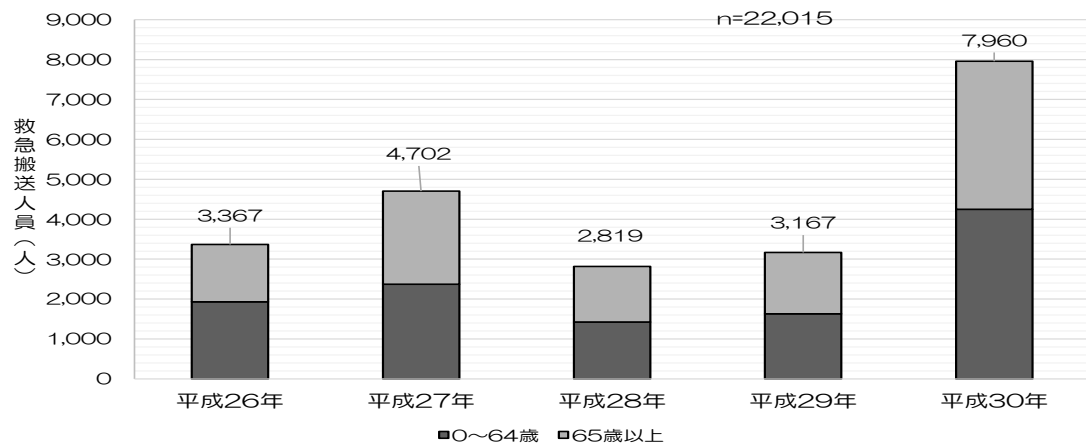
熱中症による救急搬送

1 年別・月別の発生状況

(→P.17 事故種別「その他」等により救急搬送されたもの)

平成26年から30年の過去5年間(各年6月から9月)に22,015人が熱中症(疑い含む。)により救急搬送されています。平成30年の救急搬送人員は、7,960人で、65歳以上の高齢者の割合は、約5割を占めています(図13)。

また、月別では、各年とも7月、8月に多く発生していますが、梅雨時期の6月や残暑の9月にも発生しています(図14)。



	0～64歳	65歳以上	総計	65歳以上割合
平成26年	1,931人	1,436人	3,367人	42.6%
平成27年	2,372人	2,330人	4,702人	49.6%
平成28年	1,428人	1,391人	2,819人	49.3%
平成29年	1,633人	1,534人	3,167人	48.4%
平成30年	4,249人	3,711人	7,960人	46.6%
合計	11,613人	10,402人	22,015人	47.2%

図13 過去5年間(各年6月～9月)の年齢層別の救急搬送人員

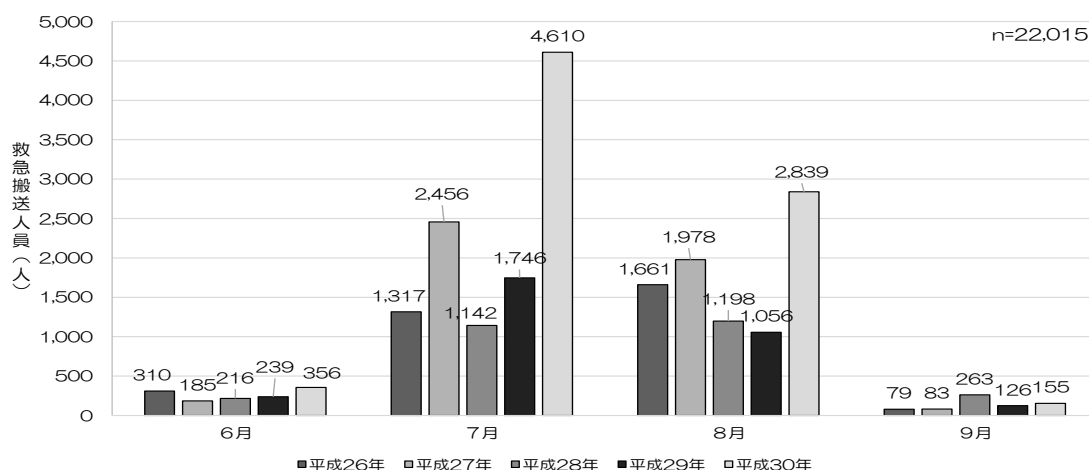


図14 過去5年間(各年6月～9月)の月別救急搬送人員

2 搬送人員と気温

熱中症による救急搬送人員と気温の関係をみると、気温が高い日が続いた7月前半や梅雨明け後の気温の高い日に多く発生しています（図15）。

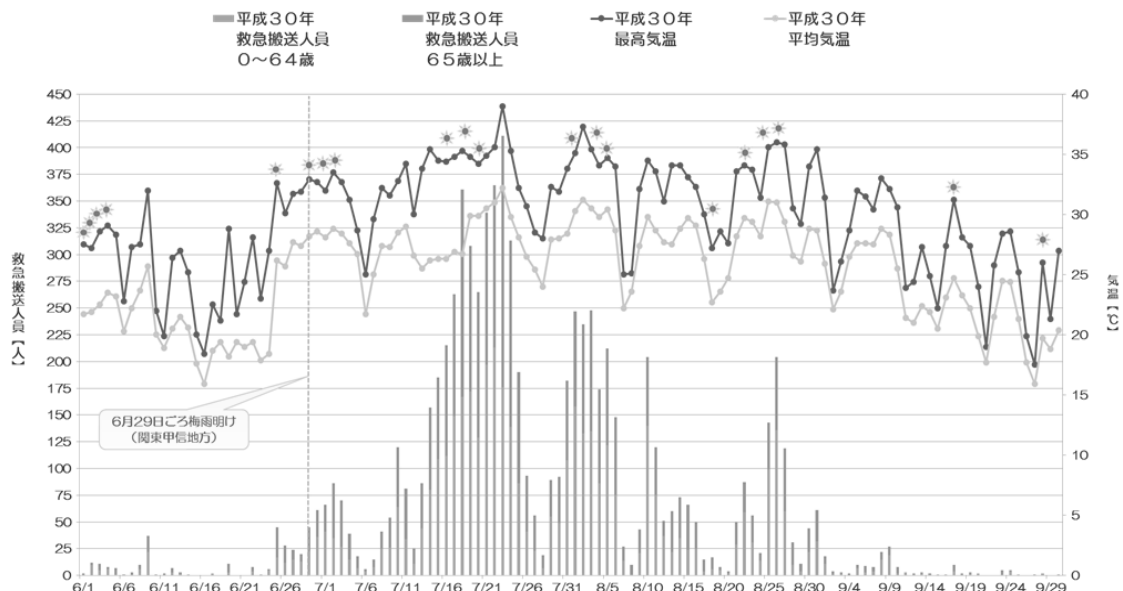
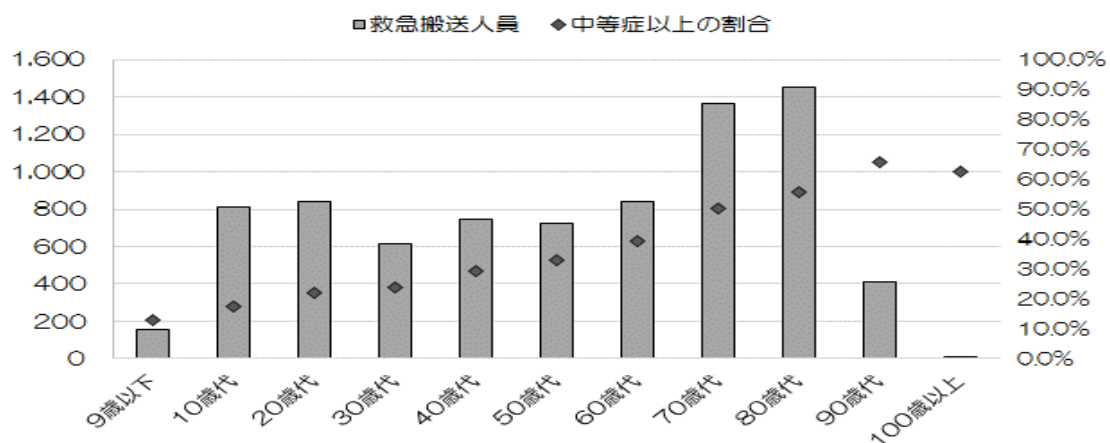


図15 救急搬送人員と気温（平成30年6月～9月）

3 年齢層別搬送人員と中等症以上の割合

熱中症による救急搬送人員と中等症以上の割合をみると、70代、80代の搬送が多く、加齢とともに中等症以上の割合が高くなっています（図16）。



	9歳以下	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	100歳以上
救急搬送人員	153人	810人	839人	615人	746人	723人	842人	1,363人	1,449人	412人	8人
中等症以上の割合	13.1%	17.4%	22.2%	24.1%	29.5%	33.1%	39.3%	50.2%	55.6%	65.5%	62.5%

図16 救急搬送人員と中等症以上の割合（％）（平成30年6月～9月）

4 発生場所別搬送人員

熱中症による救急搬送人員と発生場所をみると、住宅等居住場所での発生が最も多く、全体の約4割を占めています（図17）。

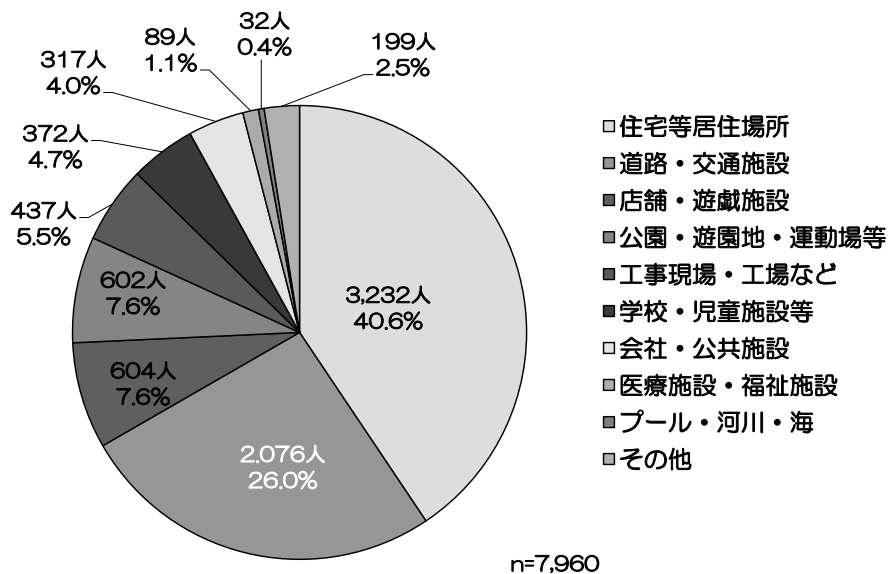


図17 発生場所別搬送人員（平成30年6月～9月）

5 熱中症の救急搬送事例

【事例1 乳幼児が車の中で熱中症になった事例】

保育園に子どもを迎えに来た母親は、車両後部座席のチャイルドシートに子どもを乗車させ、車両の鍵を車内に置いた状態でドアを閉鎖したところ車両ドアが施錠されてしまい、子どもが閉じ込められた。

（平成30年8月 1歳 軽症 気温31.1℃ 湿度72%）

【事例2 運動中に熱中症になった事例】

体育館でバレーボールの試合をしていた際に頭痛・嘔気があり、涼しい部屋に移動して休んでいたが症状が改善せず、嘔吐した。

（平成30年8月 10代 中等症 気温29.9℃ 湿度65%）

【事例3 室内で熱中症になった事例】

エアコンが壊れており、居室内の高温環境の中で過ごしている際に息苦しくなった。

（平成30年7月 80代 中等症 気温28.0℃ 湿度79%）

※ 気温、最高気温、平均気温、湿度は気象庁の気象統計情報の東京で測定した数値を使用しています。

6 熱中症予防のポイント

- 暑さに身体を慣らしていく。
- 高温・多湿・直射日光を避ける。
- 水分補給は計画的、かつ、こまめにする。
- 運動時などは計画的な休憩をする。
- 規則正しい生活をする。
- 乗用車等の車内の温度は短時間で高温になるため、子供だけにしない。
- 子供は大人よりも身長が低いため、地面から受ける輻射熱が高く、高温環境にさらされている。

7 応急手当

熱中症の応急処置

もし、あなたのまわりの人が熱中症になってしまったら……。落ち着いて、状況確かめて対処しましょう。最初の措置が肝心です。

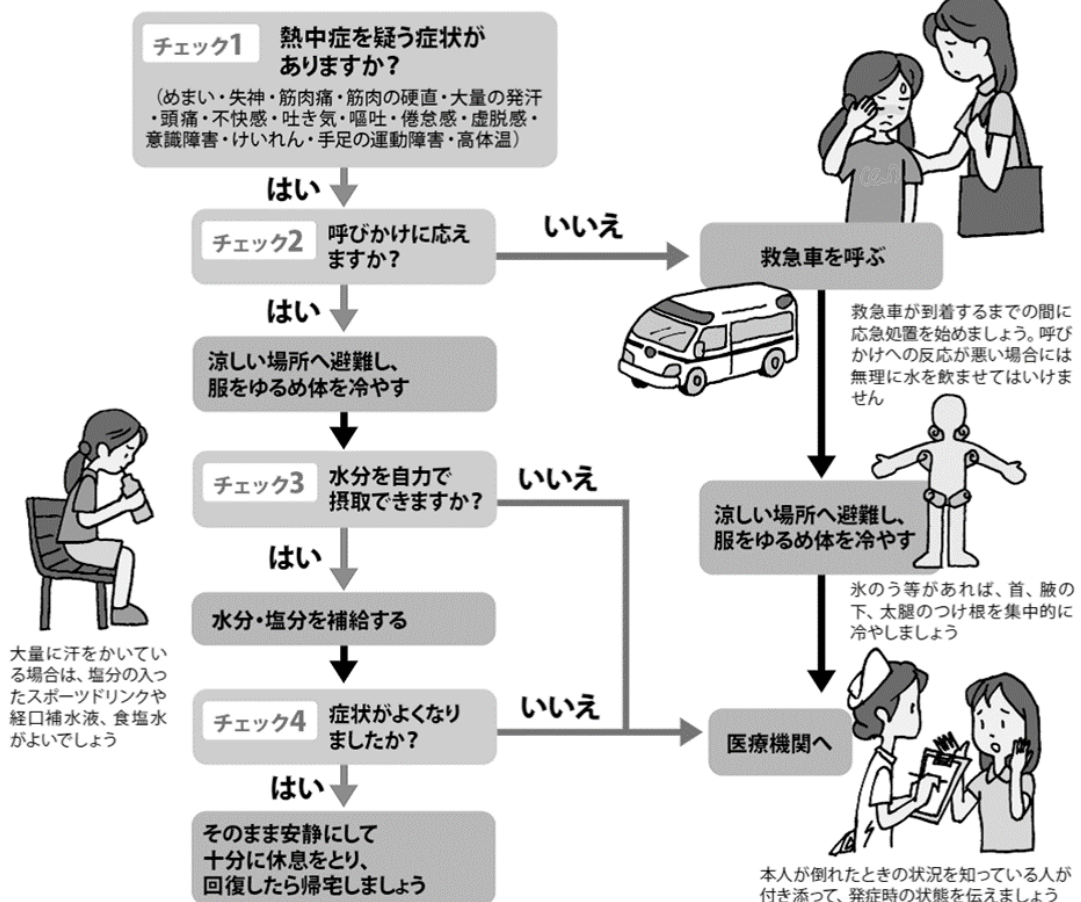


図2-7 熱中症を疑ったときには何をすべきか

※ 参考文献：熱中症環境保健マニュアル2018（環境省）

第1部 平成30年の概要

1 年別発生状況

東京消防庁管内では、日常生活における事故により平成26年から平成30年の5年間に、668,441人が救急搬送され、年々増加しています。平成30年中は、144,548人で、過去5年間で最も多く救急搬送されています（図1-1）。

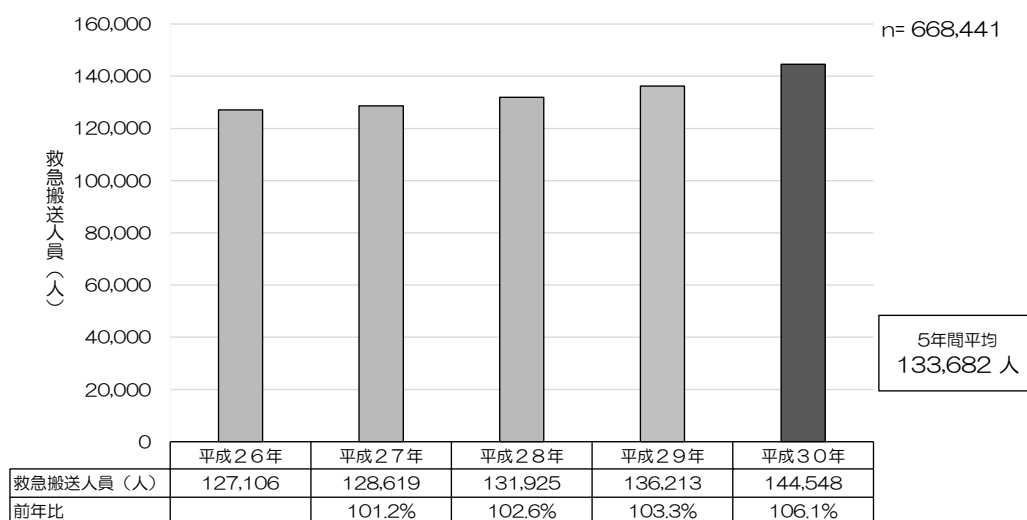


図1-1 年別の救急搬送人員

2 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別の救急搬送人員をみると、乳幼児と高齢者に多く発生しています（図1-2）。

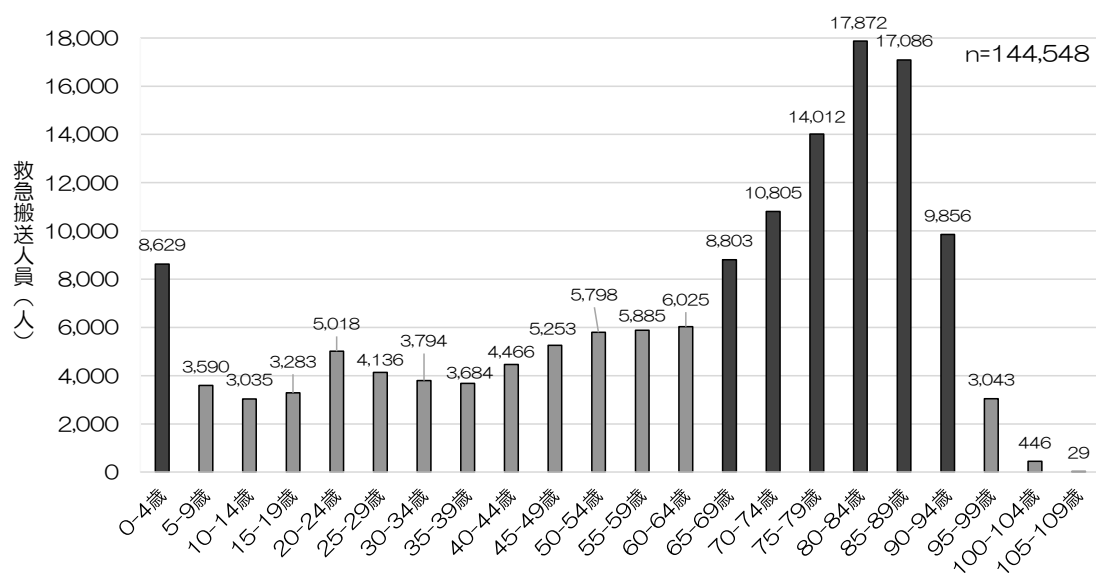


図1-2 年齢層別の救急搬送人員

3 月別・時間帯別搬送人員

月別にみると、7月の15,276人が最も多く、次いで8月に13,565人が救急搬送されています（図1－3）。

時間帯別でみると、9時台から20時台までは7,000人以上が救急搬送されています（図1－4）。

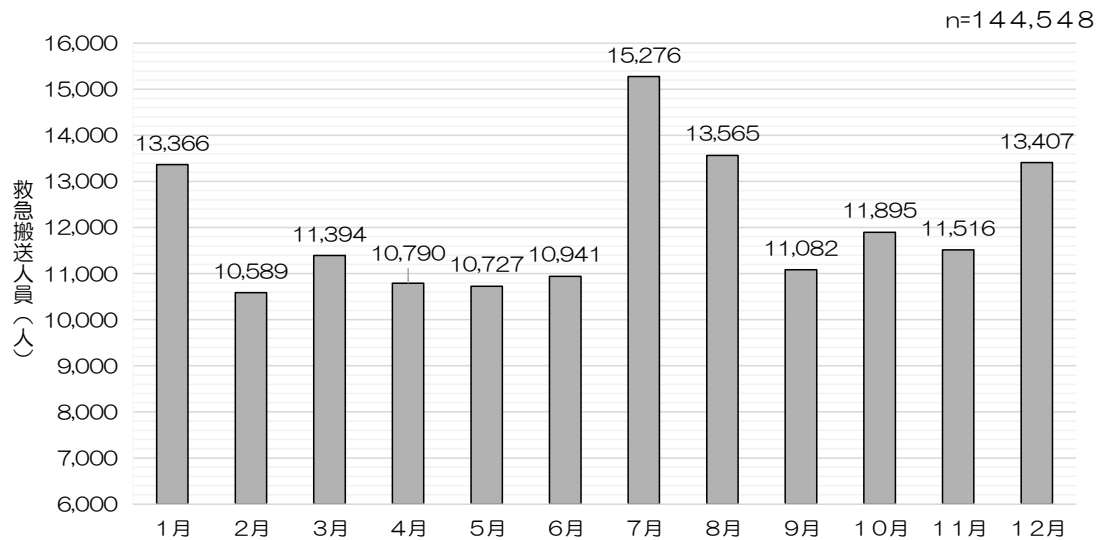


図1－3 月別の救急搬送人員

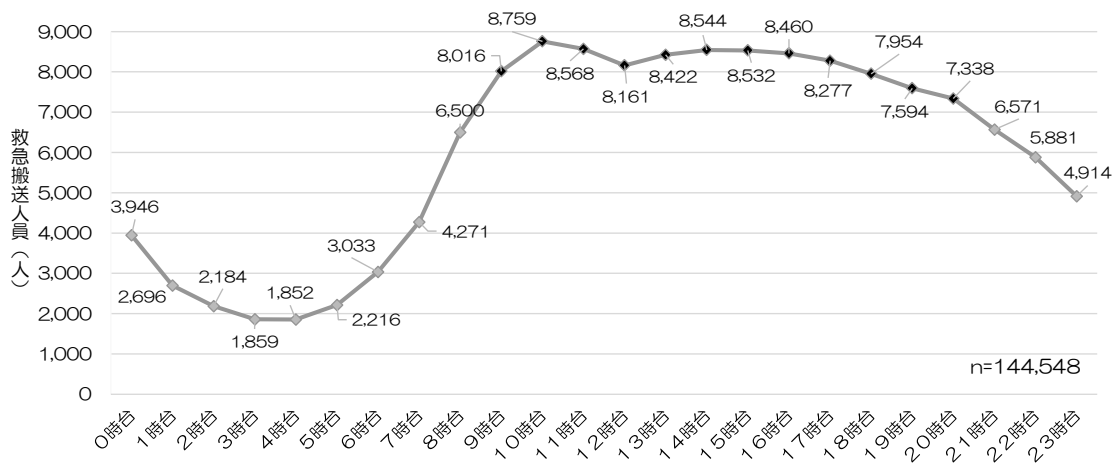


図1－4 時間帯別の救急搬送人員

4 事故種別ごとの搬送人員

事故種別ごとにみると、「ころぶ」事故が全体の約6割を占め最も多くなっています。
 なお、事故種別ごとの概要については第2部で取り上げています（図1－5）。

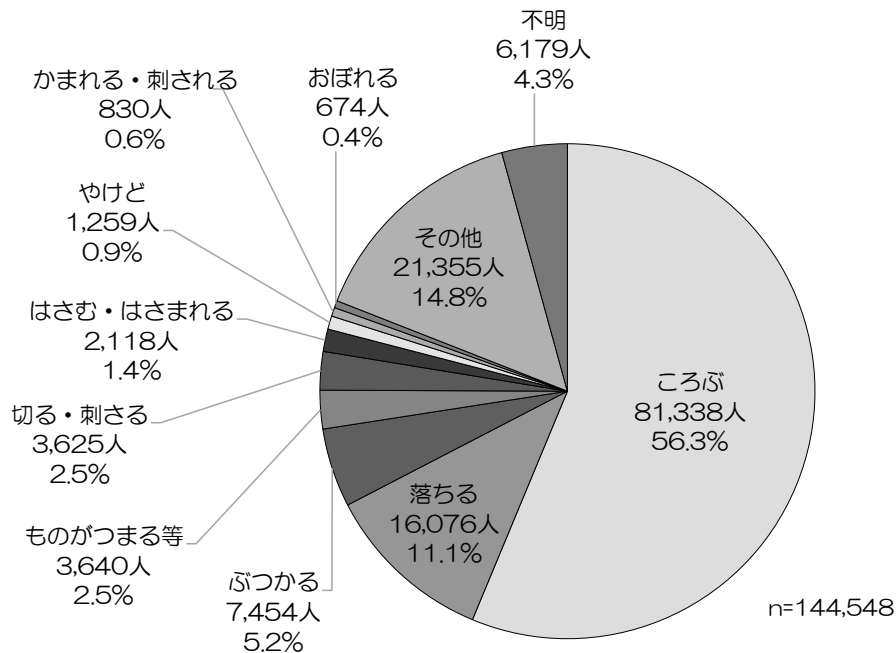


図1－5 事故種別ごとの救急搬送人員

5 発生場所別搬送人員

発生場所別にみると、約半数が住宅等居住場所で発生しています（図1－6）。

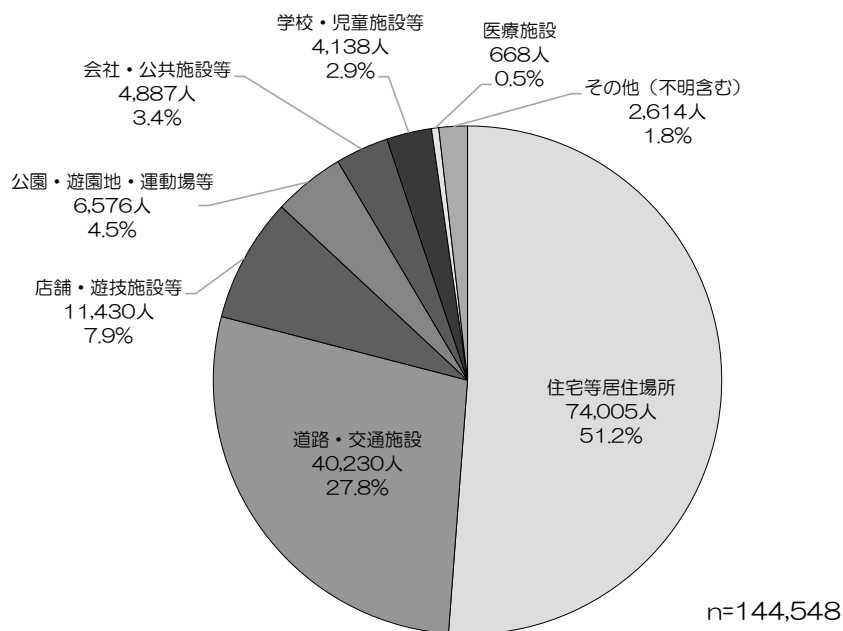


図1－6 発生場所別救急搬送人員

6 初診時程度別搬送人員

救急車で搬送された人の初診時程度をみると、3割以上が入院を必要とする中等症以上で、生命に危険を及ぼすような事故も発生しています（図1－7）。

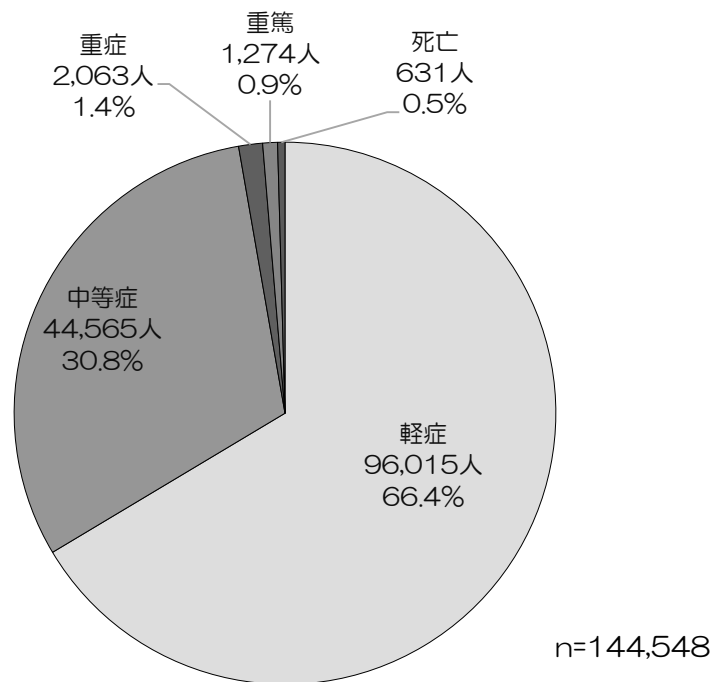


図1－7 初診時程度別救急搬送人員

第2部 種別ごとにみる事故

ここでは、日常生活における事故を「ころぶ」「落ちる」「ぶつかる」「ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む（ものがつまる等）」「切る・刺さる」「はさむ・はさまれる」「やけど」「かまれる・刺される」「おぼれる」の種別ごとに取り上げています。最も多いのは「ころぶ」事故で、全体（※その他、不明を除く）の69.5%となっています（図2-1）。

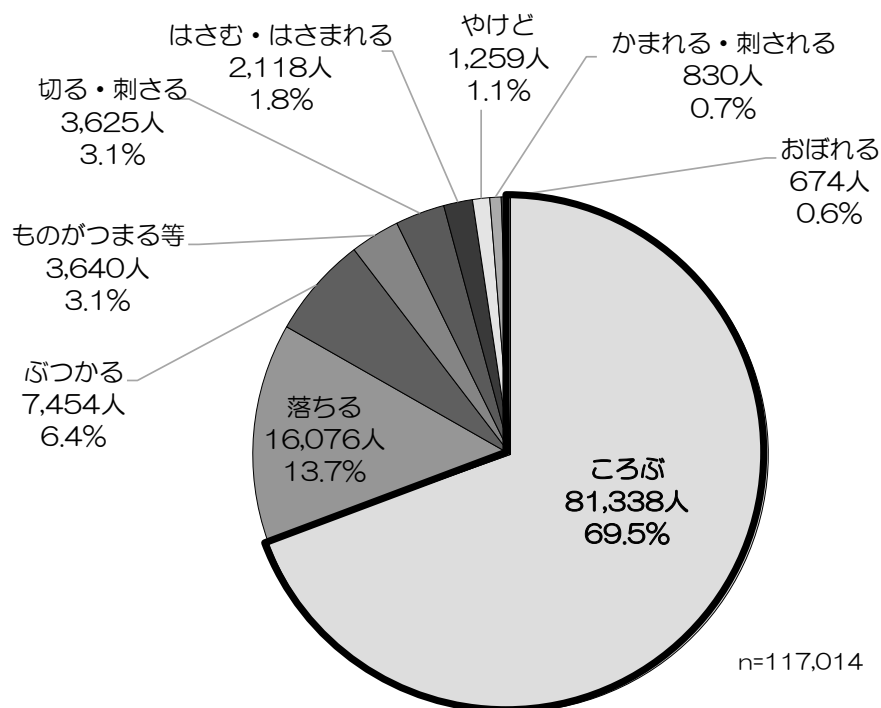


図2-1 事故の種類別構成割合（その他、不明を除く）

※熱中症は事故種別「その他」に該当します。（ピックアップ2 P.11）

種別ごとにみると、事故は年代によって特徴があります。乳幼児は他の年代に比べ、ものがつまったり、ものを誤って飲み込む事故の割合が多く、またやけどの割合も多くなっています。10代ではぶつかる事故の割合が多くなっています。また、高齢になるにつれて「ころぶ」事故の割合が増えています（図2-2、図2-3）。

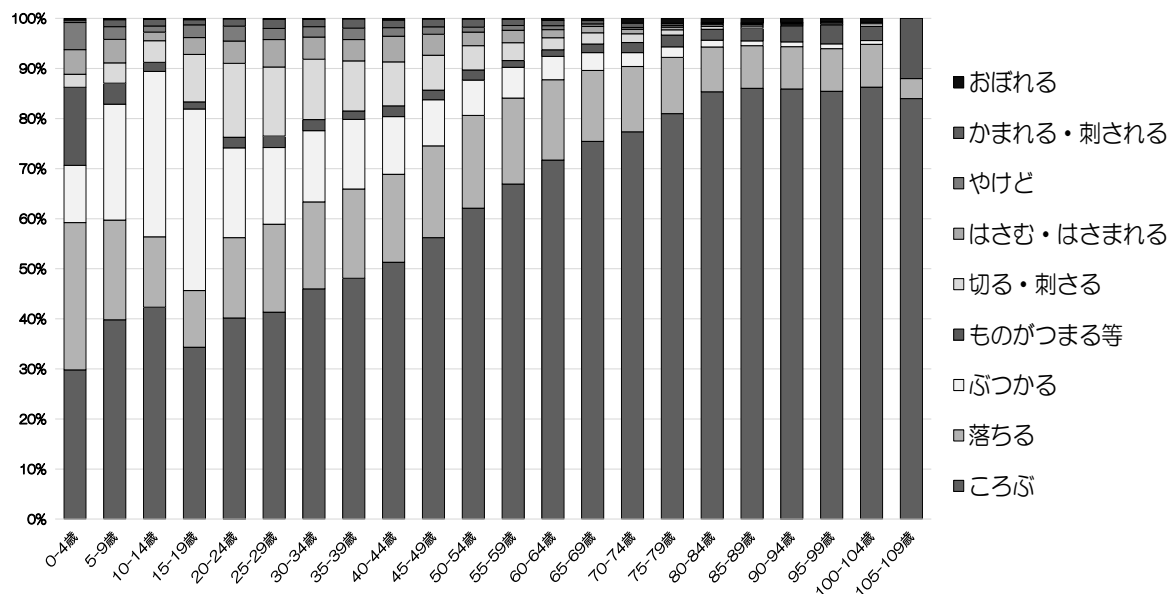


図2-2 年齢別の事故の種類別構成割合（その他、不明を除く）

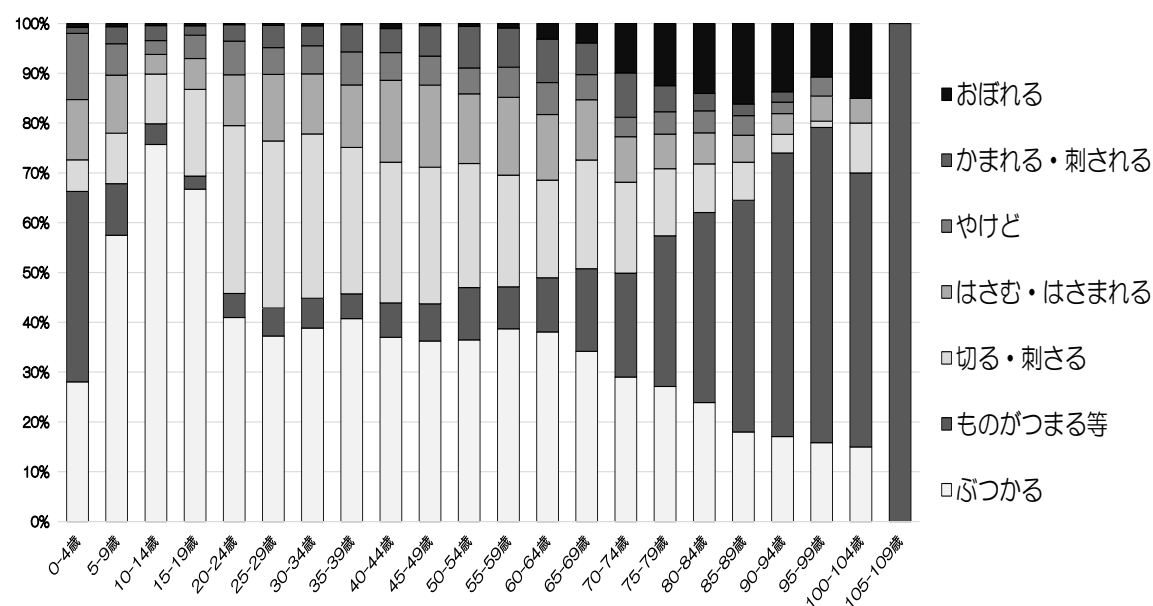


図2-3 年齢別の事故の種類別構成割合（ころぶ、落ちる、その他、不明を除く）

1 ころぶ

(1) 年別搬送人員

「ころぶ」事故は日常生活における事故の中で最も多く、平成30年中は81,338人が救急搬送されています（図2-4）。

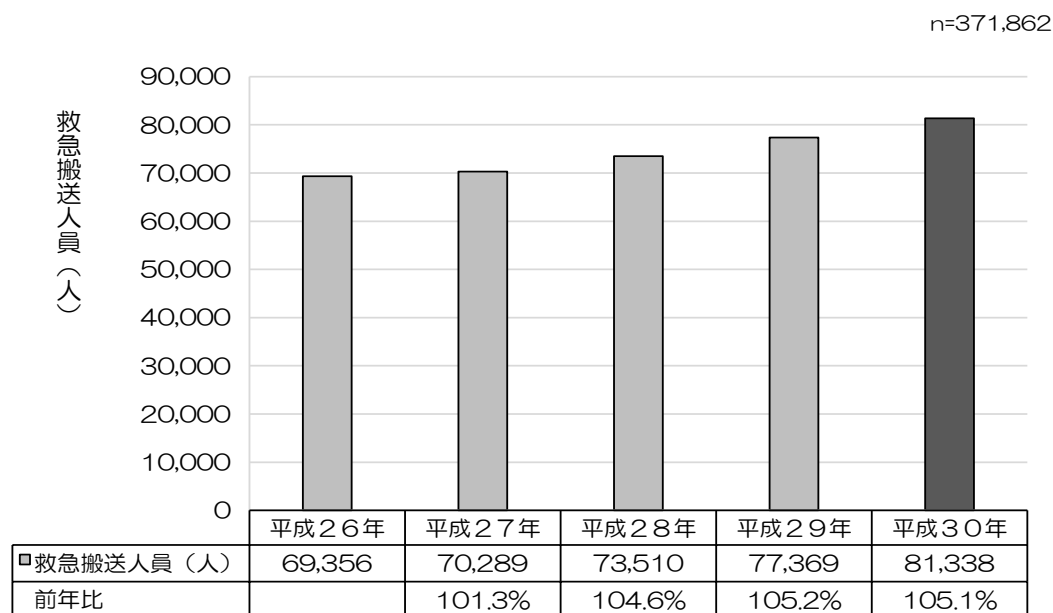


図2-4 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、65歳以上の高齢者が多く救急搬送されています（図2-5）。

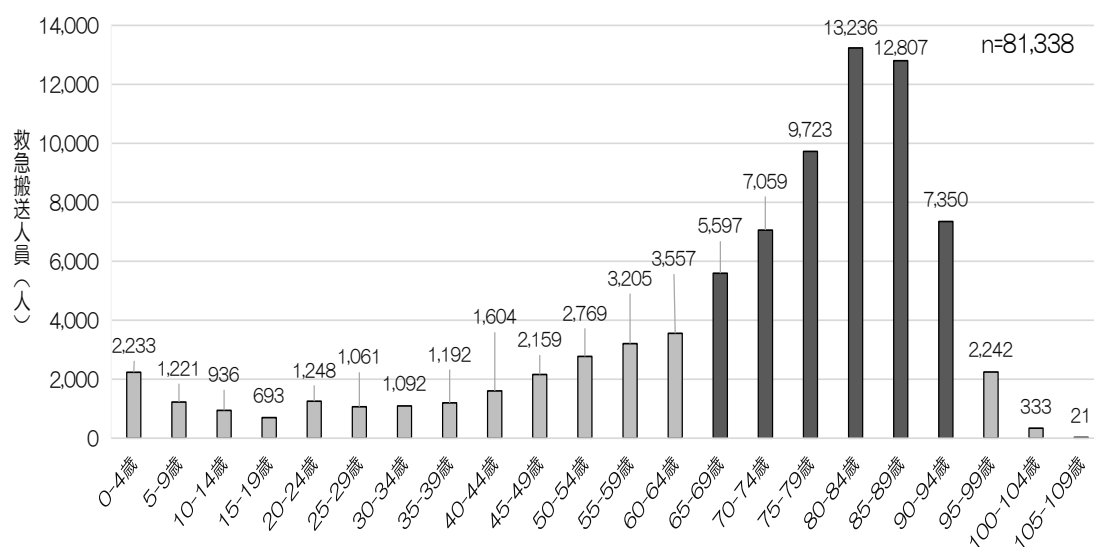


図2-5 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く、次いで道路・交通施設となっています（図 2-6）。

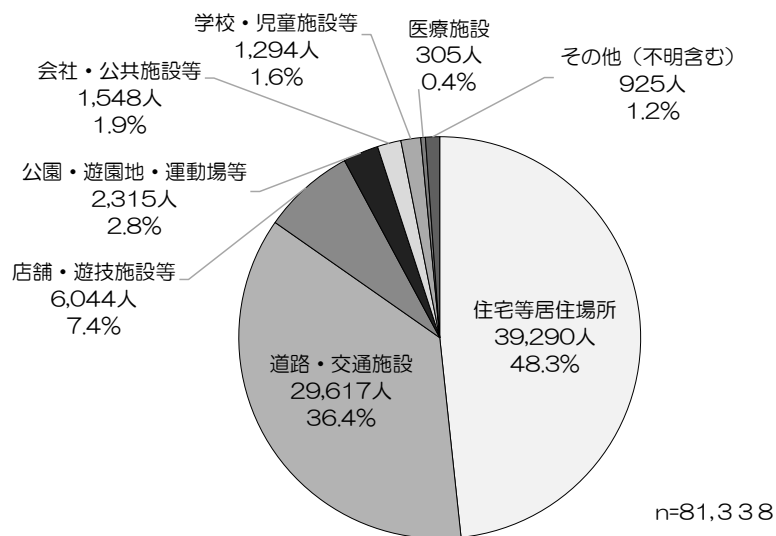


図 2-6 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

「ころぶ」事故では、3割を超える人が中等症以上と診断されています（図 2-7）。

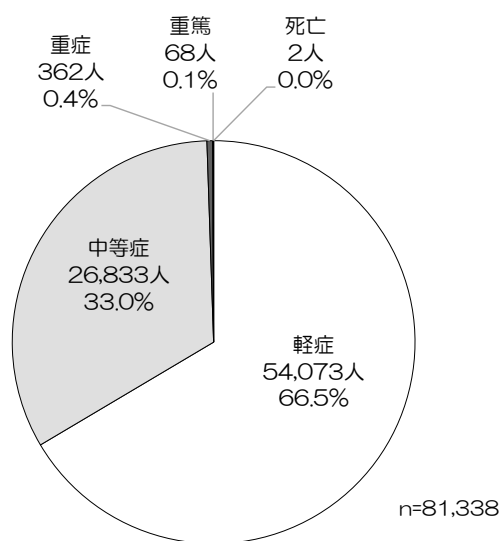


図 2-7 初診時程度別救急搬送人員

【事例 ころぶ】

自宅玄関先で段差につまづいて転倒し、頭部を受傷した。（80代 重症）

2 落ちる

(1) 年別搬送人員

階段や脚立などから「落ちる」事故で、平成30年中に16,076人が救急搬送されています（図2-8）。

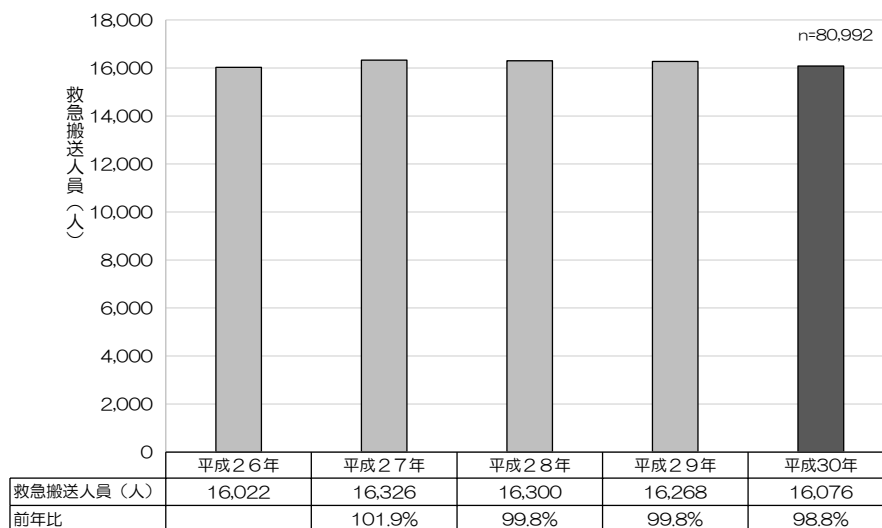


図2-8 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、0歳から4歳が最も多く、2,202人が救急搬送されています（図2-9）。

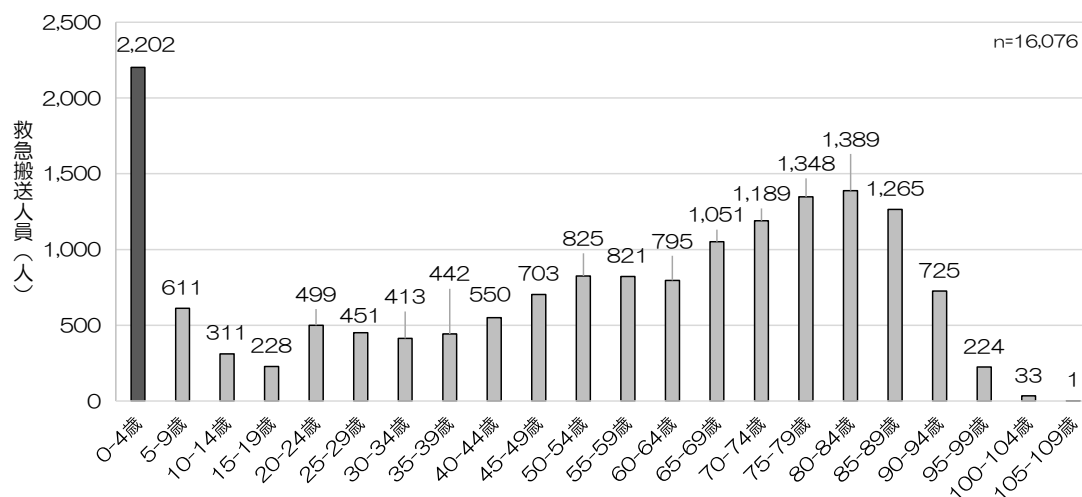


図2-9 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く半数を超えています。次いで、道路・交通施設、店舗・遊技施設等で多く発生しています（図 2-10）。

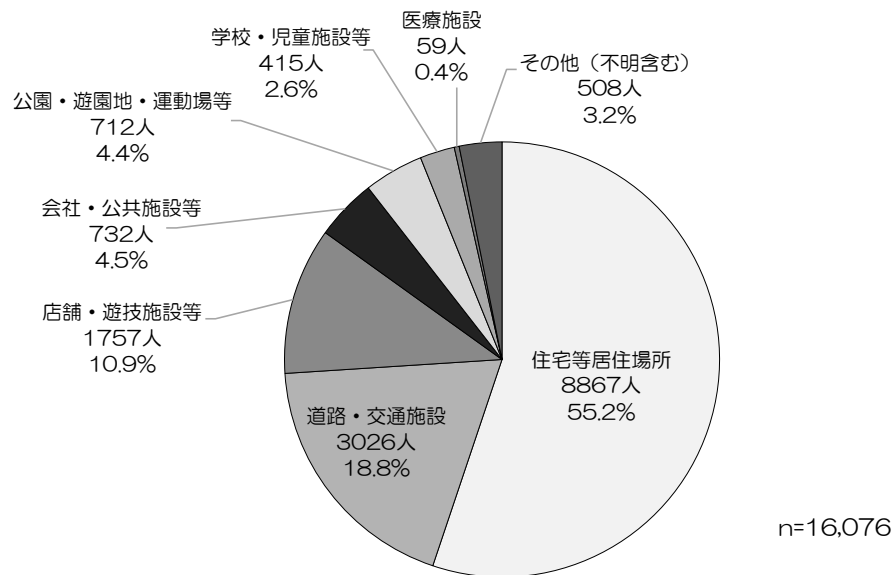


図 2-10 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

「落ちる」事故では、3割を超える人が中等症以上と診断されています（図 2-11）。

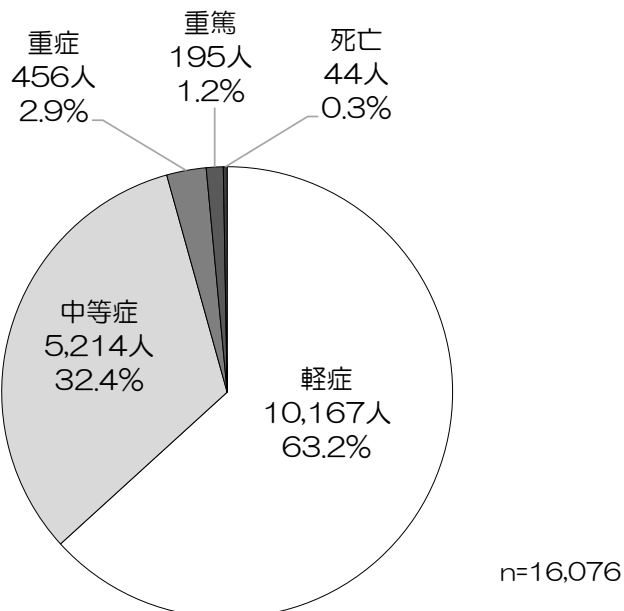


図 2-11 初診時程度別救急搬送人員

【事例 落ちる】

自宅3階のベランダで、エアコン室外機に上って遊んでいたところ、誤ってベランダの手すりを乗り越えて墜落した。（5歳 中等症）

3 ぶつかる

(1) 年別搬送人員

飛んできたボールに「ぶつかる」事故や、走っていて人やものに「ぶつかる」事故で、平成30年中に7,454人が救急搬送されています（図2-12）。

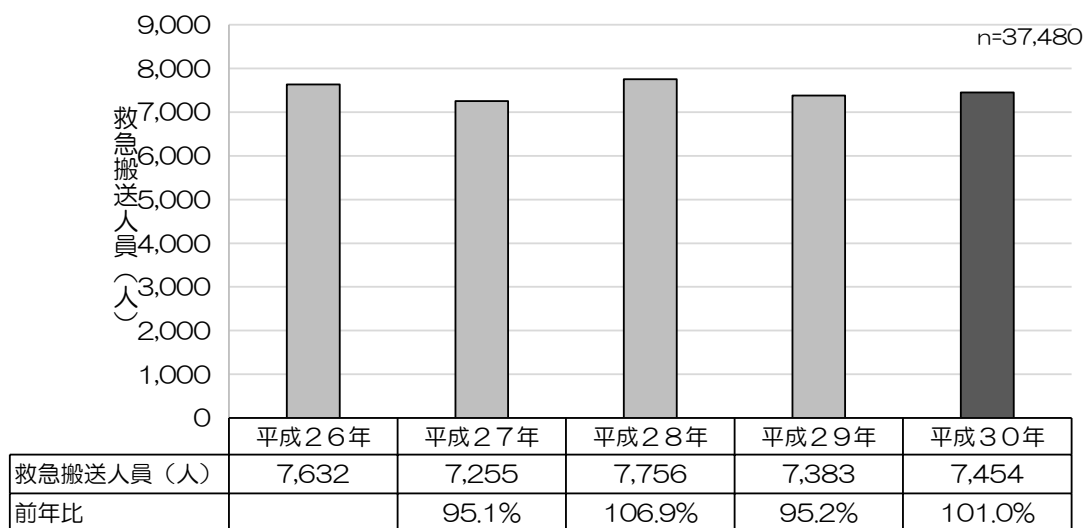


図2-12 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

最も多いのは、0歳から4歳となっており、10歳から19歳の10代も多く救急搬送されています。「ぶつかる」事故は、加齢とともに減少しています（図2-13）。

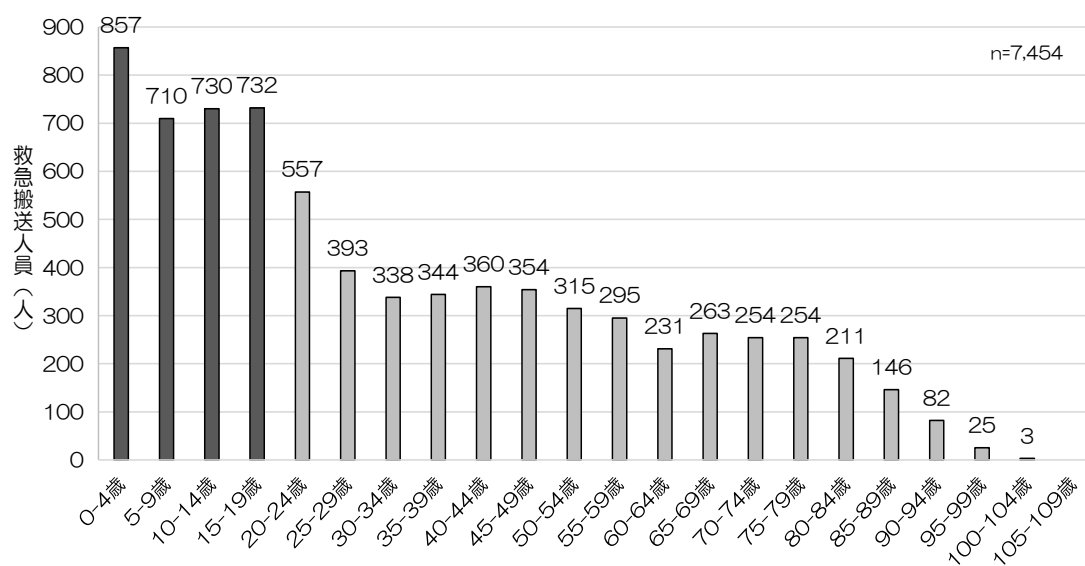


図2-13 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く、次いで、公園・遊園地・運動場等での事故が多く発生しています（図 2-14）。

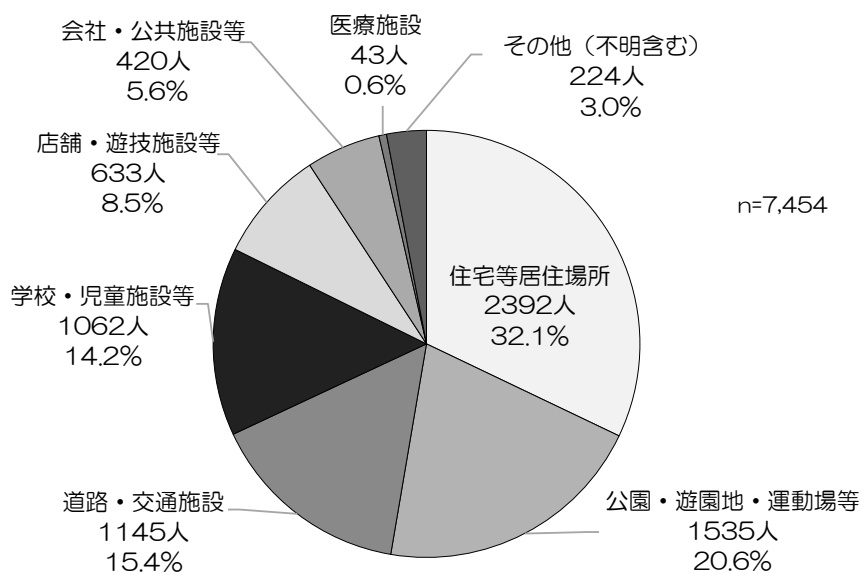


図 2-14 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

全体の8割を超える人が軽症ですが、重症や重篤、死亡と診断される事故も発生しています（図 2-15）。

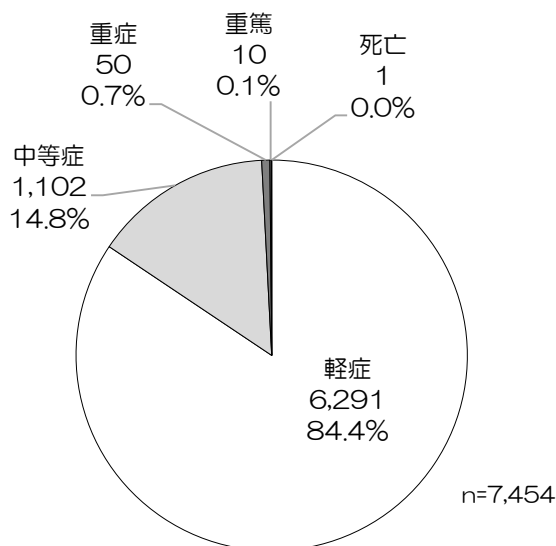


図 2-15 初診時程度別救急搬送人員

【事例 ぶつかる】

駅構内の階段を降りている際に、通行人とぶつかり転倒し受傷した。
（80代 中等症）

4 ものがつまる・ものが入る・誤って飲み込む

(1) 年別搬送人員

食べ物を喉につまらせたり、たばこや玩具などを飲み込んでしまう事故により、平成30年中は3,640人が救急搬送されています（図2-16）。

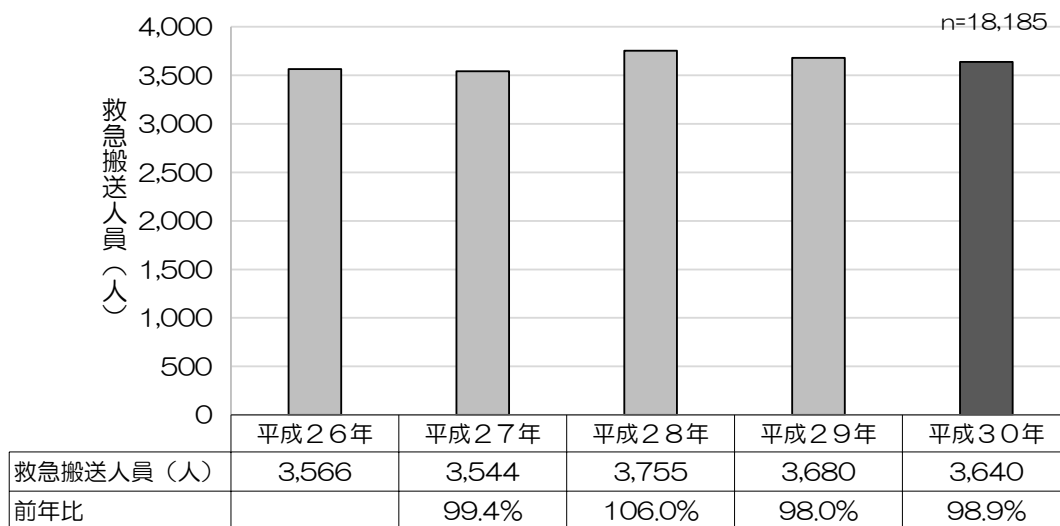


図2-16 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、0歳から4歳が最も多く、1,167人が救急搬送されています（図2-17）。

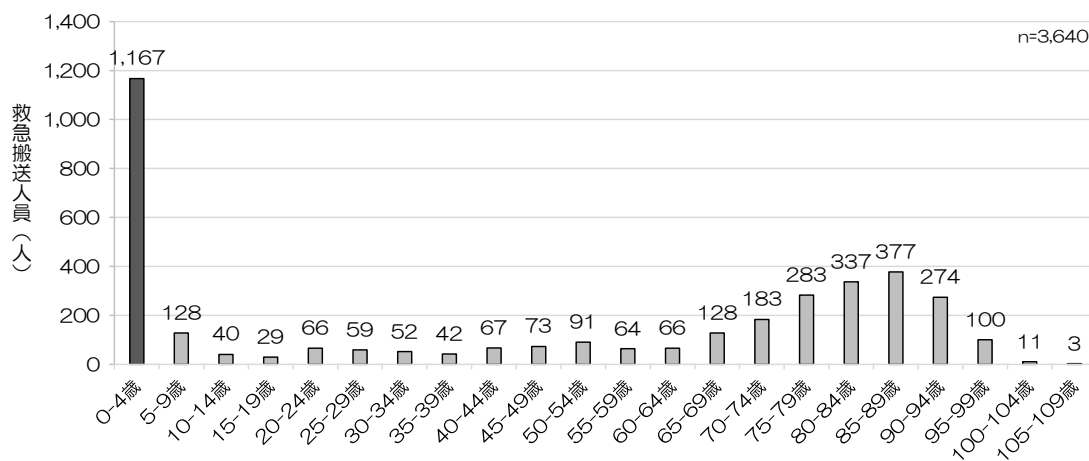


図2-17 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が8割以上と最も多く、次いで、店舗・遊技施設等が多くなっています（図2-18）。

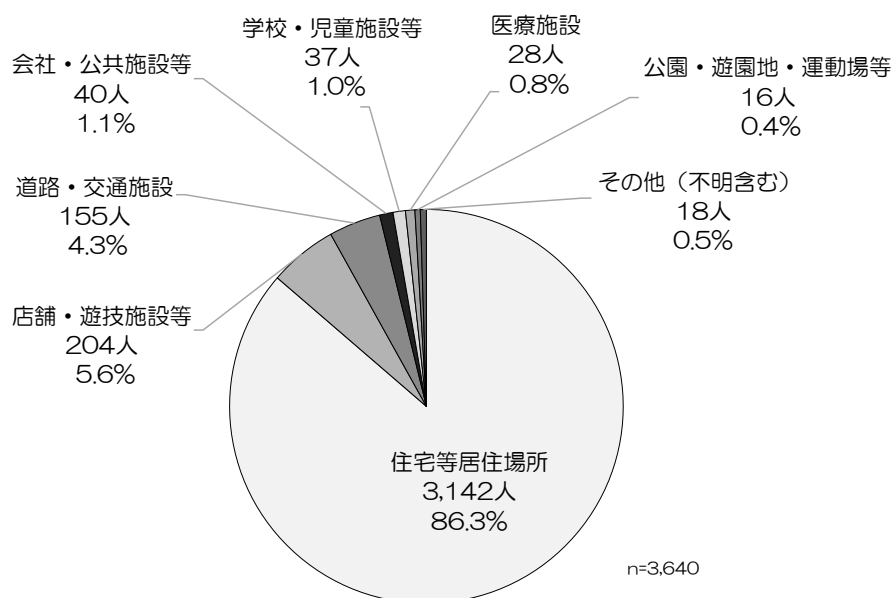


図2-18 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

「ものがつまる等」の事故では、約3割を超える人が中等症以上と診断されています（図2-19）。

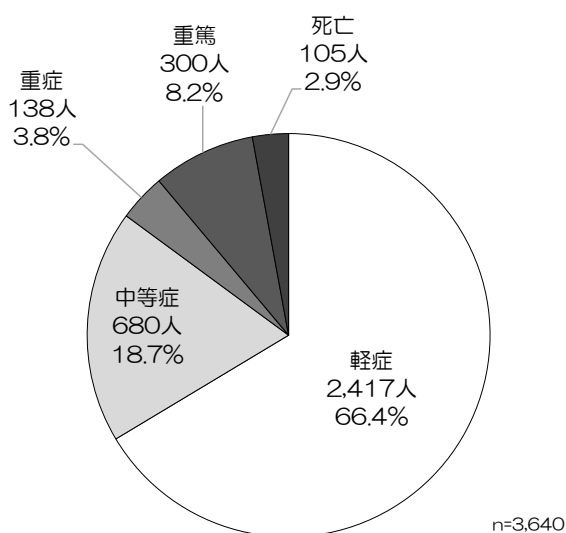


図2-19 初診時程度別救急搬送人員

【事例 ものがつまる】

自宅のベッドで小さく切った餅を食べていたところ喉に詰まり、その後意識がなくなった。（90代 重篤）

5 切る・刺さる

(1) 年別搬送人員

刃物で切ったり、何かが刺さったりする事故で、平成30年中に3,625人が救急搬送されています（図2-20）。

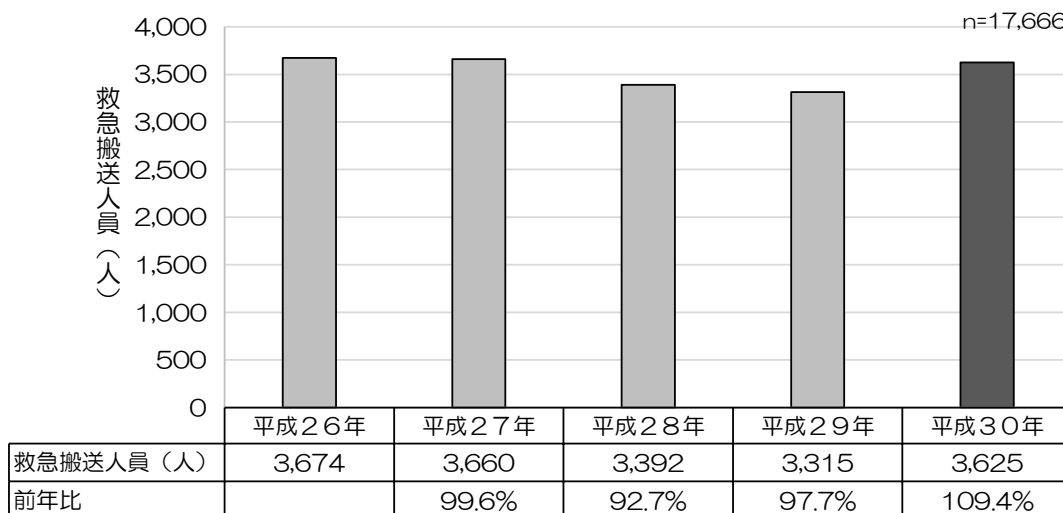


図2-20 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、20歳代での救急搬送人員が300人を超えて多くなっています（図2-21）。

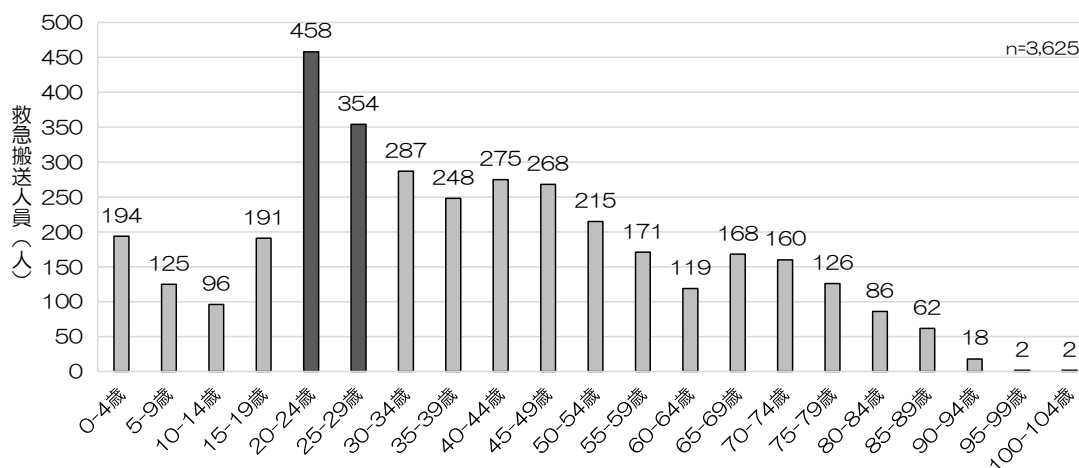


図2-21 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が最も多く約6割を占めており、次いで店舗・遊技施設等、会社・公共施設等が続いて多くなっています（図2-22）。

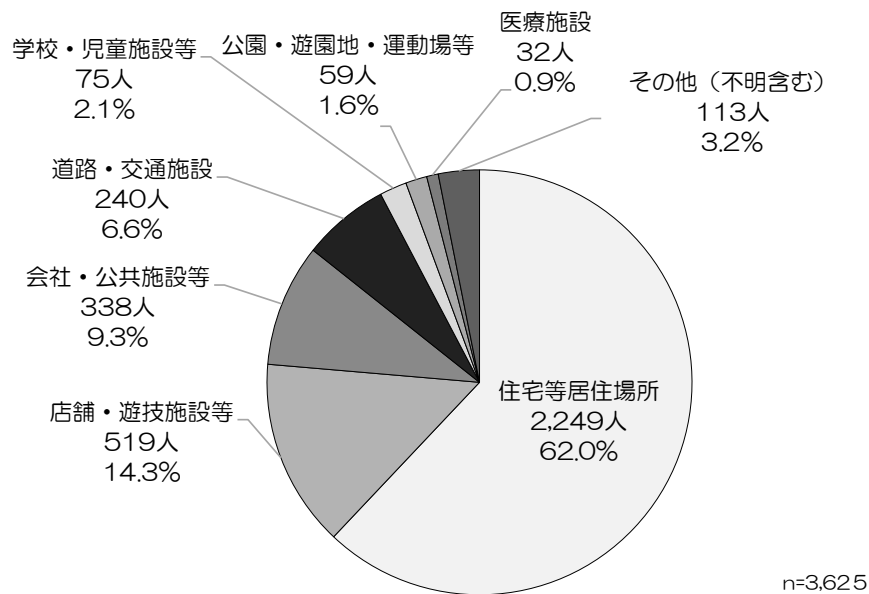


図2-22 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

「切る・刺さる」事故では、全体の1割を超える人が中等症以上と診断されます（図2-23）。

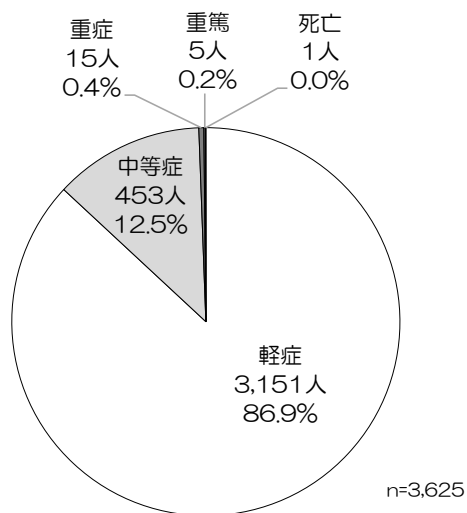


図2-23 初診時程度別救急搬送人員

【事例 切る】

電動のこぎりで作業中、電動のこぎりが跳ね返り、左前腕を受傷した。
（70代 中等症）

6 はさむ・はさまれる

(1) 年別搬送人員

ドアや機械、鉄道車両の戸袋などにはさまれたり巻き込まれたりする事故で、平成30年中に2,118人が救急搬送されています（図2-24）。

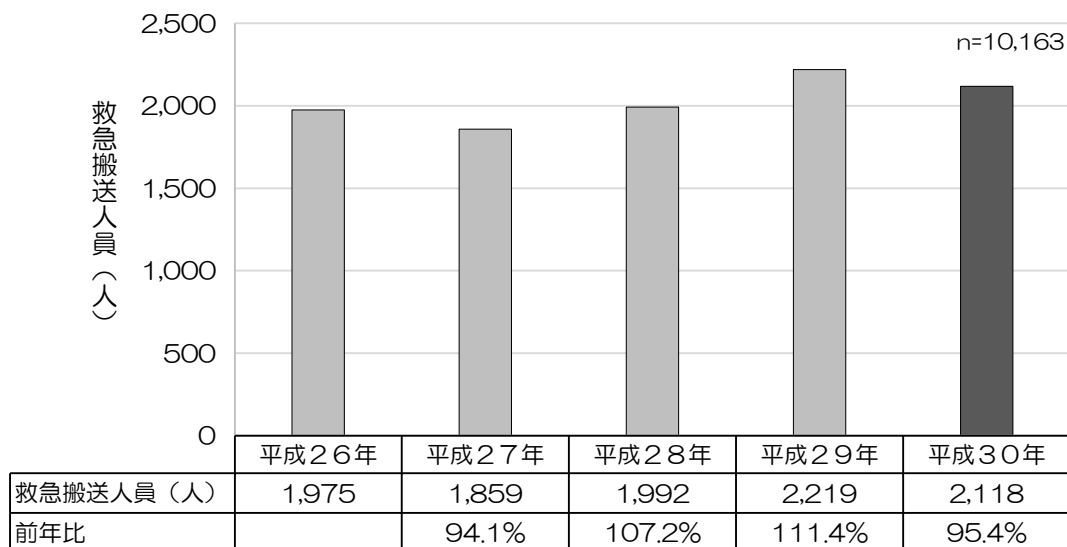


図2-24 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、0歳から4歳が最も多く370人が救急搬送されています（図2-25）。

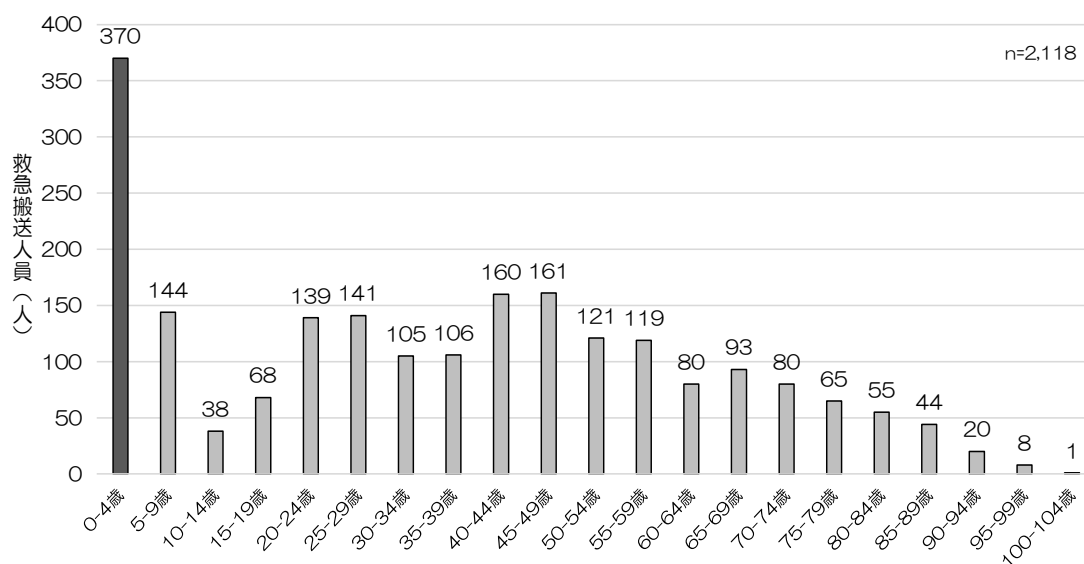


図2-25 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所が約3割と最も多く、次いで道路・交通施設、会社・公共施設等でも多く発生しています（図2-26）。

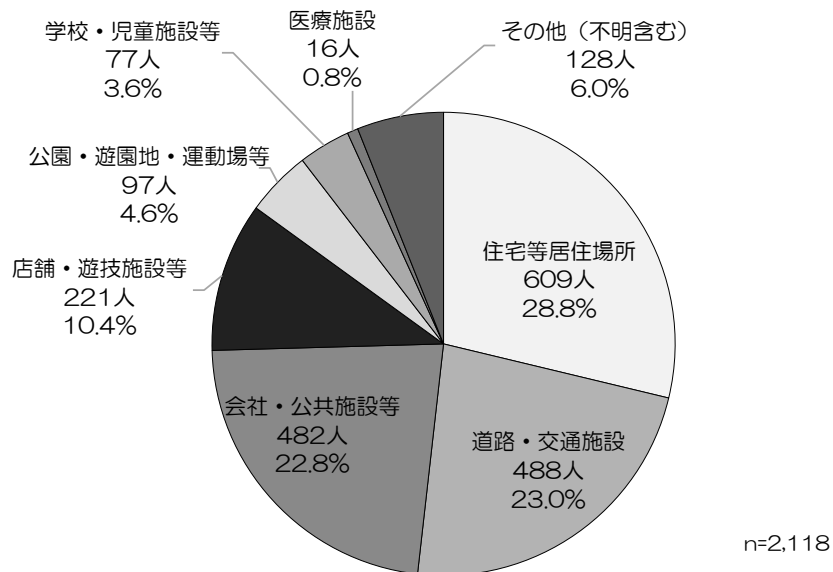


図2-26 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

「はさむ・はさまれる」事故では、約3割が中等症以上と診断されています（図2-27）。

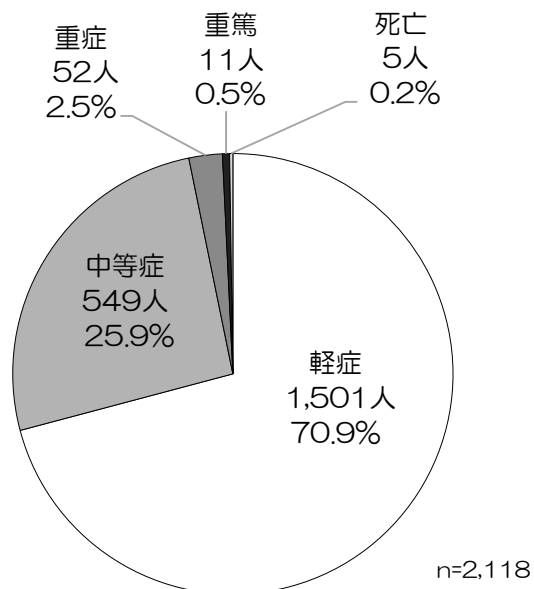


図2-27 初診時程度別救急搬送人員

【事例 はさまれる】

エレベーターに子どもを抱っこしたまま乗っていた際、扉が開いた時に、子どもの手指が戸袋に挟みこまれた。（1歳 軽症）

7 やけど

(1) 年別搬送人員

熱湯や天ぷら油等によるやけどで、平成30年中に1,259人が救急搬送されています（図2-28）。

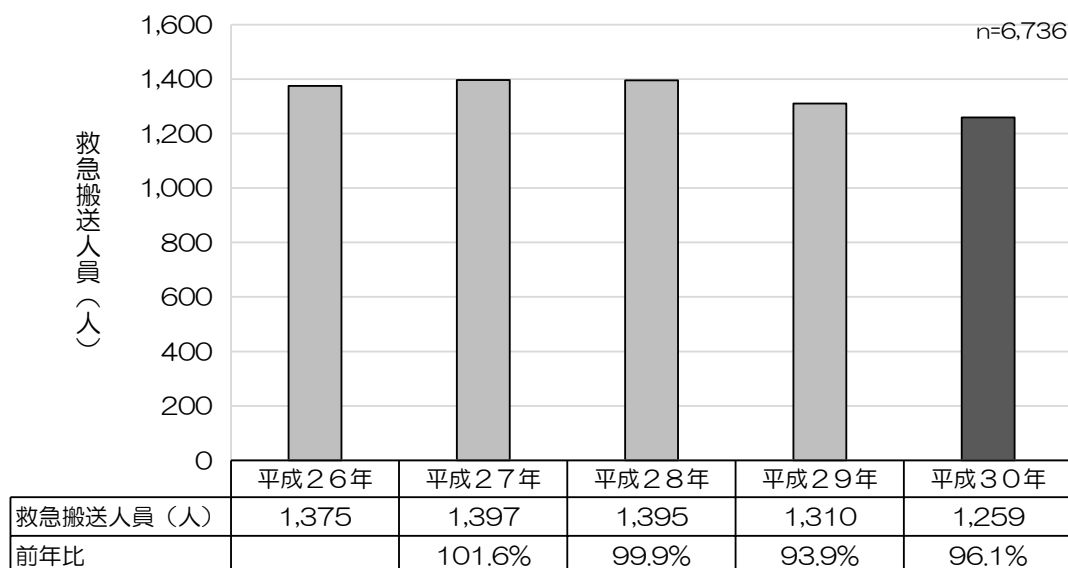


図2-28 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、0歳から4歳が最も多く、405人が救急搬送され、全体の3割以上を占めています（図2-29）。

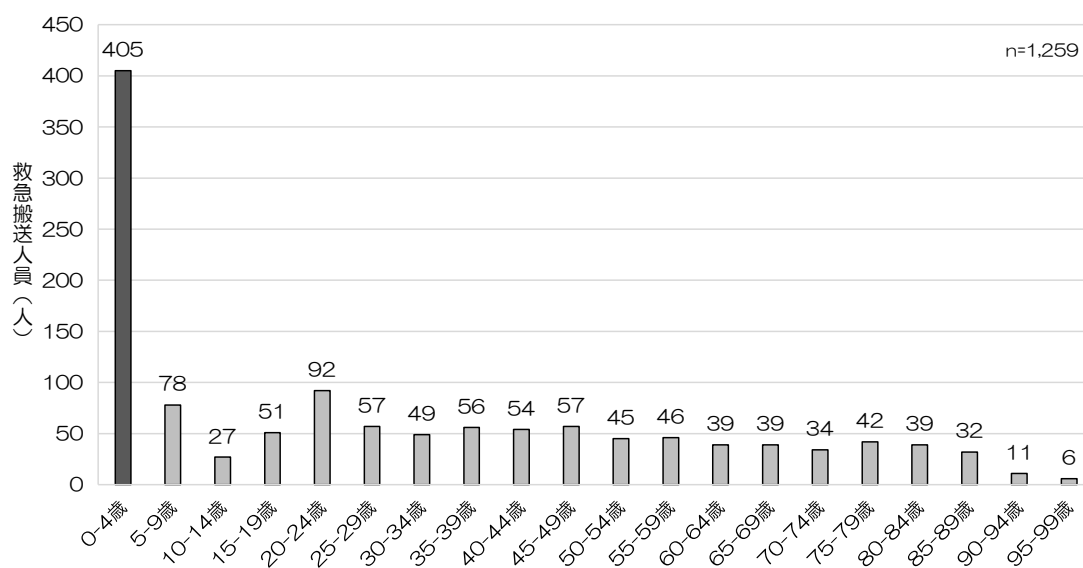


図2-29 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所の割合が最も多く、75.1%となっています（図 2-30）

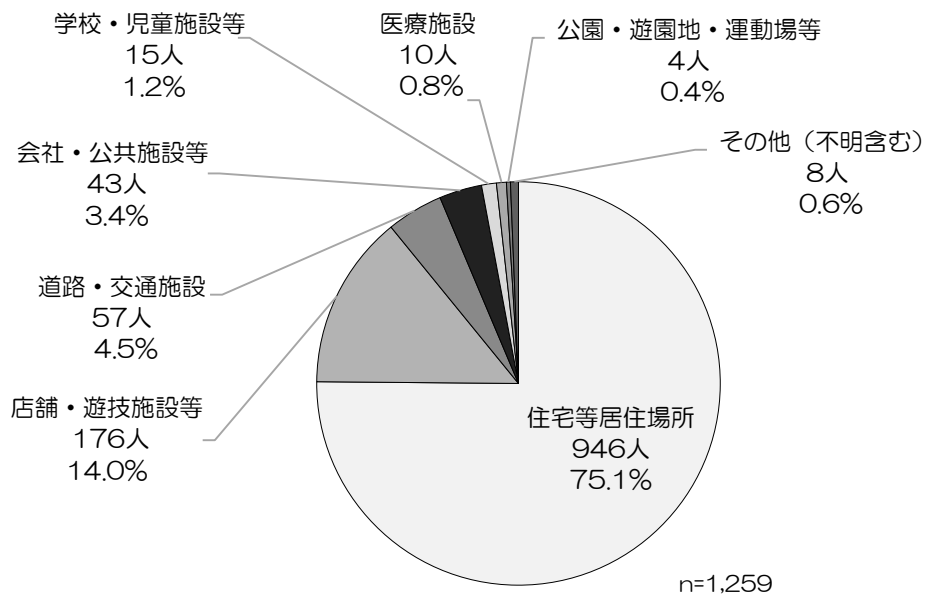


図 2-30 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

初診時程度では、約2割が中等症以上と診断されています（図 2-31）。

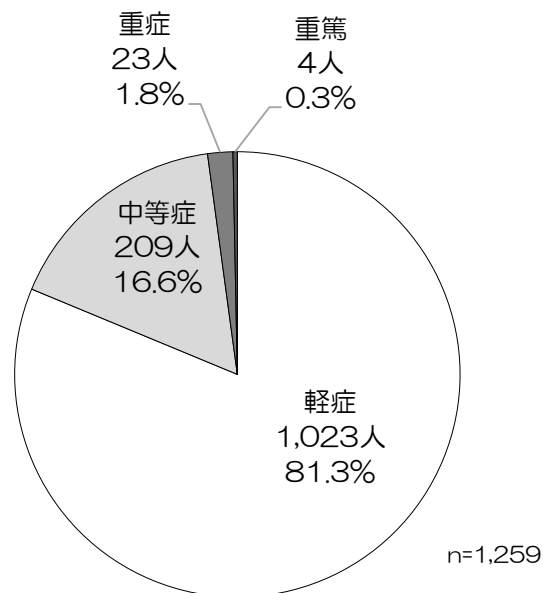


図 2-31 初診時程度別救急搬送人員

【事例 やけど】

テーブルの上に置いてあった、熱湯を注いだばかりの急須を倒してしまいやけどを負った。（8カ月 中等症）

8 かまれる・刺される

(1) 年別搬送人員

犬にかまれる、蜂に刺される等で、平成30年中に830人が救急搬送されています（図2-32）。

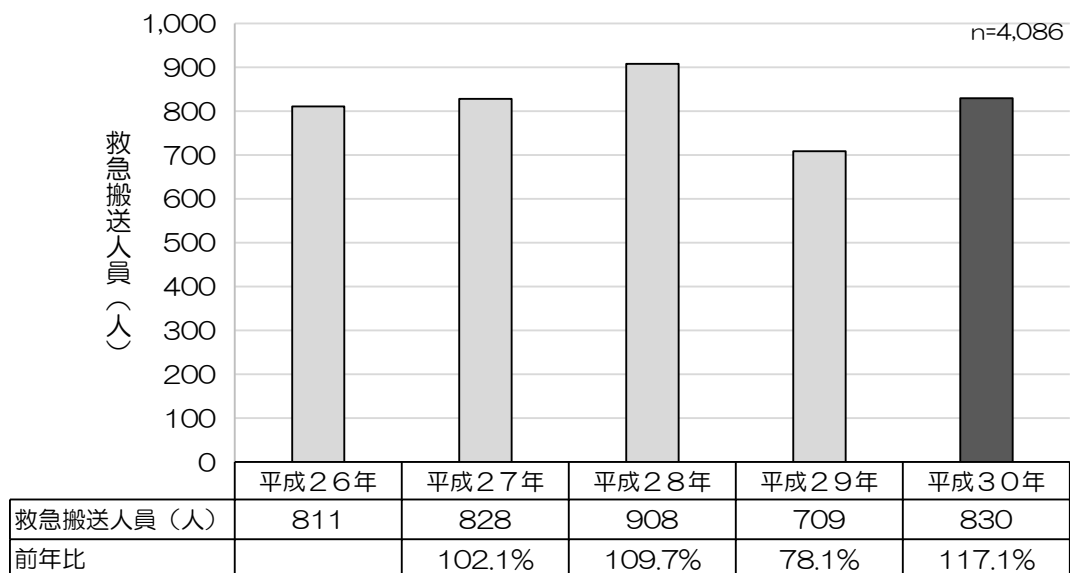


図2-32 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別では、70歳から74歳が多くなっています（図2-33）。

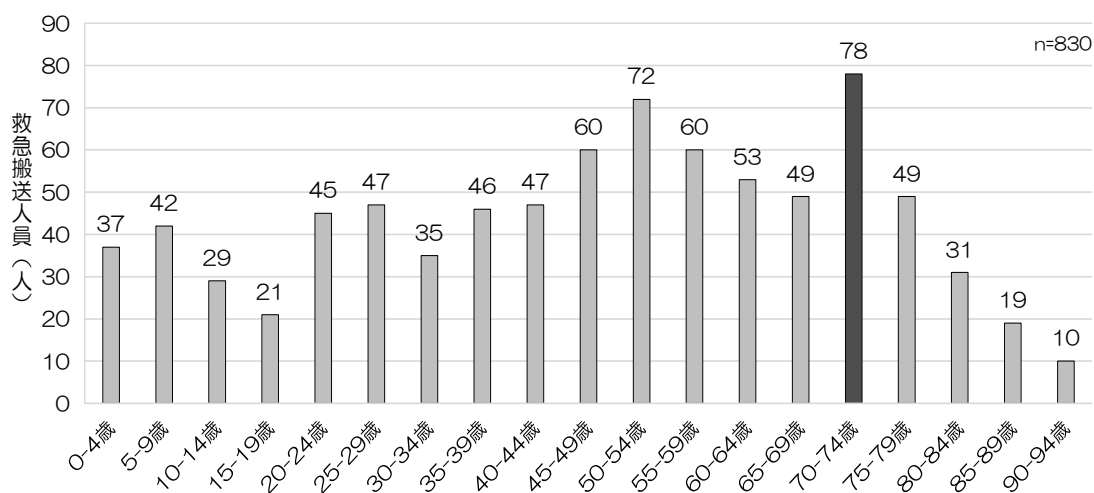


図2-33 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

発生場所別にみると、住宅等居住場所が多く、次いで、道路・交通施設が多くなっています（図 2-34）。

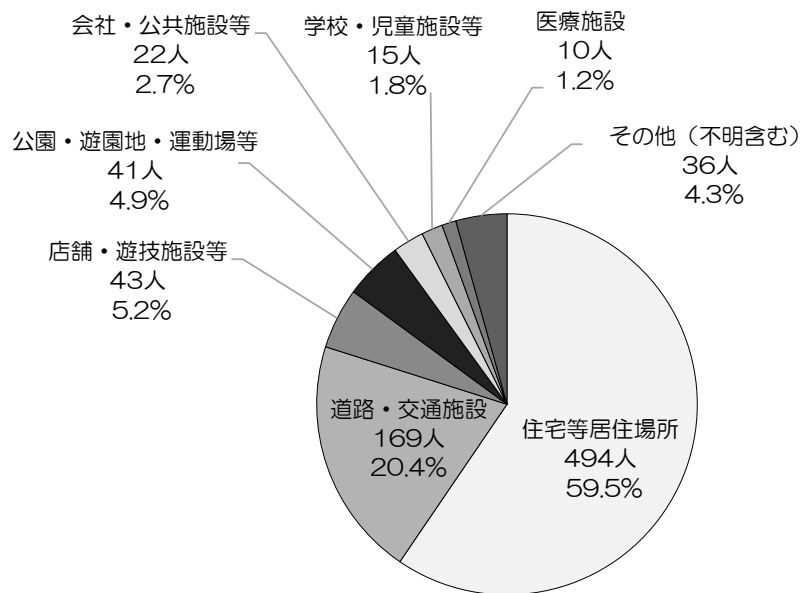


図 2-34 発生場所別救急搬送人員 n=830

(4) 初診時程度別搬送人員

軽症が約9割を占めていますが、中等症と診断される事故も発生しています（図 2-35）。

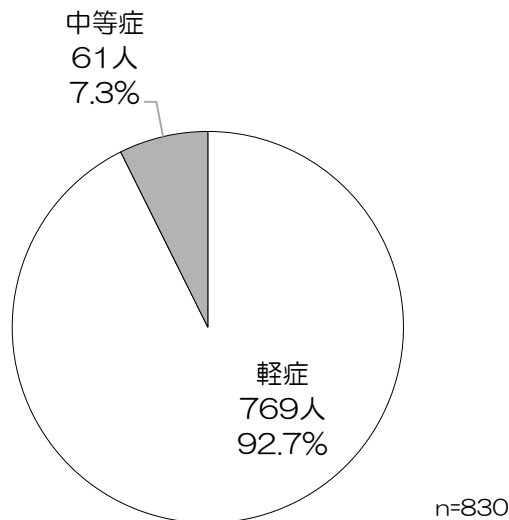


図 2-35 初診時程度別救急搬送人員 n=830

【事例 刺される】

自宅の庭で花の手入れをしている最中に、蜂に指を刺されてしまった。

（70代 軽症）

9 おぼれる

(1) 年別搬送人員

浴槽や海、河川等での事故で、平成30年中は674人が救急搬送されます（図2-36）。

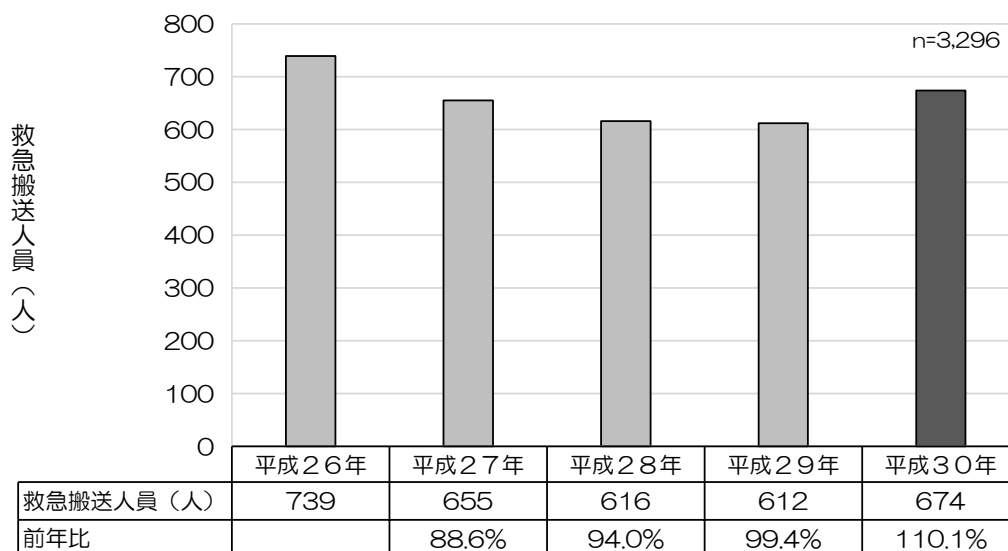


図2-36 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

「おぼれる」事故は、乳幼児、高齢者に多く発生しています（図2-37）。

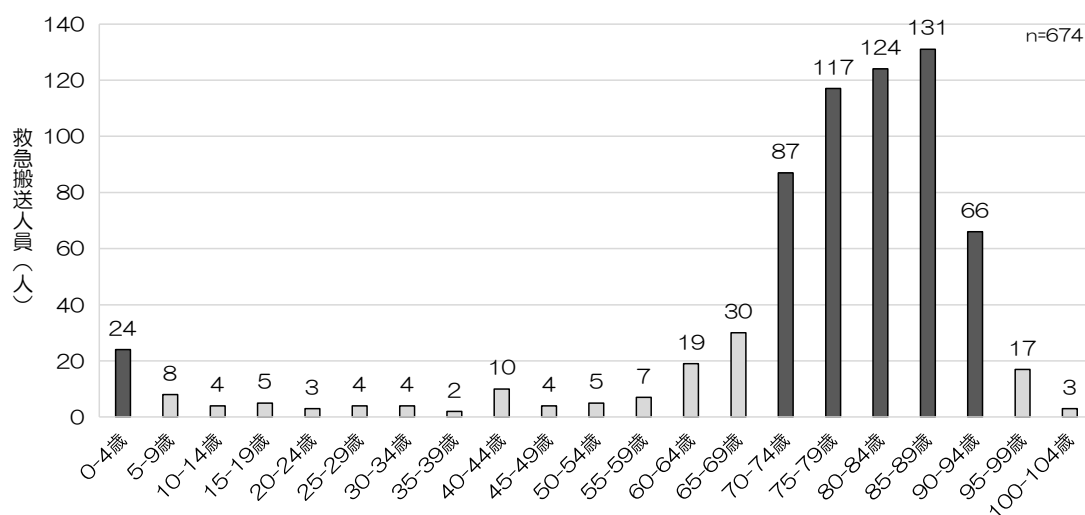


図2-37 年齢層別救急搬送人員

(3) 発生場所別搬送人員

「おぼれる」事故の発生場所は、住宅等居住場所が84.0%で最も多くなっています（図2-38）。

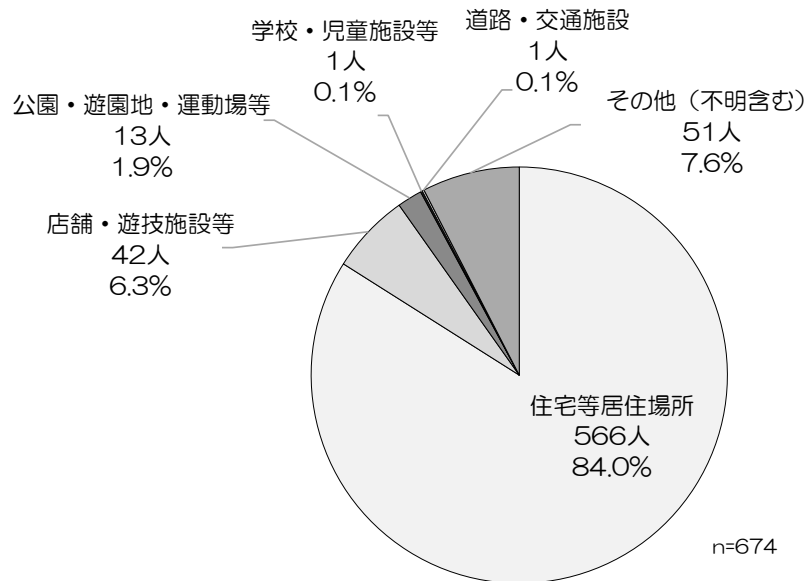


図2-38 発生場所別救急搬送人員

(4) 初診時程度別搬送人員

初診時程度別にみると、9割以上が中等症以上を診断されており、さらに約8割が重篤又は死亡と診断されています（図2-39）。

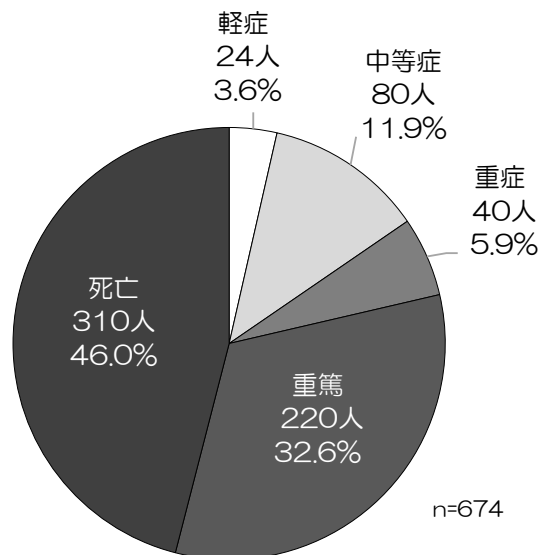


図2-39 初診時程度別救急搬送人員

【事例 おぼれる】

入浴後、浴室から出てこないため心配した家族が確認したところ、浴槽内に沈み、呼びかけに応答のない傷病者を発見した。（50代 重篤）

第3部 年齢からみた事故

ここでは、年齢層別での比較や乳幼児、就学区分、成人、高齢者などの年齢区分ごとに事故の傾向や事故の要因等を取り上げています。

平成30年中の救急搬送人員を年齢層別にみると、70代が2万人、80代が3万人を超え、多く救急搬送されています。また、若い年代をみると9歳以下が12,219人と多く救急搬送されています（図3-1）。

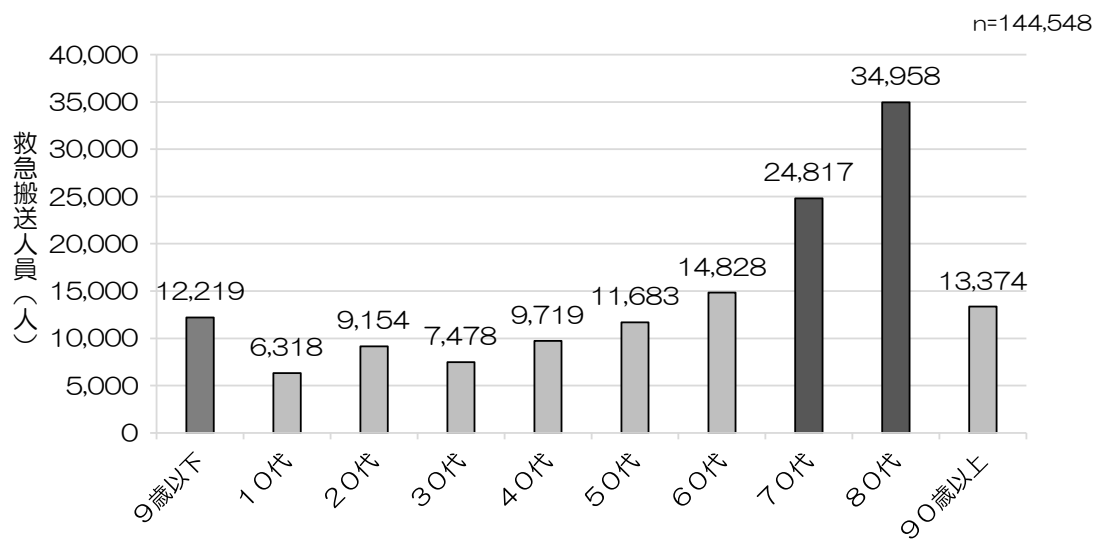


図3-1 年齢層別救急搬送人員

1 年齢層別での比較

(1) 年別搬送人員での比較

過去5年間の救急搬送人員を比較すると、9歳以下から60代はほぼ横ばいで推移している一方で80代、90歳以上では増加傾向にあります。80代については毎年1,000人以上のペースで増加しています（図3-2から図3-11）。

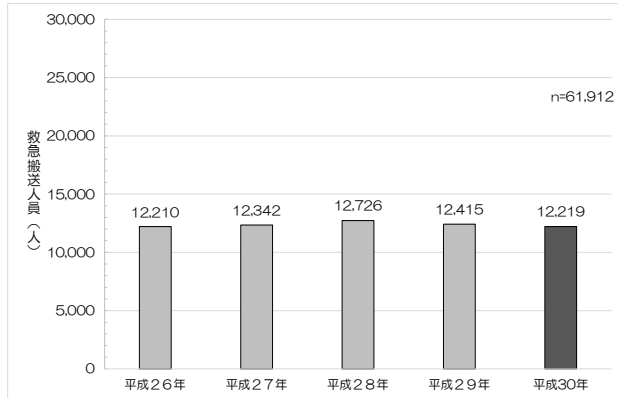


図3-2 9歳以下

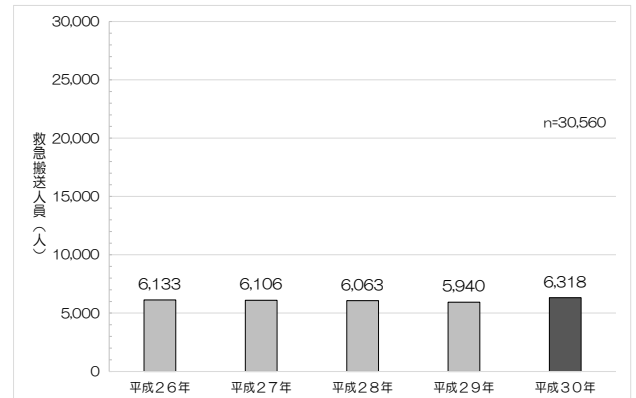


図3-3 10代

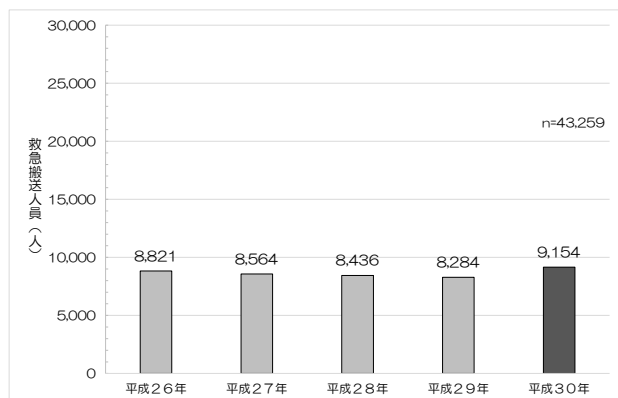


図3-4 20代

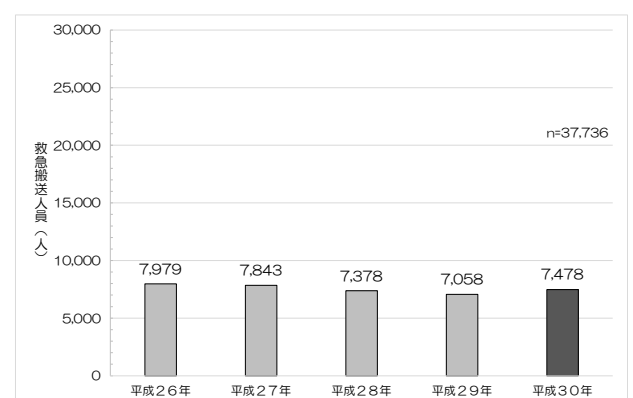


図3-5 30代

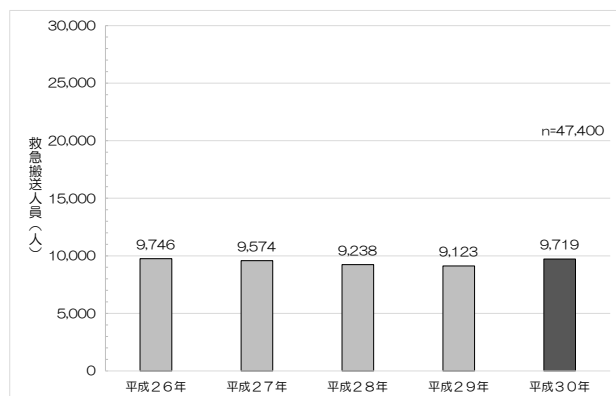


図3-6 40代

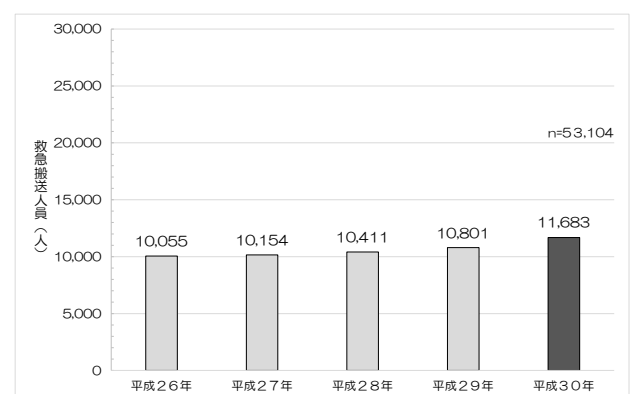


図3-7 50代

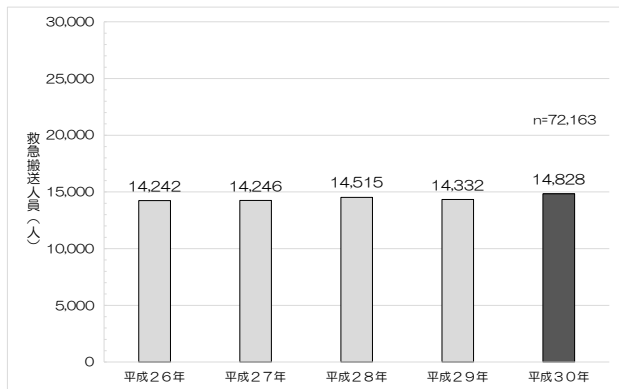


図3-8 60代

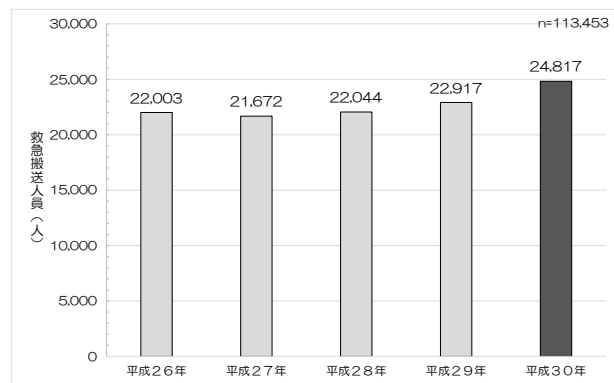


図3-9 70代

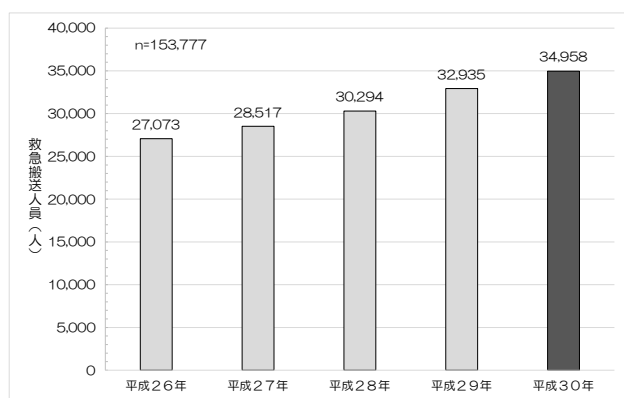


図3-10 80代

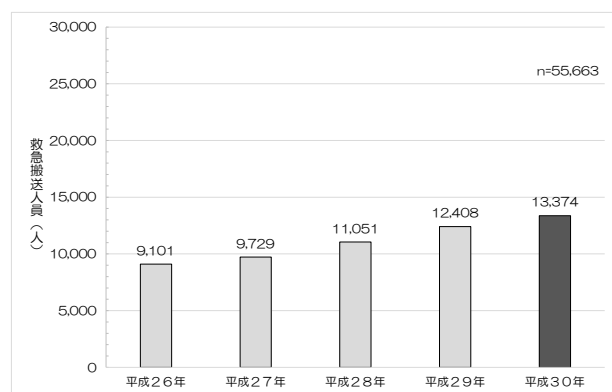


図3-11 90歳以上

(2) 事故種別（その他、不明を除く）ごとの比較

事故種別（その他、不明を除く）ごとに比較すると、「ころぶ」事故の割合は年齢層が上がるにつれて増加しており、50代から全体の6割以上を占めています。「落ちる」事故では9歳以下が約3割を占めています。「切る・刺さる」事故では20代と30代が1割以上を占めています。「ものがつまる等」の事故については、9歳以下では1割以上を占めています（図3-12から図3-21）。

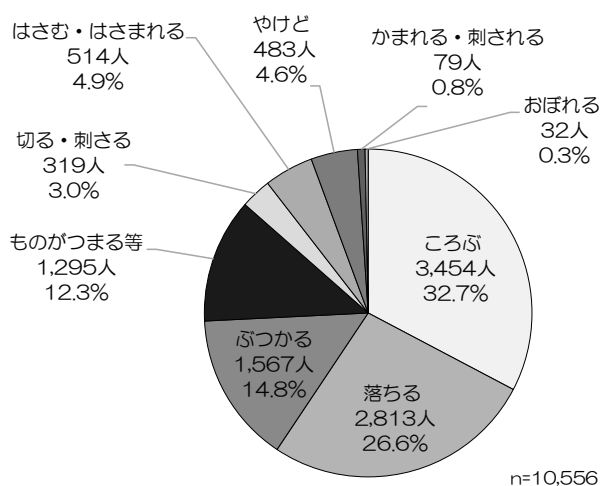


図3-12 9歳以下

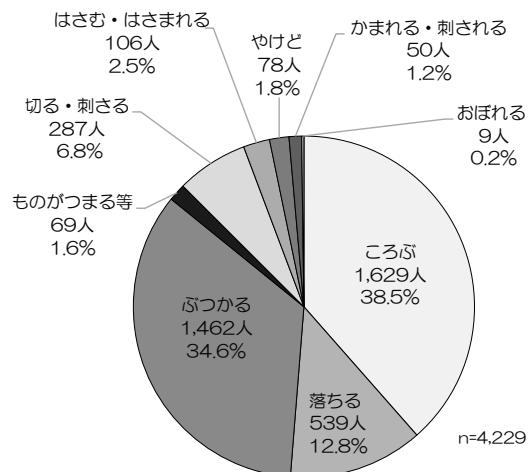


図3-13 10代

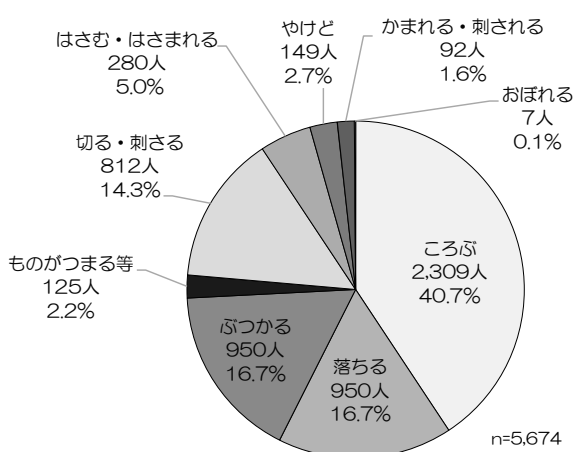


図3-14 20代

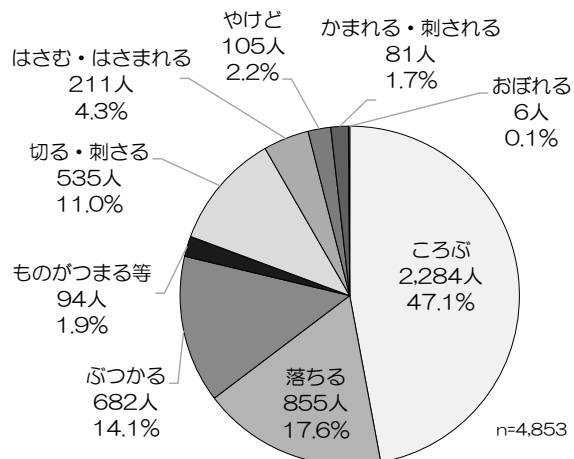


図3-15 30代

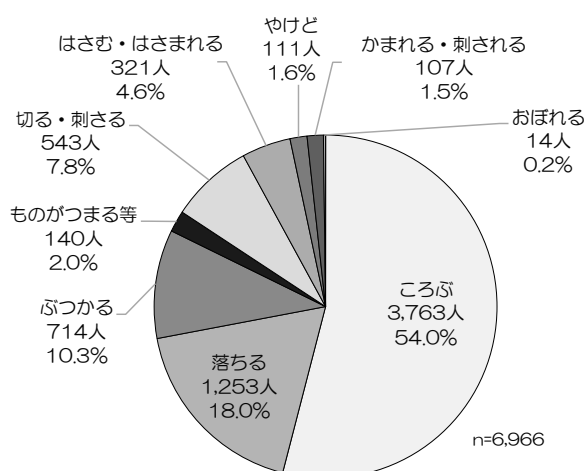


図3-16 40代

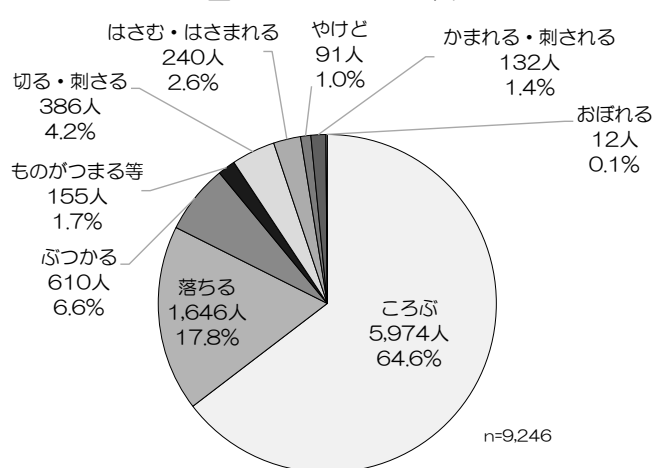


図3-17 50代

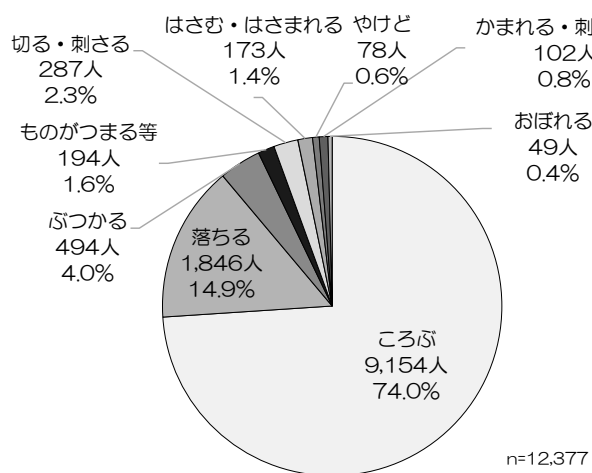


図 3-18 60代

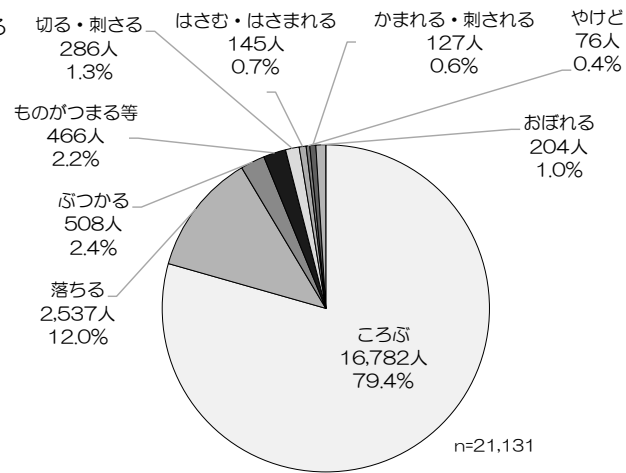


図 3-19 70代

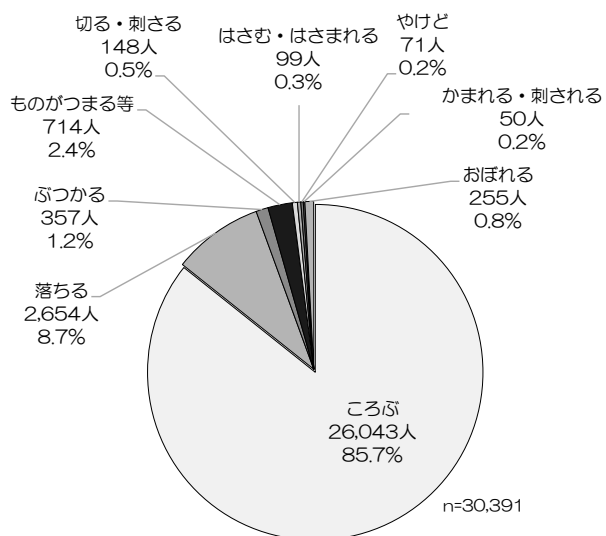


図 3-20 80代

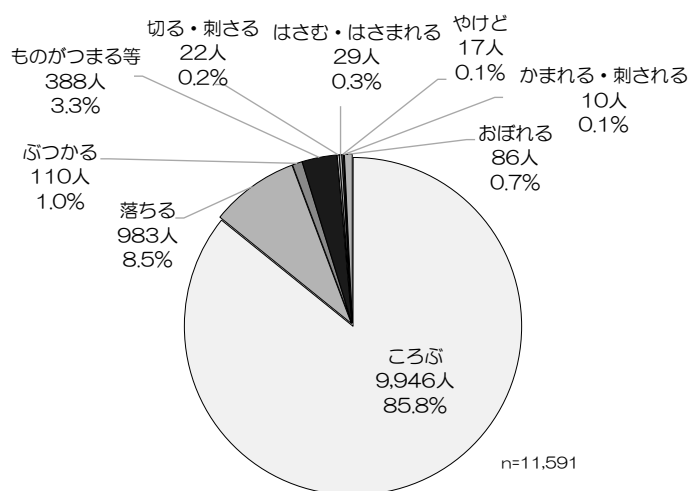


図 3-21 90歳以上

(3) 時間帯別の比較

時間帯別に比較すると、9歳以下では18時から20時までの時間帯で1,000人以上が救急搬送されています。10代では日中が多くなっており、20代から50代にかけては夜間に増加しています。60代では夜間に加えて、日中でも多く救急搬送されています。70代以上では夜間の救急搬送が減少し、日中に多く救急搬送されています（図3-22から図3-31）。

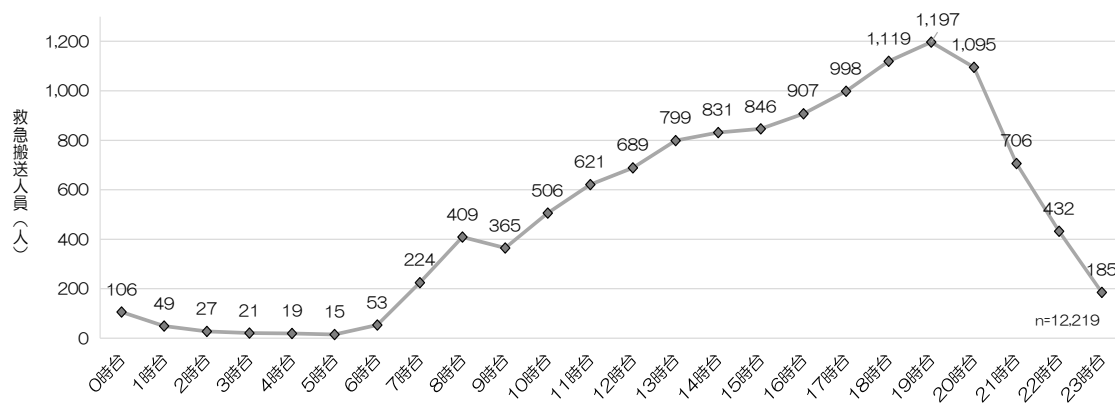


図3-22 9歳以下

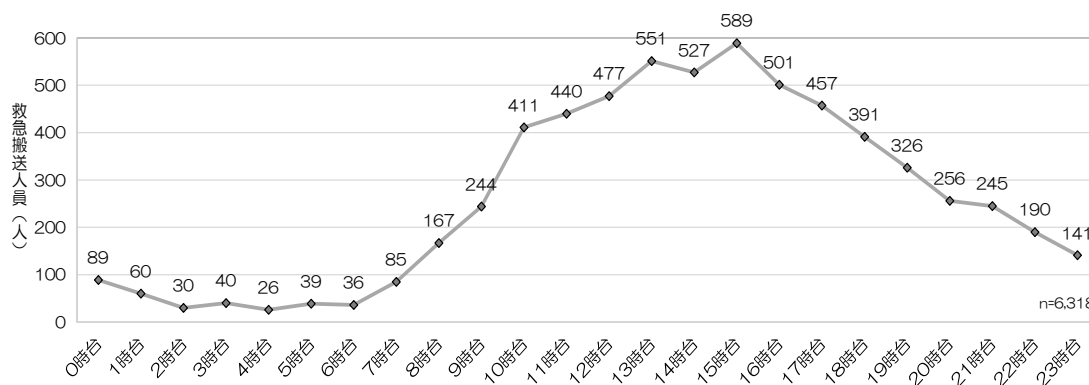


図3-23 10代

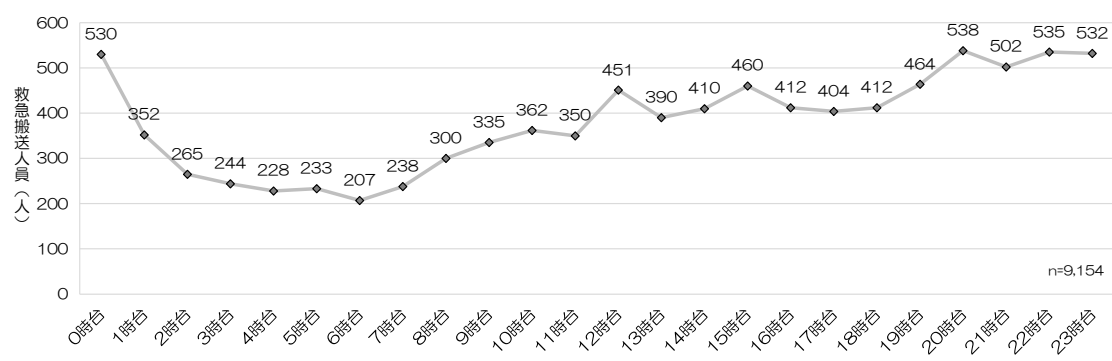


図3-24 20代

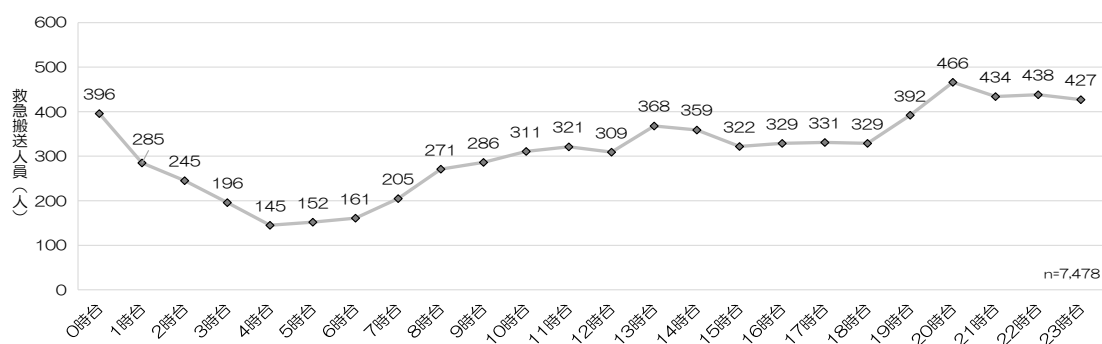


図3-25 30代

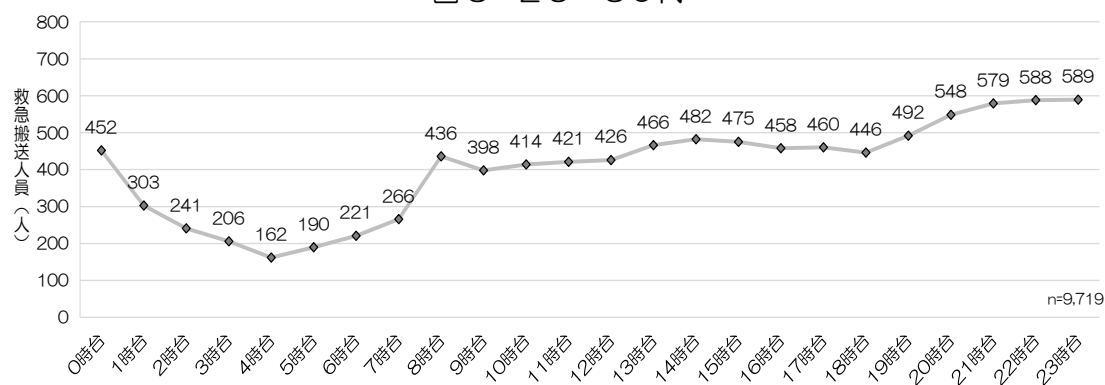


図3-26 40代

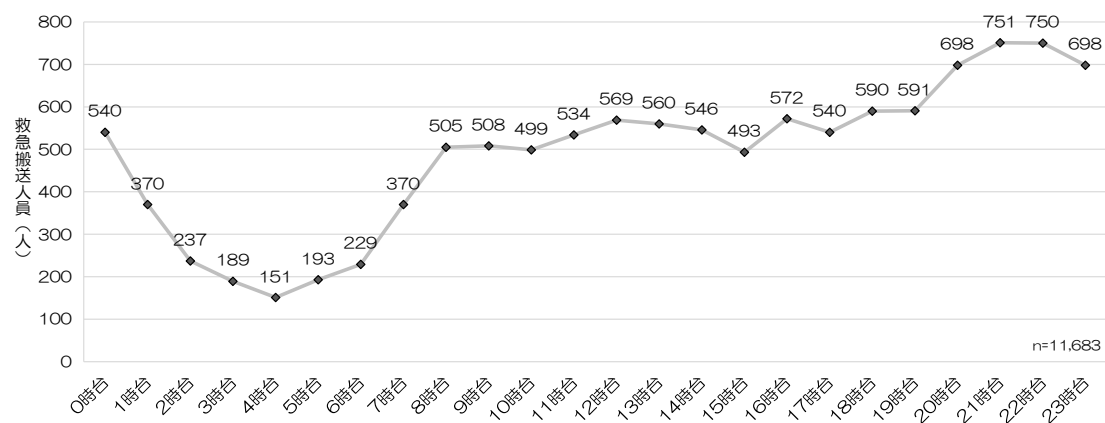


図3-27 50代

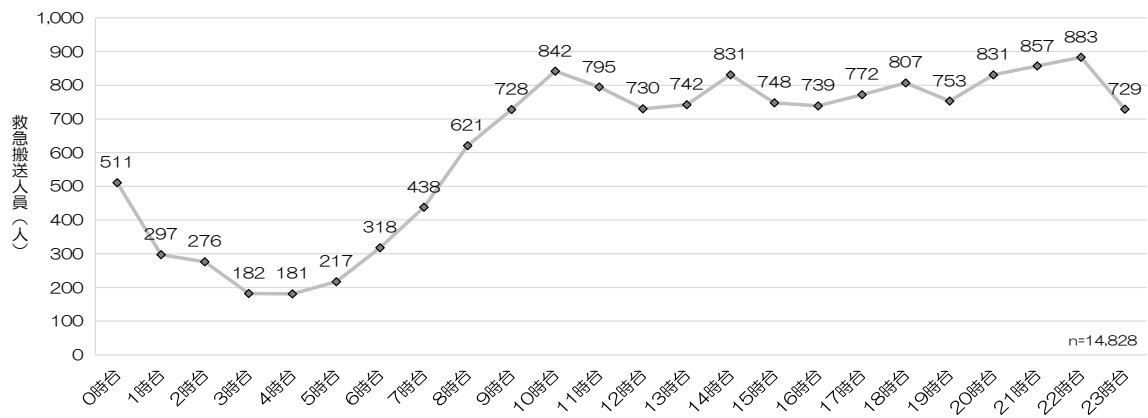


図3-28 60代

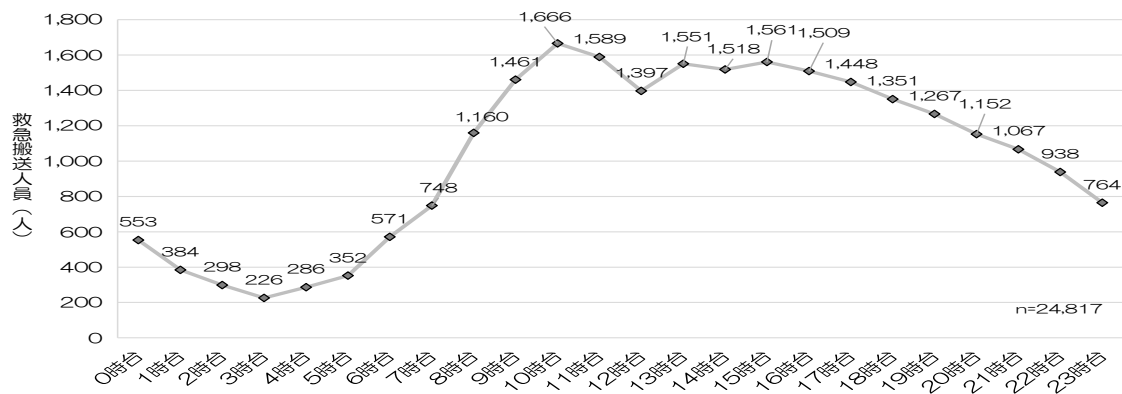


図3-29 70代

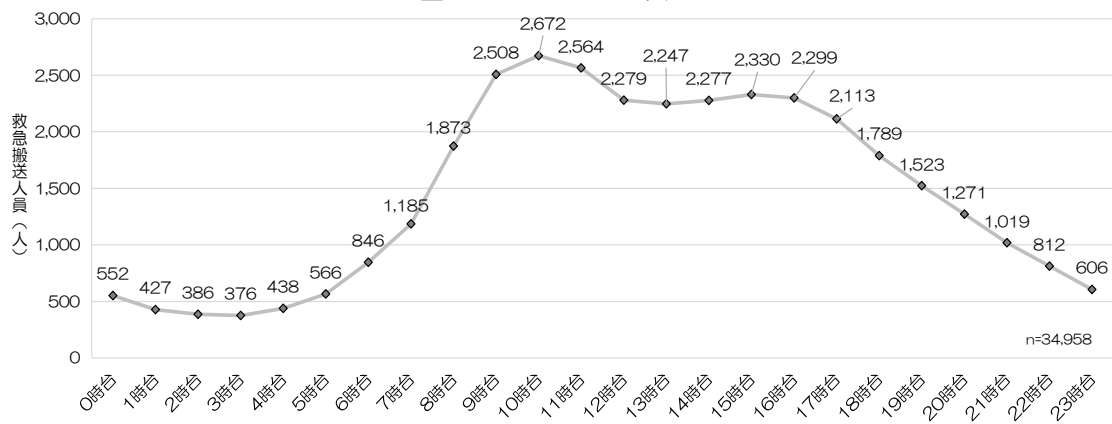


図3-30 80代

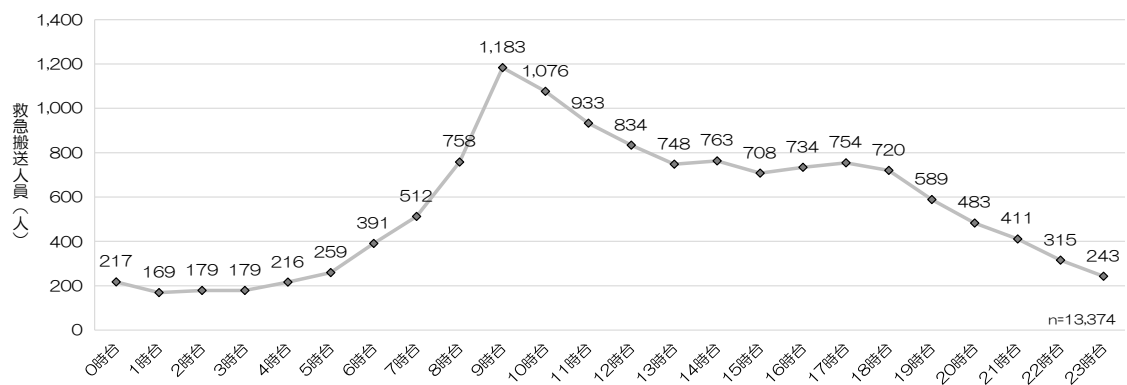


図3-31 90歳以上

2 年齢区分からみた事故

(1) 0歳～5歳（乳幼児）の事故

① 0歳～5歳

ア 年別搬送人員

0歳から5歳の乳幼児の事故で、平成26年から平成30年までの5年間に48,580人が救急搬送されています。平成30年は、昨年より減少し9,490人が救急搬送されています（図3-32）。

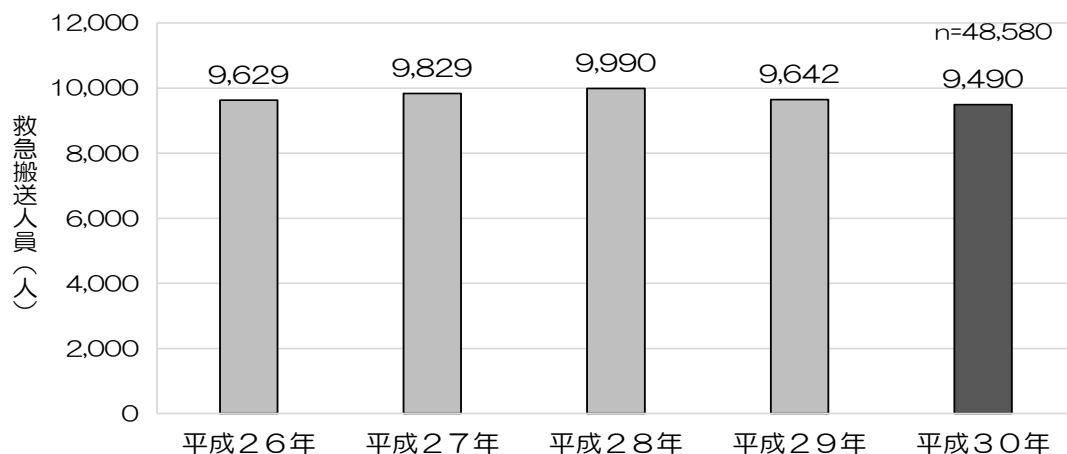


図3-32 年別の救急搬送人員

イ 年齢別搬送人員

平成30年中の乳幼児の事故を年齢別にみると、1歳児の救急搬送人員が2,327人と最も多く、次いで2歳児が2,017人となっています（図3-33）。

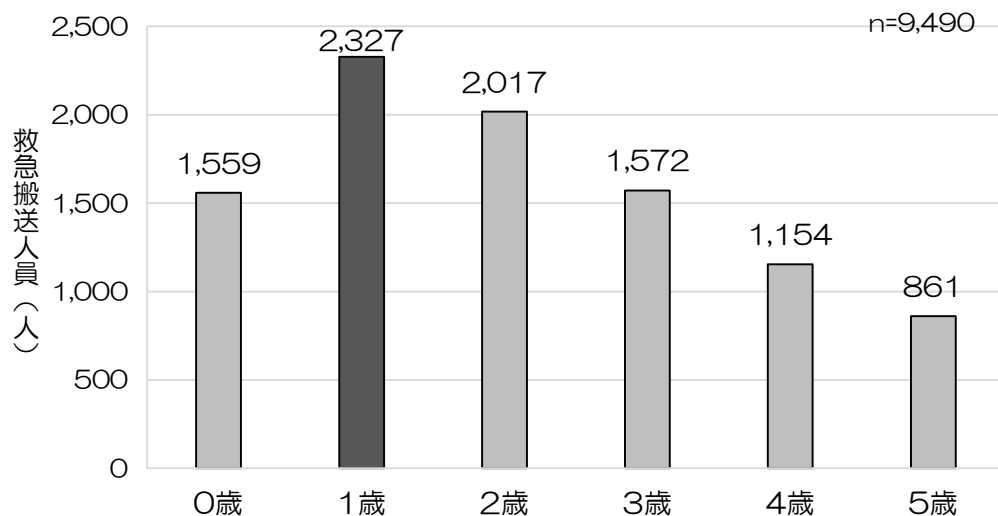


図3-33 年齢別救急搬送人員

ウ 時間帯別搬送人員

時間帯別では、18時台から20時台に多く救急搬送されています（図3-34）。

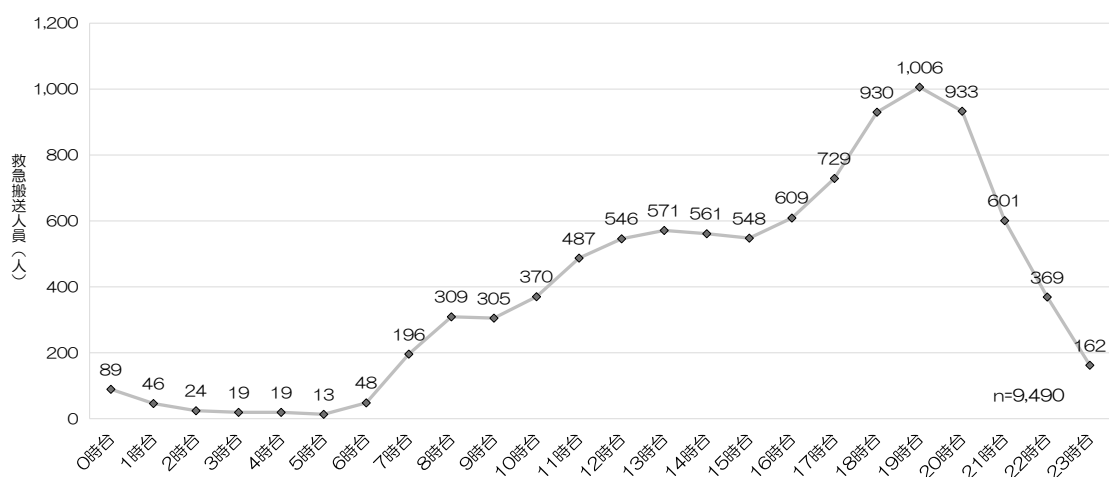


図 3-34 時間帯別救急搬送人員

エ 発生場所別搬送人員

乳幼児の事故の発生場所の約7割は、住宅等居住場所となっています（図3-35）。

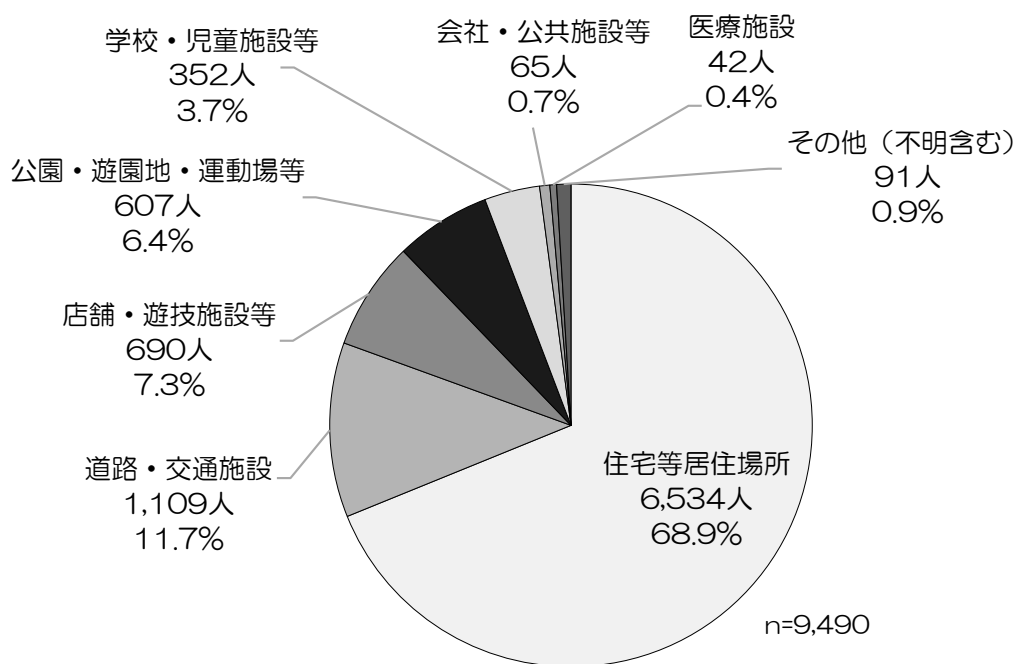
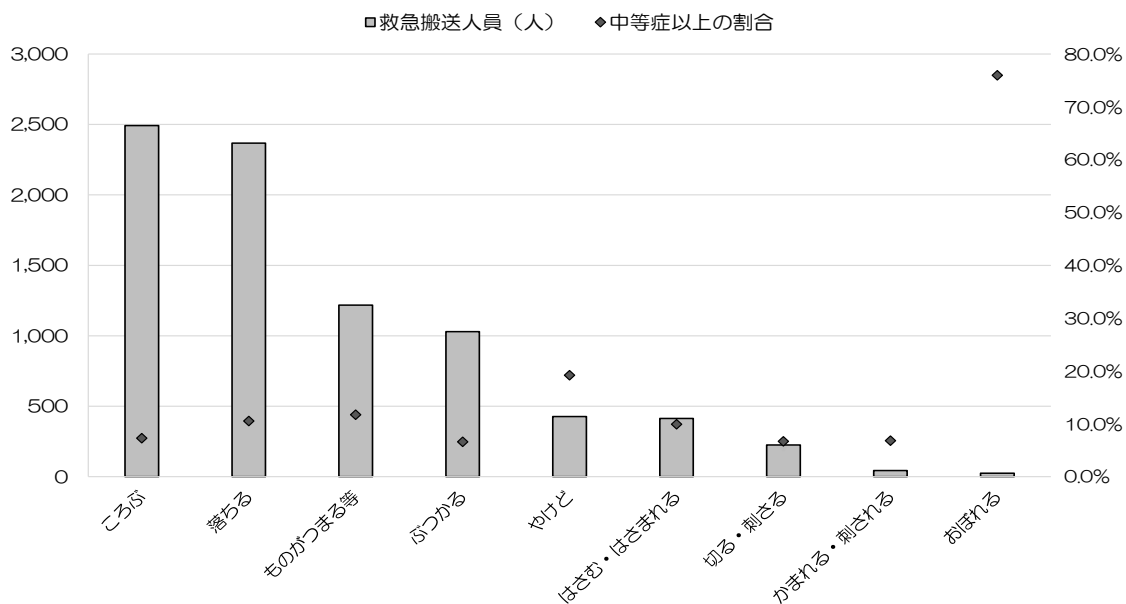


図 3-35 発生場所別救急搬送人員

オ 事故種別ごとの搬送人員

乳幼児の事故でもっとも多いのは「ころぶ」事故で、2,492人が救急搬送されています。初診時程度で中等症以上の割合が最も高いのは「おぼれる」事故で、7割以上と突出して高くなっています。また、「やけど」でも約2割が中等症以上と診断されています（図3-36）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ものが つまる等	ぶつかる	やけど	はさむ・ はさまれる	切る・ 刺さる	かまれる・ 刺される	おぼれる
救急搬送人員	2,492人	2,368人	1,218人	1,029人	427人	413人	225人	44人	25人
中等症以上の割合	7.3%	10.6%	11.7%	6.6%	19.2%	9.9%	6.7%	6.8%	76.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-36 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

カ 年齢ごとにみる特徴的な事故の変化

乳幼児は日々成長し、昨日できなかったことが、今日できるようになっているかもしれません。子供の発達を知り、その時期に起こりやすい事故を知り対策をとることで、重大な事故を防ぐことが出来ます。

0歳

ベッド（135人）やソファ（57人）といった家具などから「落ちる」事故が多く発生しています。また、包み・袋（85人）やたばこ（69人）、玩具（44人）を「誤って飲み込む」事故も多く発生しており、なんでも口に入れてしまう特徴がみとれます。また、乳幼児用のミルク（16人）でも、窒息してしまう事故が発生しています。

1歳

一人歩きを始める頃で、階段（148人）や椅子（95人）、ベッド（54人）などの家具から「落ちる」事故や机・テーブル（54人）、その他の家具（41人）に起因する「ころぶ」事故、「ぶつかる」事故が多く発生しています。
その他にも、手動ドア（39人）に「はさむ・はさまれる」事故、たばこ（49人）、薬剤等（35人）を「誤って飲み込む」事故、お茶・コーヒー類（39人）などによる「やけど」事故など、様々な事故が発生しています。

2歳

椅子（46人）や机・テーブル（37人）などの家具類に起因する「ころぶ事故」が多く発生しているのが特徴的です。「落ちる」事故では、自転車の補助イス（86人）も多く発生しています。また、「ぶつかる」事故、手動ドア（28人）に「はさむ・はさまれる」事故も多く発生しています。歯ブラシ（10人）に起因する「切る・刺さる」事故も発生しており、注意が必要です。

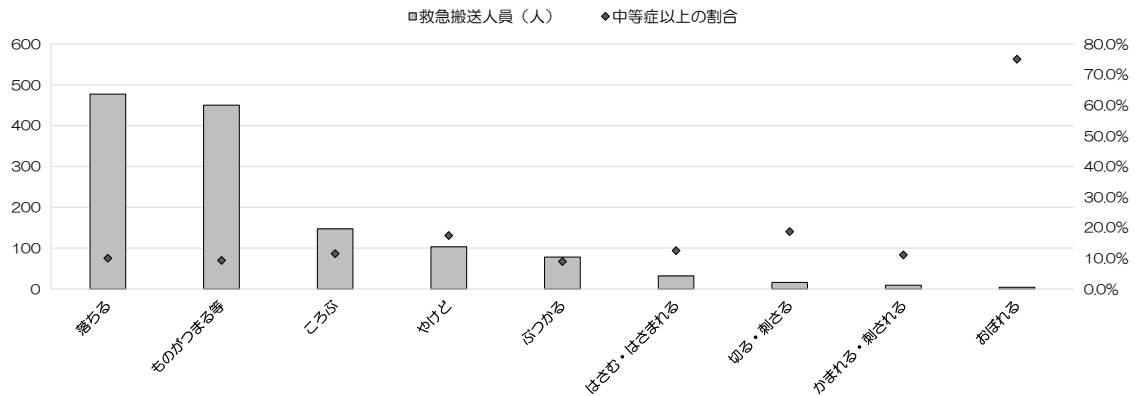
3歳 — 5歳

階段（91人）や机・テーブル（71人）で「ころぶ」事故が多く発生しています。また、2歳児と同じく、自転車の補助イス（85人）から「落ちる」事故も多く発生しています。アメ玉類（28人）や玩具（28人）など「誤って飲み込む」事故が発生しており、誤飲にはまだ注意が必要です。

② 0歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

0歳児に最も多いのは「落ちる」事故で477人が救急搬送されています。「おぼれる」事故は、中等症以上となる割合が7割以上と最も高くなっています(図3-37)。



事故種別	落ちる	ものがつまる等	ころぶ	やけど	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	477人	450人	147人	103人	78人	32人	16人	9人	4人
中等症以上の割合	10.1%	9.3%	11.6%	17.5%	9.0%	12.5%	18.8%	11.1%	75.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-37 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因(上位5つ)

0歳児に最も多い事故は、ベッドから落ちる事故で135人が救急搬送されています。「ものがつまる」等の事故ではお菓子の袋やペットボトルのラベルなどの「包み・袋」の誤飲による事故が多く発生しています(表1)。

表1 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	落ちる	ものがつまる等	ころぶ	やけど	ぶつかる	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
1位	ベッド	包み・袋	人	ポット・魔法瓶	人	ベッド	ハサミ・爪切り	動物等	浴槽
	135人	85人	39人	30人	26人	5人	4人	8人	4人
2位	人	たばこ	ベビーカー	味噌汁・スープ	机・テーブル	その他の家具	食器類	虫	
	67人	69人	11人	18人	8人	4人	3人	1人	
3位	ソファ	その他の玩具	机・テーブル	熱湯	ベビーカー	その他の玩具	歯ブラシ		
	57人	44人	10人	13人	6人	2人	2人		
4位	階段	ミルク(乳児用)	その他の家具	お茶・コーヒー類	その他の家具	椅子	ガラス片		
	45人	16人	6人	8人	3人	2人	1人		
5位	ベビーカー	電池	椅子	メン類	椅子	手動ドア	耳掻き・綿棒		
	42人	13人	6人	7人	2人	2人	1人		

ウ 0歳の事故事例

【事例1 ベビーベッドから転落】

高さ約 50 ㎝のベッドでオムツを替えていたが、一瞬目を離した隙にベッドから転落してしまった。(7か月 軽症)

【事故防止ポイント】

ベッドやソファ、階段などから「落ちる」事故は、0歳児に多く発生しています。昨日までできなかった寝返りが、今日できるかもしれません。目を離すときはベビーベッドの柵を上げましょう。また、高い所に寝かせないようにしましょう。階段の上下には、転落防止用の柵等をつけましょう。

【事例2 たばこを誤って飲み込む】

飲食店内において、子どもが親のバッグに入っていた、たばこを食べているのを発見した。(10か月 中等症)

【事故防止ポイント】

子どもが飲み込めそうなものが子どもの届くところないように、日頃から整理整頓をこころがけましょう。早い子では、5か月頃から「物をつかむ」、つかんだら「口に入れる」行動が見られます。乳幼児は、トイレットペーパーの芯(39mm)を通る大きさのものなら、口に入れてしまい飲み込む危険性があります。

【事例3 目を離した隙に浴槽でおぼれる】

親と入浴中、ガスを消し忘れたと思った親が一時的に目を離し、再度浴室に戻ったところ浴槽内で水没しているのを発見した。(9か月 中等症)

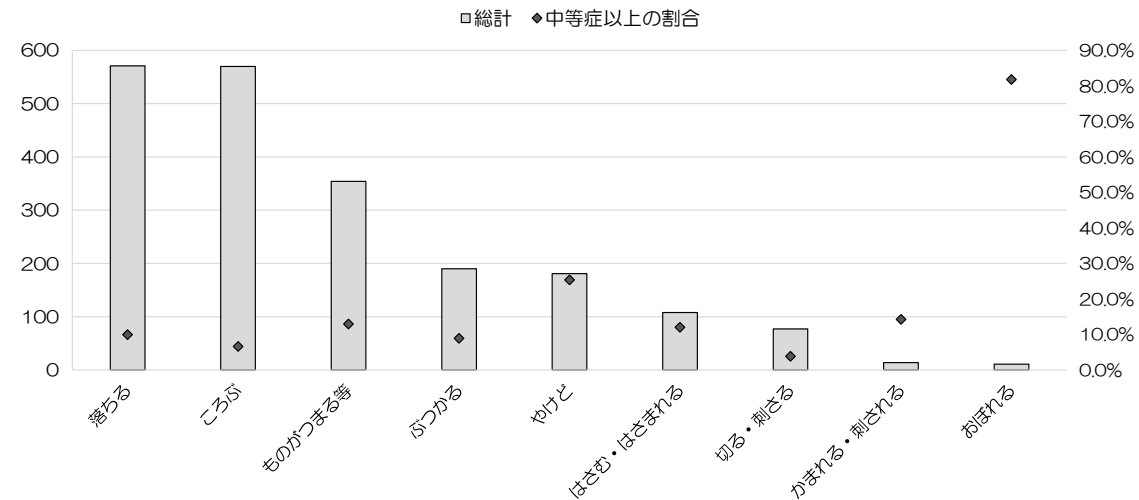
【事故防止ポイント】

おぼれの事故は重症化しやすいため、十分気を付けましょう。また、幼児は水深が浅くてもおぼれる可能性があるため、わずかな時間でも目を離さないようにしましょう。

③ 1歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

1歳になると、歩く、走る、といった行動ができるようになる時期なので、0歳に比べ、「ころぶ」事故が多くなります。「おぼれる」事故は、中等症以上となる割合が最も高く、「やけど」事故でも2割以上が中等症以上と診断されています(図3-38)。



事故種別	落ちる	ころぶ	ものがつまる等	ぶつかる	やけど	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	571人	570人	354人	190人	181人	108人	77人	14人	11人
中等症以上の割合	10.0%	6.7%	13.0%	8.9%	25.4%	12.0%	3.9%	14.3%	81.8%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-38 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因(上位5つ)

1歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、お茶・コーヒー類による「やけど」事故も多く発生しています(表2)。

表2 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	落ちる	ころぶ	ものがつまる等	ぶつかる	やけど	はさむ・はさまれる	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
1位	階段	机・テーブル	たばこ	机・テーブル	お茶・コーヒー類	手動ドア	歯ブラシ	動物等	浴槽
	148人	54人	49人	31人	39人	39人	16人	11人	11人
2位	椅子	その他の家具	薬剤等	その他の家具	熱湯	エレベーター	ナイフ	虫	
	95人	41人	35人	25人	37人	14人	11人	2人	
3位	ベッド	椅子	その他の玩具	人	味噌汁・スープ	椅子	耳掻き・綿棒		
	54人	34人	27人	15人	35人	8人	11人		
4位	ソファ	人	電池	壁・天井	ポット・魔法瓶	自転車	ハサミ・爪切り		
	43人	28人	21人	12人	31人	8人	10人		
5位	自転車の補助イス	階段	洗剤等	ベッド	カップ麺	その他の家具	食器類		
	33人	24人	17人	11人	10人	5人	5人		

ウ 1歳の事故事例

【事例1 階段から落ちる】

自宅2階の階段で、足を滑らせ中段まで転落し、受傷した。（1歳 中等症）

【事故防止ポイント】

1歳児は0歳児と比べ、活発に動くようになります。普段から目を離さないよう注意し、椅子などに座らせる時は、チェアベルト等を活用し、大きな事故にならないように工夫しましょう。

【事例2 薬の誤飲】

親に処方されている薬を、子どもが薬包ごとかじっているところを発見した。
（1歳 中等症）

【事故防止ポイント】

医薬品は、子供の手の届くところに置かないようにしましょう。

医薬品は、薬理作用があるため、保管や管理には細心の注意を払いましょう。

シロップ等、子供が飲みやすいように味付けしてあるものは、冷蔵庫に入れておいても、自ら取り出して飲んでしまうことがあるため、保管・管理には十分注意しましょう。

【事例3 歯ブラシが刺さった事故】

歯磨きをしながら親に飛びついた際に、口腔内に歯ブラシが刺さり受傷した。
（1歳 中等症）

【事故防止ポイント】

歯ブラシを口に入れたまま、歩いたり走ったりさせないようにしましょう。過去には口腔内に刺さる事例も発生しています。

不安定な場所で歯みがきをしていて、転落した事例もあることから、椅子や踏み台等に乗った状態で歯みがきさせないようにしましょう。

歯みがき中に人や物と接触し、受傷するケースも多くあるため、歯みがき中は保護者が付き添い、周囲にも注意を払いましょう。

【事例4 電車の戸袋にはさまれる事故】

電車の扉が開いた際に、ベビーカーに乗っていた子どもの足が戸袋に挟まれて受傷した。（1歳 軽症）

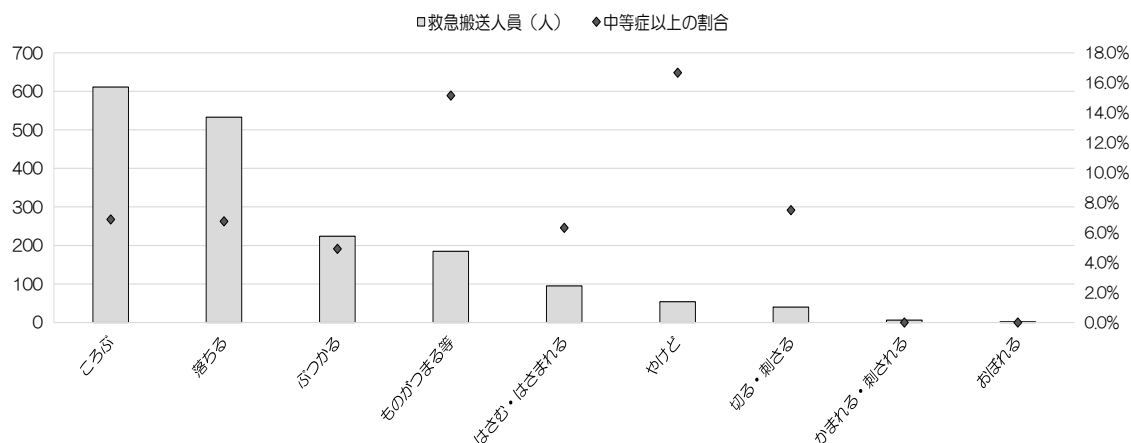
【事故防止ポイント】

電車のドアが開く際に子どもがドアに触れないようにするため、ドアから離れた所に立つなど十分注意しましょう。保護者が抱っこしている時に子どもの手や足が戸袋に引き込まれる事故も発生しています。骨折などの大きな事故につながっている事例もあります。

④ 2歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

「ころぶ」事故、「落ちる」事故に次いで、「ぶつかる」事故が多く発生しています。
「ものがつまる等」の事故、「やけど」事故では1割以上が中等症以上と診断されています（図3-39）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	やけど	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	611人	533人	224人	185人	95人	54人	40人	6人	2人
中等症以上の割合	6.9%	6.8%	4.9%	15.1%	6.3%	16.7%	7.5%	0.0%	0.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-39 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5つ）

2歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、運動機能が発達し、自由に動き回れるようになってくるため、家の中を走り回って、家具等に「ぶつかる」事故も発生しています（表3）。

表3 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	やけど	切る・刺さる	かまれる・刺される	おぼれる
1位	椅子	階段	机・テーブル	その他の玩具	手動ドア	味噌汁・スープ	歯ブラシ	動物等	浴槽
	46人	126人	37人	23人	28人	14人	10人	3人	1人
2位	机・テーブル	自転車の補助イス	人	薬剤等	エレベーター	カップ麺	ハサミ・爪切り	虫	池
	37人	86人	22人	18人	11人	8人	7人	3人	1
3位	その他の家具	椅子	その他の家具	ビー玉類	鉄道車両の戸袋	熱湯	ナイフ		
	34人	72人	14人	12人	11人	8人	6人		
4位	階段	人	手動ドア	魚等の骨	ベビーカー	お茶・コーヒー類	食器類		
	32人	31人	13人	12人	4人	5人	4人		
5位	ベビーカー	ベッド	壁・天井	菓子	自転車	ポット・魔法瓶	耳掻き・綿棒		
	22人	27人	11人	11人	4人	4人	3人		

ウ 2歳の事故事例

【事例1 落ちる事故】

自宅で椅子から滑り落ち、顔面を椅子にぶつけた後、後ろに転倒し頭部を受傷した。
(2歳 中等症)

【事故防止ポイント】

椅子などの家具のほかに、ベランダや窓からの墜落事故も発生しています。高所からの墜落は重症化しやすいため十分注意しましょう。

【事例2 ボタン電池の誤飲】

自宅で玩具の電球及びボタン電池を、子どもが誤飲した疑いがあり、自宅内を捜しても見つからなかった。(2歳 中等症)

【事故防止ポイント】

子どもが飲み込めそうなものは、子どもの手の届くところに置かないようにしましょう。

ボタン電池は食道にとどまると大変危険です。分の単位で食道の粘膜がただれはじめ、中には大動脈まで穴が開いて死亡することもあります。

【事例3 ドア開閉時のはさまれる事故】

親が目を離している際に、子どもが突然泣いたため様子を見たところ、自宅の扉で指を挟み切断していた。(2歳 中等症)

【事故防止ポイント】

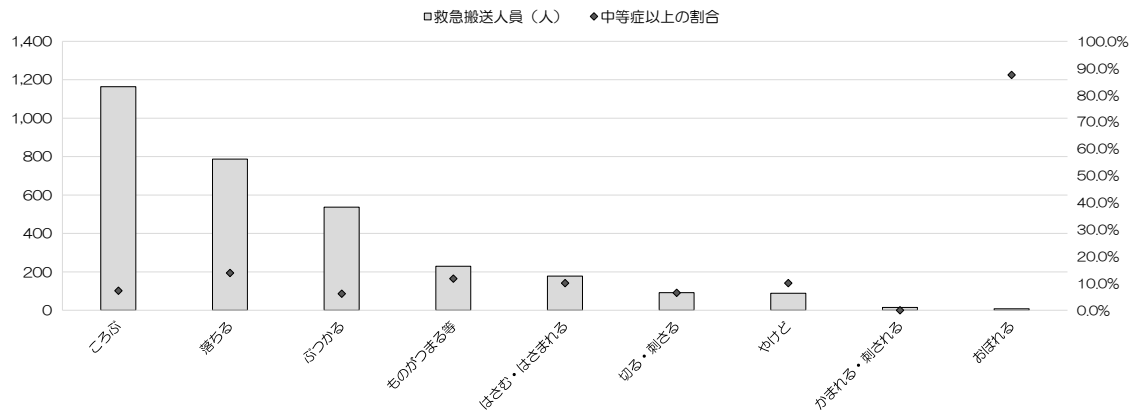
子供の「はさまれ」の原因で一番多いのは「手動ドア」です。子供の手や足は大人より小さく、狭い隙間でも入ってしまいます。指の切断に至ることもあるのでドアの開閉時は、注意しましょう。

ドアの蝶番側は、指はさみを防止するグッズなどでカバーすることも事故防止に効果的です。

⑤ 3歳～5歳

ア 事故種別ごとの搬送人員

3歳から5歳では、「ころぶ」事故が最も多くなっています。「おぼれる」事故は8割以上が中等症以上となっており、「落ちる」事故、「ものがつまる等」の事故、「はさむ・はさまれる」事故、「やけど」事故は、1割以上が中等症以上と診断されています（図3-40）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものが つまる等	はさむ・ はさまれる	切る・ 刺さる	やけど	かまれる・ 刺される	おぼれる
救急搬送人員	1164人	787人	537人	229人	178人	92人	89人	15人	8人
中等症以上の割合	7.3%	13.9%	6.1%	11.8%	10.1%	6.5%	10.1%	0.0%	87.5%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-40 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

イ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5つ）

3歳から5歳では、階段から「落ちる」事故が多く発生しています。また、机・テーブルで「ぶつかる」事故も多く発生しています（表4）。

表4 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	ものが つまる等	はさむ・ はさまれる	切る・ 刺さる	やけど	かまれる・ 刺される	おぼれる
1位	階段	階段	机・テーブル	アメ玉類	手動ドア	ナイフ	カップ麺	虫	浴槽
	91人	125人	70人	28人	54人	21人	19人	12人	7人
2位	机・テーブル	自転車の補助イス	その他の家具	その他の玩具	自転車の補助イス	ハサミ・爪切り	味噌汁・スープ	動物等	プール
	71人	85人	52人	28人	17人	13人	16人	3人	1人
3位	椅子	椅子	壁・天井	ビー玉類	鉄道車両の戸袋	歯ブラシ	熱湯		
	69人	75人	38人	23人	14人	11人	10人		
4位	その他の家具	ソファ	人	魚等の骨	自転車	食器類	お茶・コーヒー類		
	64人	53人	24人	22人	13人	8人	7人		
5位	道路	滑り台	椅子	硬貨	自動車のドア	手動ドア	メン類		
	62人	53人	23人	13人	10人	7人	6人		

ウ 3歳～5歳の事故事例

【事例1 ころぶ事故】

ソファ上で足を滑らせ転倒し、テレビ台に顔面をぶつけ出血した。

（4歳 中等症）

【事故防止ポイント】

3歳になると運動能力も高くなり行動範囲が広がっています。危険や安全の判断がまだ十分にできていませんので、危険な行動は繰り返し教えてあげましょう。

【事例2 遊具からの転落】

公園のアスレチックにて遊具で遊んでいたところ、約2メートルの高さから転落し受傷した。（3歳 中等症）

【事故防止ポイント】

墜落事故は重大事故につながる可能性が高い事故の一つです。

遊具からの転落事故の他、窓やベランダに置いてあったイスや室外機にのぼり、誤って墜落する事故も発生しています。

ベランダや窓の近くには子供がよじのぼれるものを置かないようにしましょう。

【事例3 熱湯でやけど】

熱湯の入ったカップラーメンを誤って大腿部にこぼしてしまいやけどした。

（5歳 中等症）

【事故防止ポイント】

やけどの恐れのあるものは、子供の手の届くところに置かないようにしましょう。

テーブル上に置かれた熱いものが入った容器を乳幼児が引き寄せ、やけどを負う事故が多く発生しています。テーブルの隅など、乳幼児の手の届きやすいところに熱いものは絶対に置かないようにしましょう。

(2) 6歳～12歳（小学生）の事故

ア 年別搬送人員

小学生の年代では、平成30年中に4,437人が救急搬送されています（図3-41）。

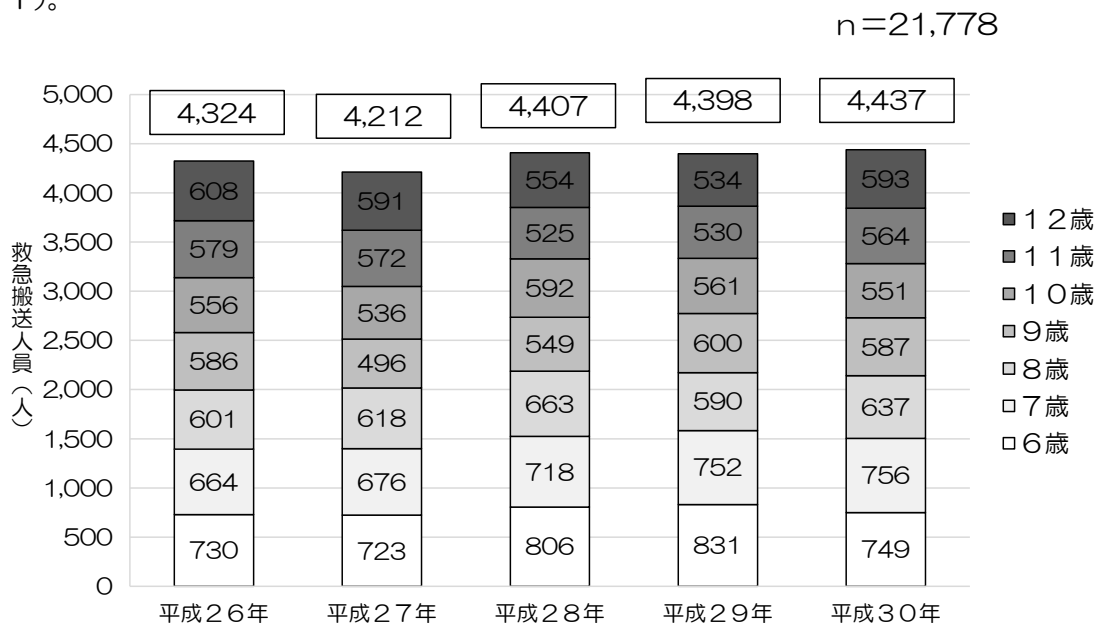


図3-41 年別救急搬送人員（6歳～12歳）

イ 月別搬送人員

月別では、4月から7月と10月に多く搬送されています（図3-42）。

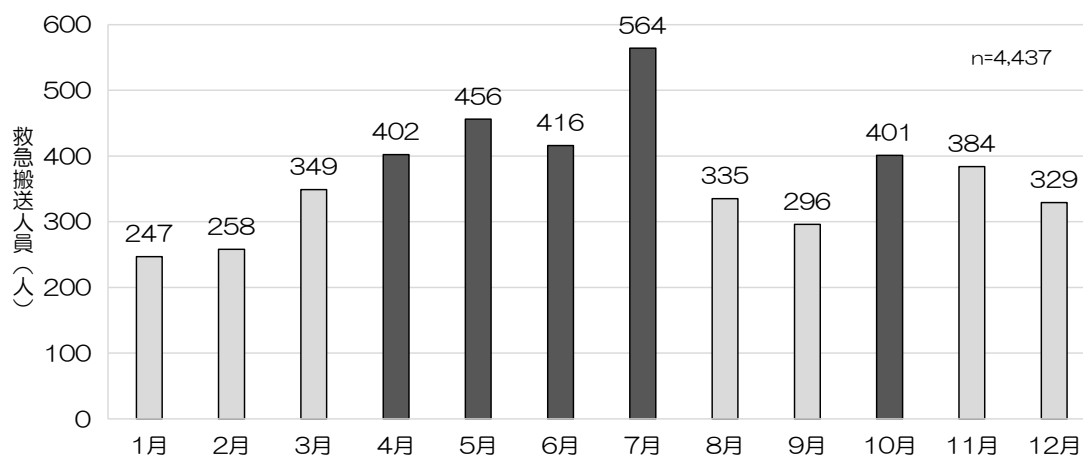


図3-42 月別救急搬送人員

ウ 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所の他に学校・児童施設等が多くなっています。また、公園・遊園地・運動場等での事故も多く発生しています（図 3-43）。

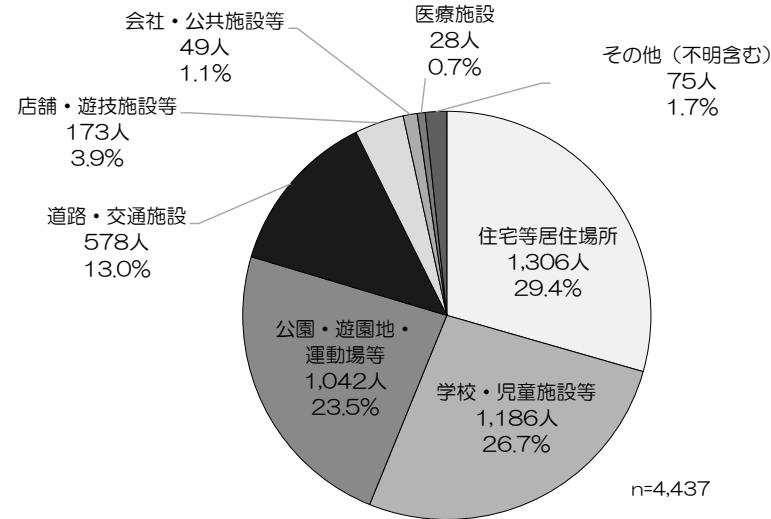
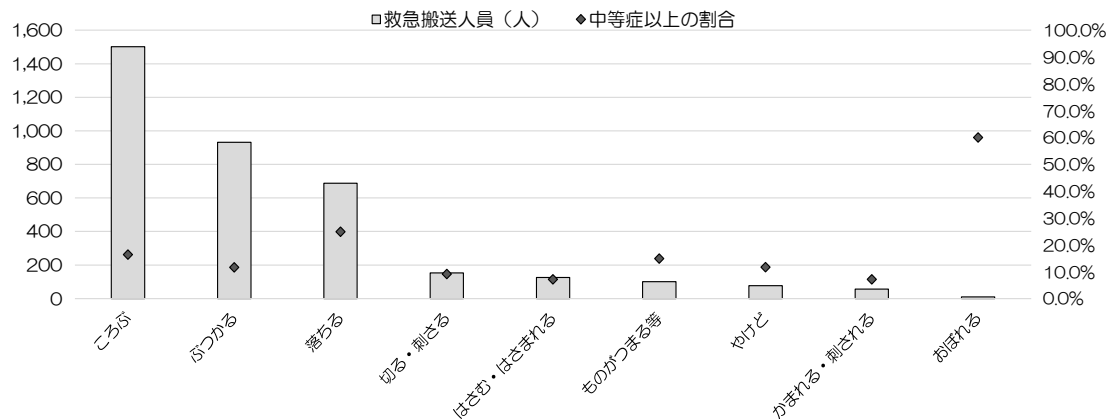


図 3-43 発生場所別救急搬送人員

エ 事故種別ごとの搬送人員

小学生は「ころぶ」事故の次に、「ぶつかる」事故が多く発生しています。「おぼれる」事故ではすべてが中等症以上となっています。また、「落ちる」事故は3割以上が中等症以上となっています（図 3-44）。



事故種別	ころぶ	ぶつかる	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺さる	おぼれる
救急搬送人員	1502人	932人	688人	153人	126人	101人	77人	56人	10人
中等症以上の割合	16.4%	11.6%	24.9%	9.2%	7.1%	14.9%	11.7%	7.1%	60.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」なものを除く

図 3-44 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5つ）

体育館や校庭などの運動施設で「ころぶ」事故が最も多く発生しています。子ども同士で「ぶつかる」事故も多く発生しています（表5）。

表5 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	ころぶ	ぶつかる	落ちる	はさむ・ はさまれる	切る・ 刺さる	ものが つまる等	やけど	かまれる・ 刺される	おぼれる
1位	運動施設	人	階段	手動ドア	ナイフ	アメ玉類	カップ麺	虫	浴槽
	156人	144人	77人	32人	30人	12人	25人	29人	4人
2位	道路	ボール	滑り台	自転車の補助イス	手動ドア	その他の玩具	味噌汁・スープ	動物等	河川
	146人	97人	64人	18人	17人	8人	20人	27人	4人
3位	階段	机・テーブル	雲梯	自転車	食器類	魚等の骨	熱湯		プール
	76人	34人	61人	9人	10人	8人	8人		2人
4位	公園	鉄棒（運動用）	その他の遊具	植物	ミシン（ミシン針含む）	硬貨	ポット・魔法瓶		
	57人	33人	46人	6人	8人	8人	4人		
5位	スケートボード	手動ドア	鉄棒	鉄道車両の戸袋	窓・サッシ	ビー玉類	お茶・コーヒー類		
	53人	32人	43人	6人	7人	7人	3人		

カ 6歳～12歳の事事例

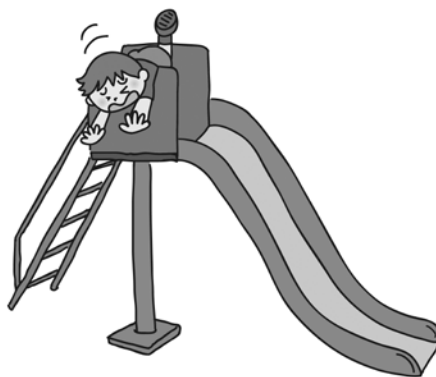
【事例1 滑り台から落ちる】

友達と公園の滑り台で遊んでいたところ、滑り台の中腹あたり（約1.3m）から誤って地面に落ちてしまい腕を受傷した。（9歳 中等症）

【事故防止ポイント】

高所からの墜落は、生命に危険を及ぼす重大な事故となることから、保護者等は、危険性を子どもに教え、理解させましょう。

小学生の年代は、運動能力の発達に加え、身長、体重、運動量、俊敏性、冒険心の増大が事故につながっていると考えられます。危険が予測される行動も多く見られることから、安全教育による事故防止も不可欠です。



(3) 13歳～18歳（中学生・高校生）の事故

ア 年別搬送人員

平成30年中は、3,755人が救急搬送されています（図3-45）。

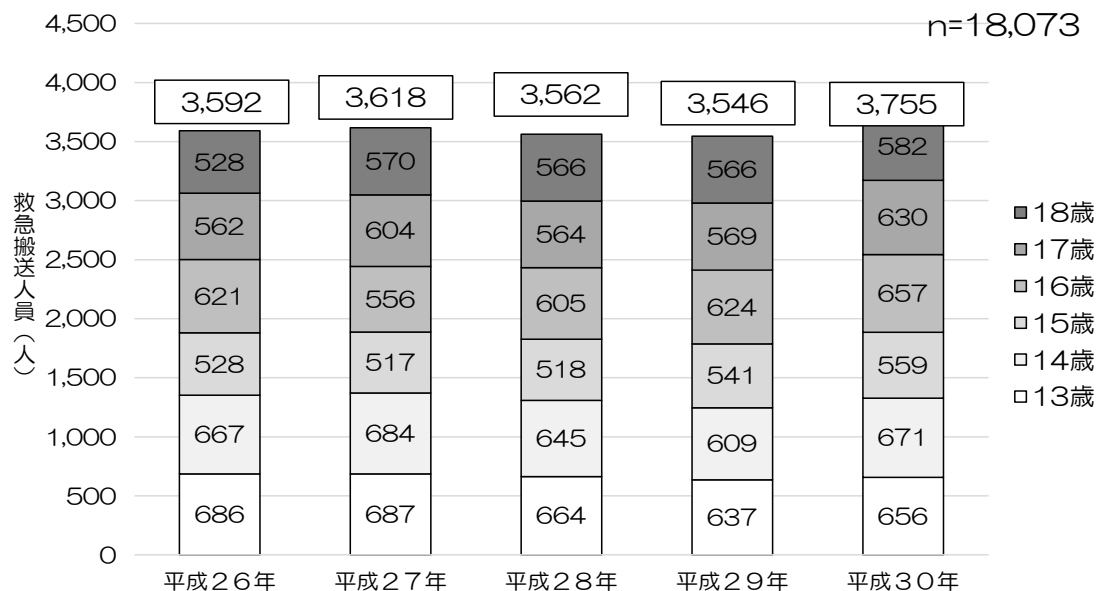


図3-45 年別救急搬送人員（13歳～18歳）

イ 月別搬送人員

月別にみると、7月が最も多く、次いで8月に多く搬送されています（図3-46）。

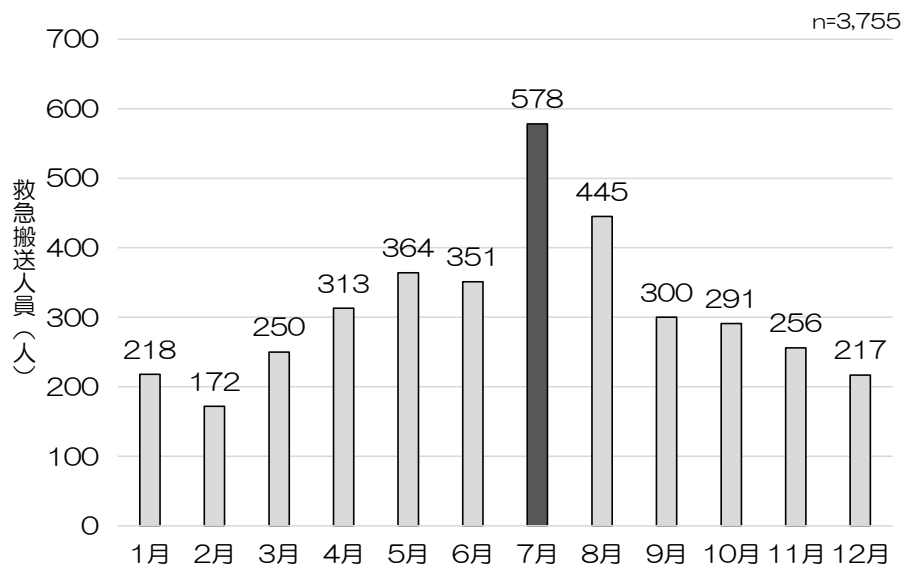


図3-46 月別救急搬送人員

ウ 発生場所別搬送人員

学校・児童施設等が最も多く、次いで公園・遊園地・運動場等が多くなっています（図 3-47）。

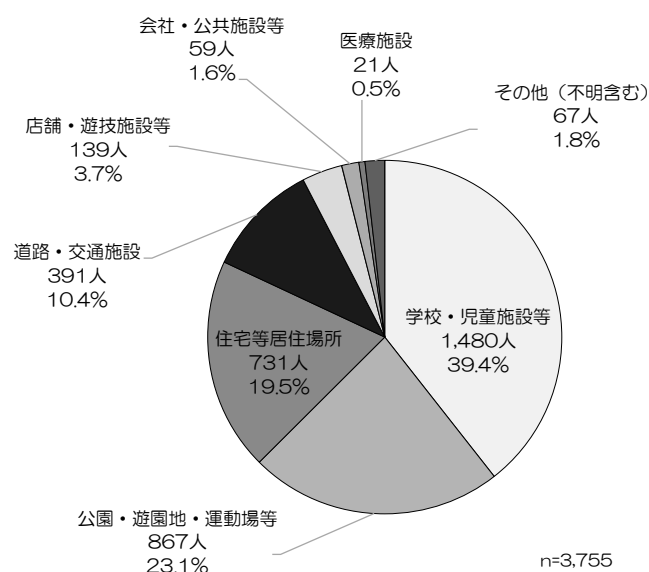
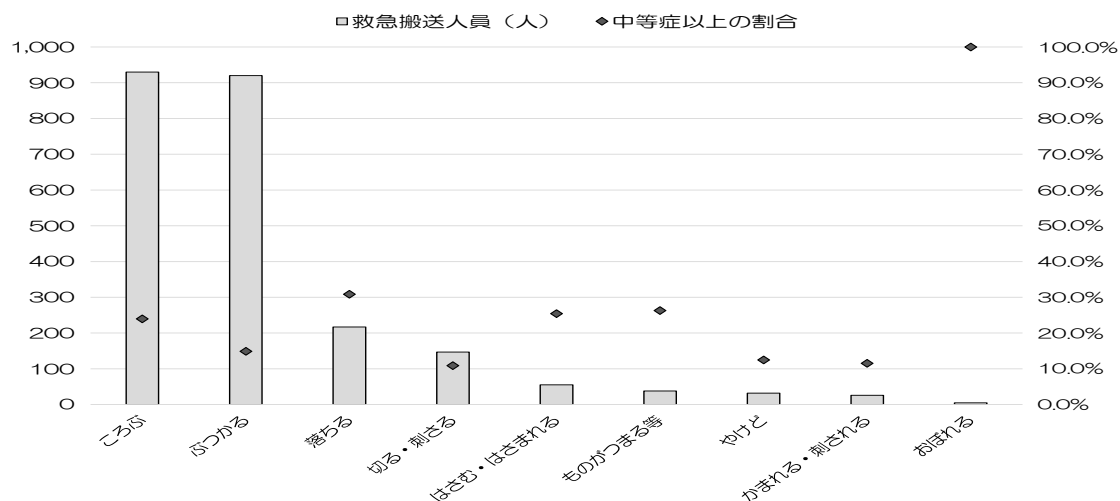


図 3-47 発生場所別救急搬送人員

エ 事故種別ごとの搬送人員

13歳から18歳では、事故種別ごとにみると、「ころぶ」事故が最も多くなっています。「おぼれる」事故の全てで中等症以上となっています。また、「ころぶ」事故、「落ちる」事故、「はさむ・はさまれる」事故、「ものがつまる等」の事故は2割以上が中等症以上となっています（図 3-48）。



事故種別	ころぶ	ぶつかる	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	929人	919人	217人	147人	55人	36人	32人	26人	5人
中等症以上の割合	24.0%	14.9%	30.9%	10.9%	25.5%	27.8%	12.5%	11.5%	100.0%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図 3-48 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5）

この年代では、人と「ぶつかる」事故が多く発生しています。また、スポーツでボールにぶつかる等の事故が多くなっています（表6）。

表6 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5

種別 順位	ころぶ	ぶつかる	落ちる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	運動施設	人	階段	ナイフ	手動ドア	薬剤等	カップ麺	動物等	浴槽
	167人	339人	77人	35人	9人	7人	6人	16人	4人
2位	階段	ボール	跳び箱	手動ドア	自転車	魚等の骨	熱湯	虫	プール
	50人	186人	6人	15人	7人	3人	5人	10人	1人
3位	道路	壁・天井	軌道敷	食器類	その他の機械	虫	鍋		
	43人	21人	5人	13人	4人	3人	4人		
4位	スケートボード	手動ドア	屋根	針・ヘアピン・釘等	ホーム	アメ玉類	ポット・魔法瓶		
	22人	18人	4人	9人	2人	2人	3人		
5位	ハードル	ゴールポスト	ベッド	窓・サッシ	鉄道車両の戸袋	硬貨	味噌汁・スープ		
	12人	16人	4人	5人	2人	2人	3人		

カ 13歳～18歳の事故事例

【事例1 人とぶつかる】

学校の体育館でバスケットボールの試合中に、相手の肘が頭部に当たりその後意識が朦朧として嘔吐した。（10代 中等症）

【事例2 運動中に落ちる】

体操の部活動中に、鉄棒から転落し顔面を受傷した。（10代 中等症）

【事故防止ポイント】

中学生、高校生の年代では、運動中の事故が多く発生しています。

ウォーミングアップやストレッチは入念に行い、けがの予防に努めましょう。

指導者や保護者等は、普段の練習や競技の前には事故防止の注意喚起を行うとともに、不測の事態に備え、応急手当、AED（自動体外式除細動器）の使用方法を身につけましょう。

(4) 19歳～64歳の事故

ア 年別搬送人員

19歳から64歳まででは、平成30年中に44,914人が救急搬送され、過去5年間で最大となっています（図3-49）。

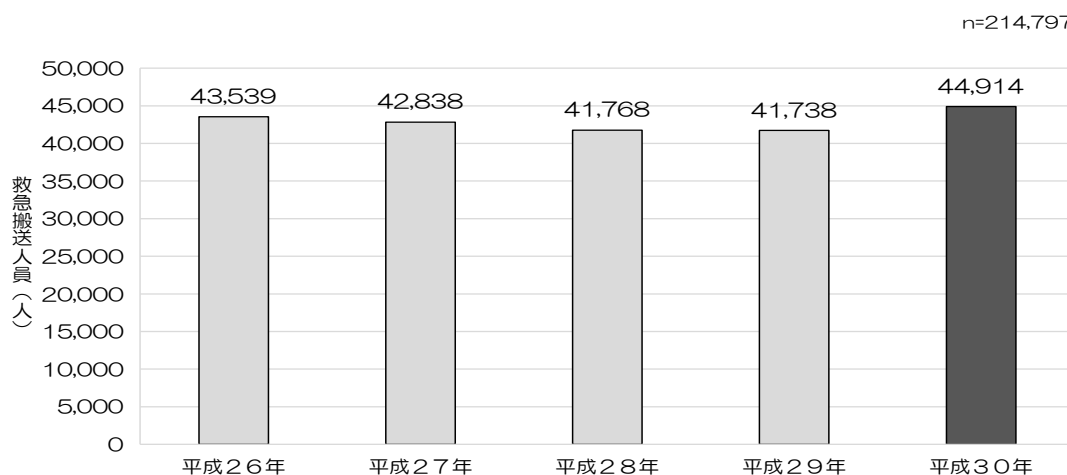


図3-49 年別の救急搬送人員

イ 月別搬送人員

平成30年を月別にみると、7月に最も多く搬送され、次いで8月が多くなっています（図3-50）。

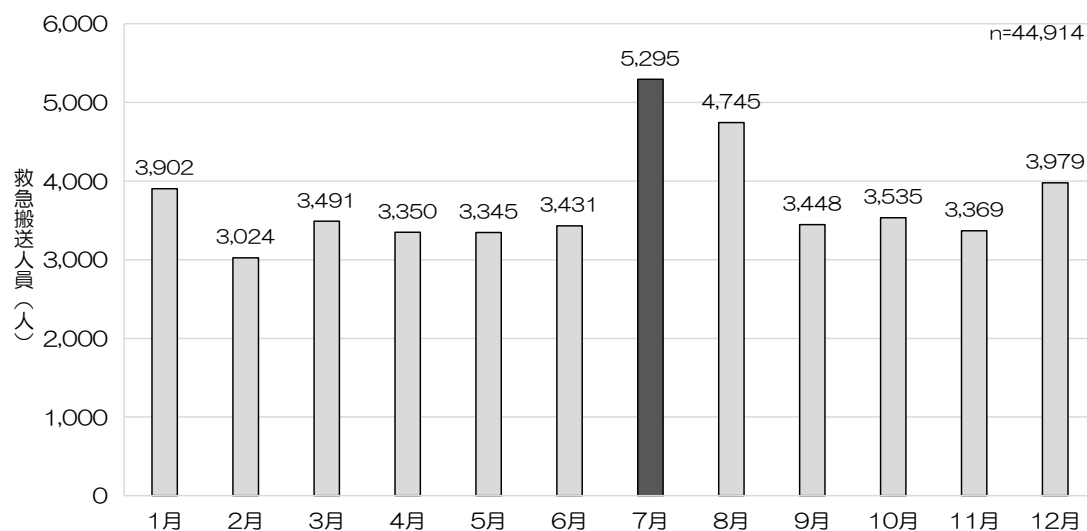


図3-50 月別の救急搬送人員

ウ 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所、道路・交通施設での事故が多く発生しています（図 3-51）。

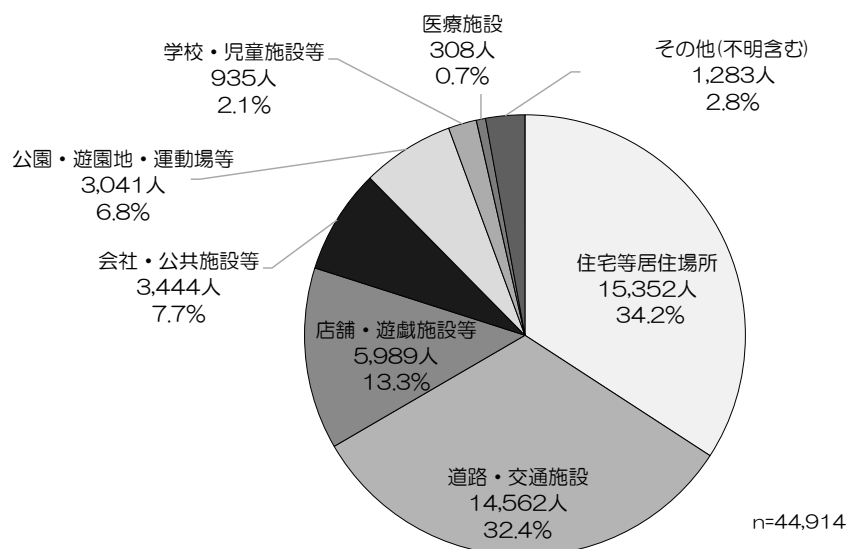
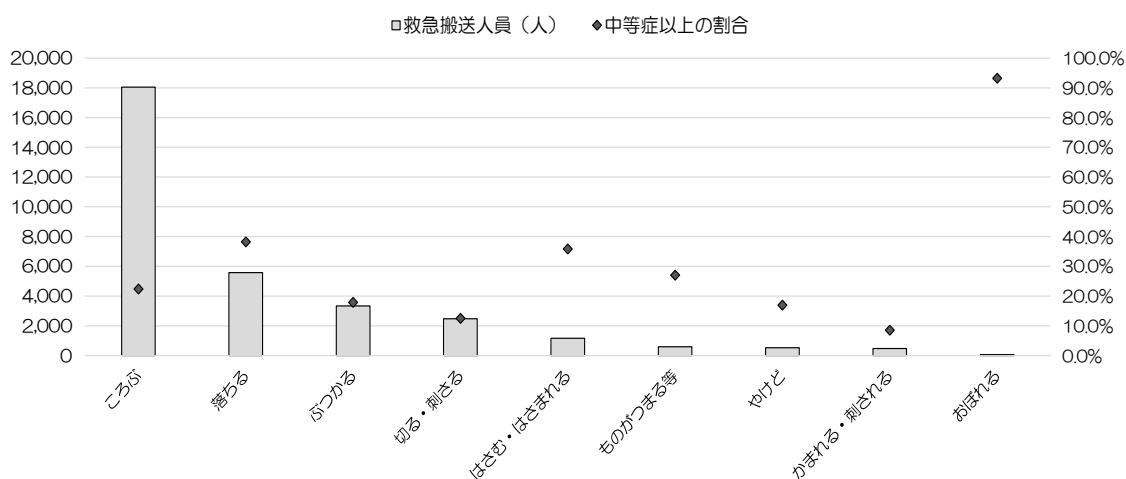


図 3-51 発生場所別救急搬送人員

エ 事故種別ごとの搬送人員

19歳から64歳では、「ころぶ」事故が最も多く発生しています。また、「おぼれる」事故は中等症以上の割合が最も高く、「落ちる」事故、「はさむ・はさまれる」事故の3割が中等症以上となっています（図 3-52）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
救急搬送人員	18,047人	5,578人	3,336人	2,476人	1,158人	589人	520人	468人	59人
中等症以上の割合	22.4%	38.2%	17.9%	12.5%	35.8%	27.0%	16.9%	8.5%	93.2%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図 3-52 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5つ）

「ころぶ」事故では、道路が最も多く、駅のホームから線路へ「落ちる」事故も多く発生しています（表7）。

表7 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	ものがつまる等	やけど	かまれる・刺される	おぼれる
1位	道路	階段	人	ナイフ	自動車	薬剤等によるもの	熱湯	動物等	浴槽
	5,219人	2,960人	508人	909人	90人	62人	147人	240人	27人
2位	階段	脚立・踏み台・足場	ボール	食器類	その他の機械	肉	天ぷら油	虫	河川
	1,764人	360人	254人	324人	84人	53人	86人	221人	8人
3位	ホーム	ホーム	壁・天井	電気のこぎり	手動ドア	洗剤等	味噌汁・スープ	魚介類	プール
	632人	355人	145人	115人	75人	49人	62人	7人	2人
4位	店内	椅子	手動ドア	スライサー	荷車	食物	ポット・魔法瓶		
	481人	193人	141人	86人	53人	48人	45人		
5位	自転車	自動車	その他の家具	手動ドア	フォークリフト	包み・袋	お茶・コーヒー類		
	297人	171人	124人	81人	52人	33人	21人		

カ 19歳～64歳の事故事例

【事例1 ホームから落ちる】

飲酒後、帰宅途中の駅構内で電車に乗ろうとした際に、誤ってホームと電車の際間に転落し胸部を受傷した。（30代 中等症）

【事故防止ポイント】

飲酒後に駅のホームから転落する事故が多く発生しています。ホームの線路側を歩かないようにし転落防止をしましょう。

【事例2 プレス機に指をはさむ】

プレス機で金属を加工していたところ、誤って指を挟んでしまい切断した。（40代 中等症）

【事故防止ポイント】

機械によるはさむ・はさまれる事故は重症化しやすいことを認識しましょう。

機械を稼働させたまま詰まりを除去しようとして受傷する事故も発生しています。機械の点検、掃除、修理をする場合には、機械のスイッチを切断し、コンセントを抜くなど、誤って電源が入ることがないことを確認してから作業しましょう。

(5) 65歳以上（高齢者）の事故

① 65歳以上（高齢者）

ア 年別搬送人員

高齢者の事故は年々増加しています。平成30年中の救急搬送人員は81,952人で平成26年と比較すると15,930人増加しています（図3-53）。

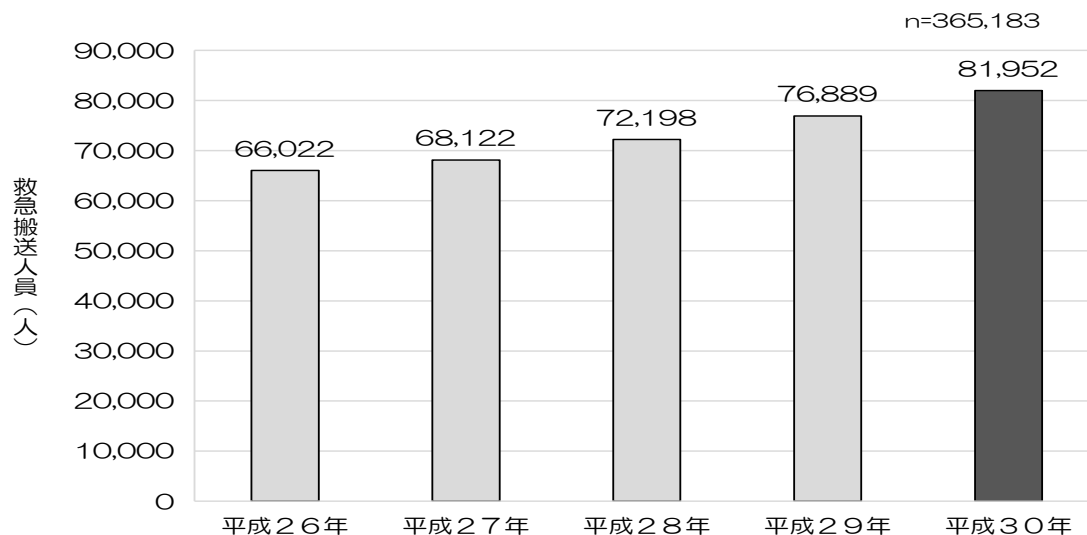


図3-53 年別の救急搬送人員

イ 初診時程度別搬送人員

高齢者は、入院を必要とする中等症以上となる割合が高く、4割を超えています（図3-54）。

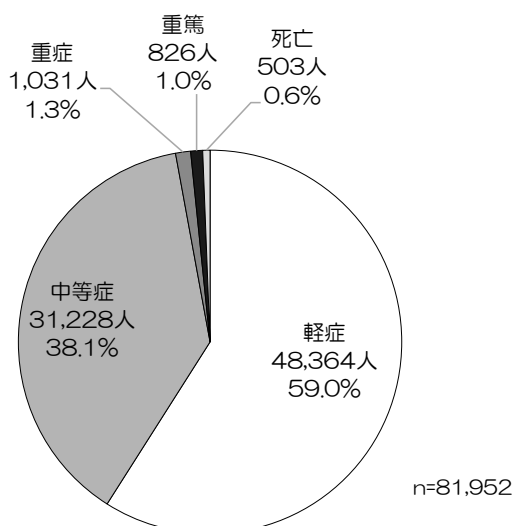


図3-54 初診時程度別救急搬送人員

ウ 発生場所別搬送人員

住宅等居住場所での事故が6割を超え、道路・交通施設での事故と合わせると約9割を占めています（図3-55）。

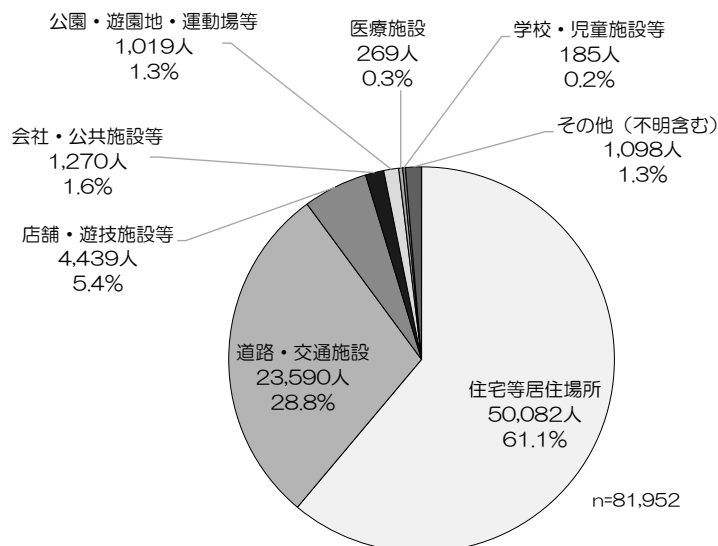
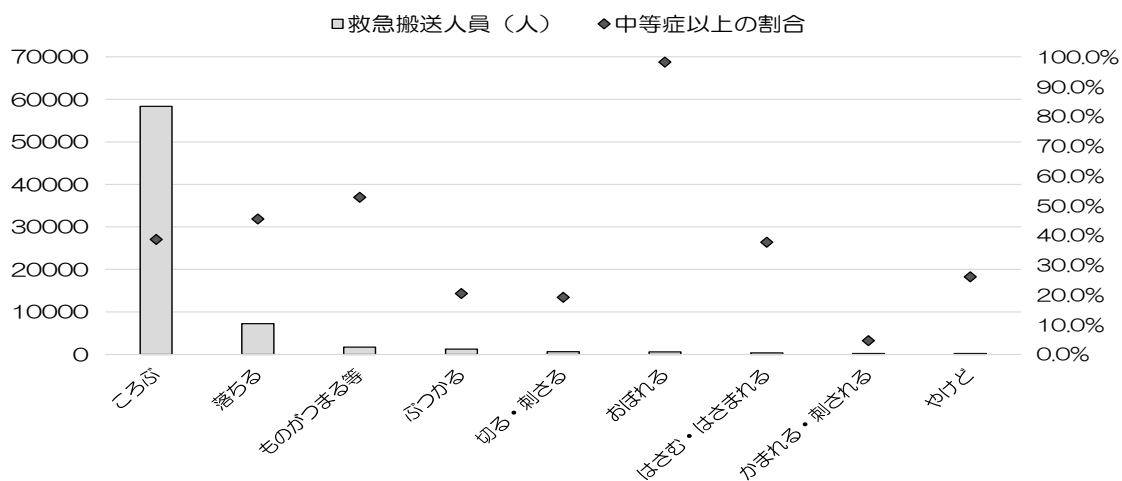


図3-55 発生場所別救急搬送人員

エ 事故種別ごとの搬送人員

高齢者の「おぼれる」事故は、98.3%が中等症以上と最も高く、「ころぶ」事故、「落ちる」事故、「ものがつまる等」の事故、「はさむ・はさまれる」事故は3割を超える人が中等症以上となっており、高齢者は他の年代と比べ、重症化しやすくなっています（図3-56）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ものがつまる等	ぶつかる	切る・刺さる	おぼれる	はさむ・はさまれる	かまれる・刺される	やけど
救急搬送人員	58,368人	7,225人	1,696人	1,238人	624人	575人	366人	236人	203人
中等症以上の割合	38.7%	45.6%	52.8%	20.5%	19.2%	98.3%	37.7%	4.7%	26.1%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-56 事故種別ごとの救急搬送人員と中等症以上の割合

オ 事故種別ごとの事故発生の多かった要因（上位5つ）

「ころぶ」事故は道路、段差、玄関で多く発生しています。また、「落ちる」事故は、階段、ベッド、椅子が多くなっており、「おぼれる」事故は、そのほとんどが浴槽で発生しています（表8）。

表8 事故種別ごとの事故発生の多かった要因上位5つ

種別 順位	ころぶ	落ちる	ものが つまる等	ぶつかる	おぼれる	切る・ 刺さる	はさむ・ はさまれる	かまれる・ 刺される	やけど
1位	道路	階段	食物	壁・天井	浴槽	ナイフ	手動ドア	虫	熱湯
	16,239人	3,329人	366人	82人	544人	173人	43人	121人	60人
2位	階段	ベッド	おかゆ類	その他の家具	プール	電気のかざり	ベッド	動物等	ヤカン
	2,186人	1,135人	129人	77人	4人	83人	21人	109人	44人
3位	玄関	椅子	肉	柱	河川	食器類	プレス機	魚貝類	天ぷら油
	1,275人	513人	98人	72人	3人	44人	20人	2	14人
4位	廊下	脚立・踏み台・足場	包み・袋	手動ドア	池	ハサミ・爪切り	その他の機械		味噌汁・スープ
	1,263人	373人	94人	67人	1	28人	18人		13人
5位	トイレ	エスカレーター	御飯	人		入れ歯によるもの	自動車のドア		ポット・魔法瓶
	708人	248人	90人	44人		27人	16人		12人

カ 65歳以上（高齢者）の事故事例

【事例1 餅を詰まらせる】

自宅で餅を食べた際に喉に詰まらせ、家族の前で倒れた。（80代 重篤）

【事故防止ポイント】

高齢者の「ものがつまる等」の事故は約5割が中等症以上と診断されています。
食べ物は小さく切ってよく噛んで食べましょう。



【事例2 包みの誤飲】

自宅で処方薬を服用しようとした際に、誤って薬包を一緒に飲み込んでしまった。
(60代 中等症)

【事故防止ポイント】

高齢者と一緒に食事する際は、適時食事の様子を見るなど注意を払うように心がけましょう。

【事例3 ころぶ事故】

ゴミ捨てに行く途中、段差につまづき転倒し、歩行困難となった。(80代 中等症)

【事故防止ポイント】

高齢者のころぶ事故の約4割が中等症以上と診断されています。
自宅内では整理整頓を心がけ、家具や敷物による転倒を防止しましょう。

【事例4 脚立から落ちる】

自宅庭先において脚立(高さ 1.3m)にのって剪定作業中、バランスを崩して転落した。(60代 中等症)

【事故防止ポイント】

脚立や踏み台に上がって作業や清掃をしていて転落する事故が多く発生しています。

- 脚立の天板の上、脚立・はしごの上方に乗って作業しないようにしましょう。
- 安定した足場を選び、バランスを崩さないようにしましょう。
- 使用時は補助者に支えてもらいましょう。
- 年齢や個々の体力を勘案し、無理な作業は控えましょう。

事業者の場合、法令では、2m以上の高所作業については、墜落等の危険を防止する措置(安全帯使用等)をとることが事業者には義務付けられ、労働者も指示に従う義務があります。



② 65歳～74歳（前期高齢者）と75歳以上（後期高齢者）

ア 年別搬送人員

前期高齢者と後期高齢者の救急搬送人員は年々増加しています。特に後期高齢者の増加ペースは前期高齢者に比べて早く、毎年2千人から4千人のペースで増加しています（図3-57、図3-58）。

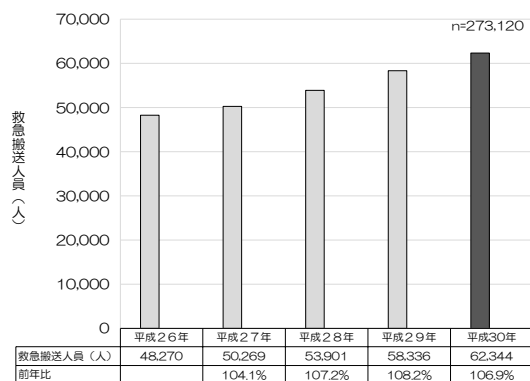
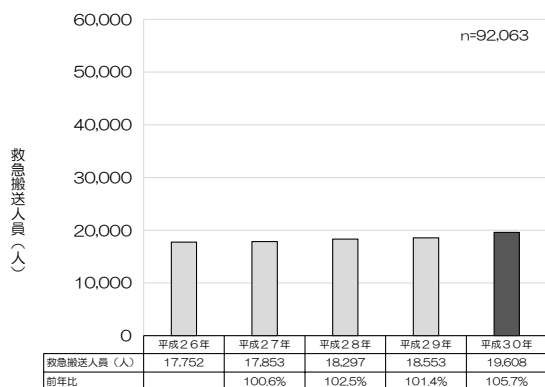
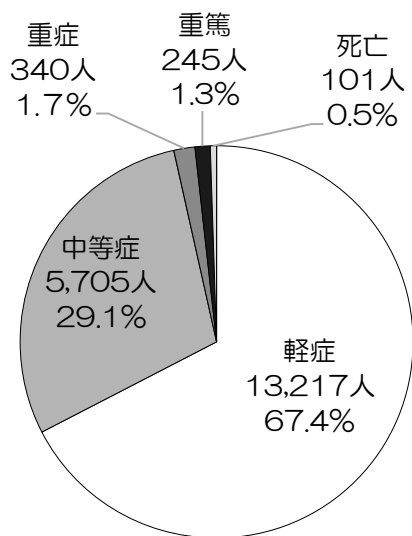


図3-57 年別の救急搬送人員（前期高齢者）

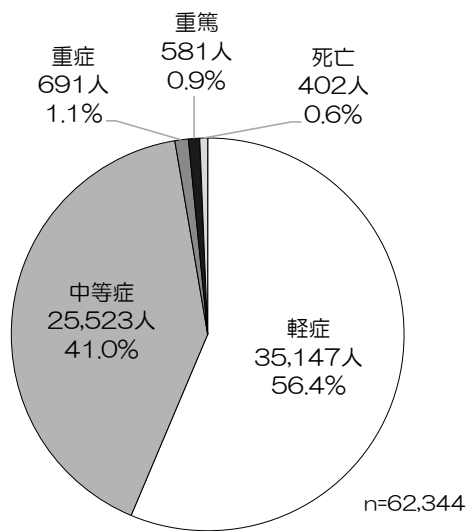
図3-58 年別の救急搬送人員（後期高齢者）

イ 初診時程度別搬送人員

初診時程度別にみると、前期高齢者では中等症以上の割合が約3割ですが、後期高齢者になると、さらに増加して4割以上を占めています（図3-59、図3-60）。



n=19,608



n=62,344

図3-59 初診時程度別（前期高齢者）

図3-60 初診時程度別（後期高齢者）

ウ 発生場所別搬送人員

前期高齢者では住宅等居住場所での事故が最も多く43.5%となっています。次いで多いのが道路・交通施設で39.1%となっています。一方で後期高齢者になると、外出する機会や運動量がさらに減少するため、住宅等居住場所での割合が66.7%に増加しています（図3-61、図3-62）。

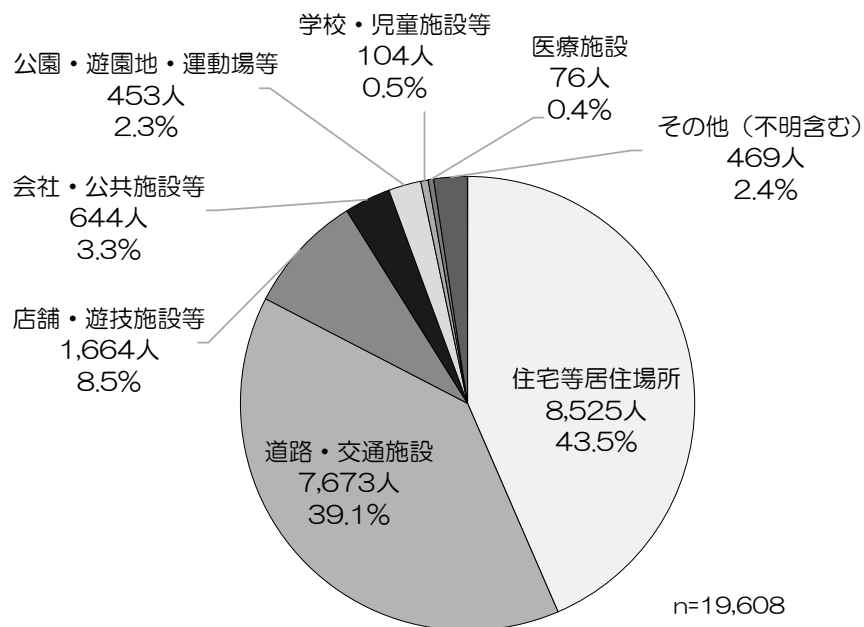


図3-61 発生場所別救急搬送人員（前期高齢者）

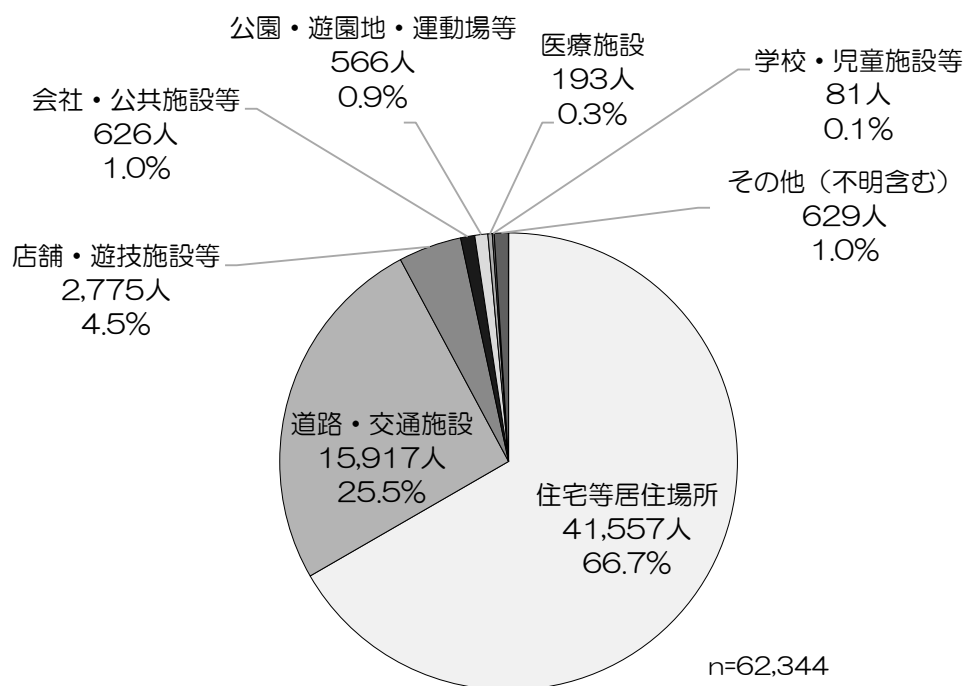
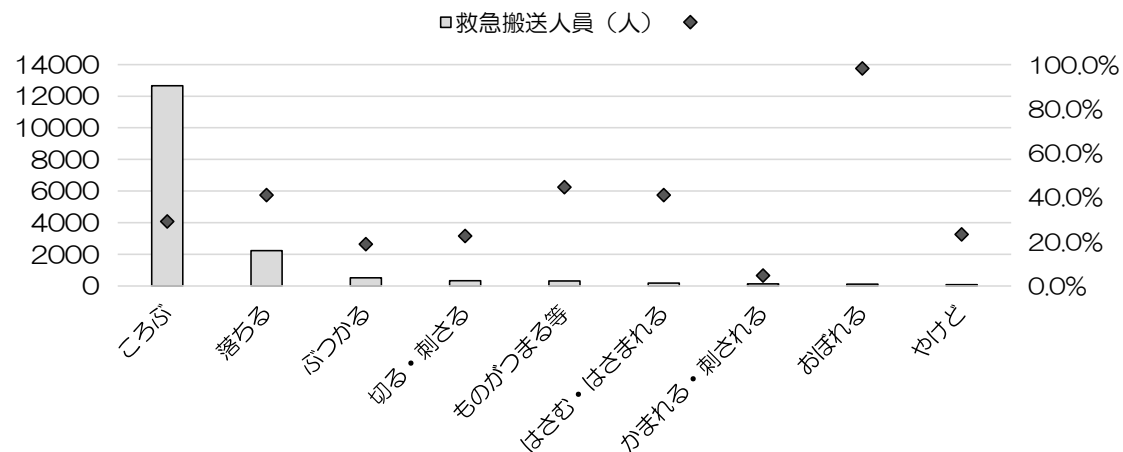


図3-62 発生場所別救急搬送人員（後期高齢者）

エ 事故種別ごとの搬送人員

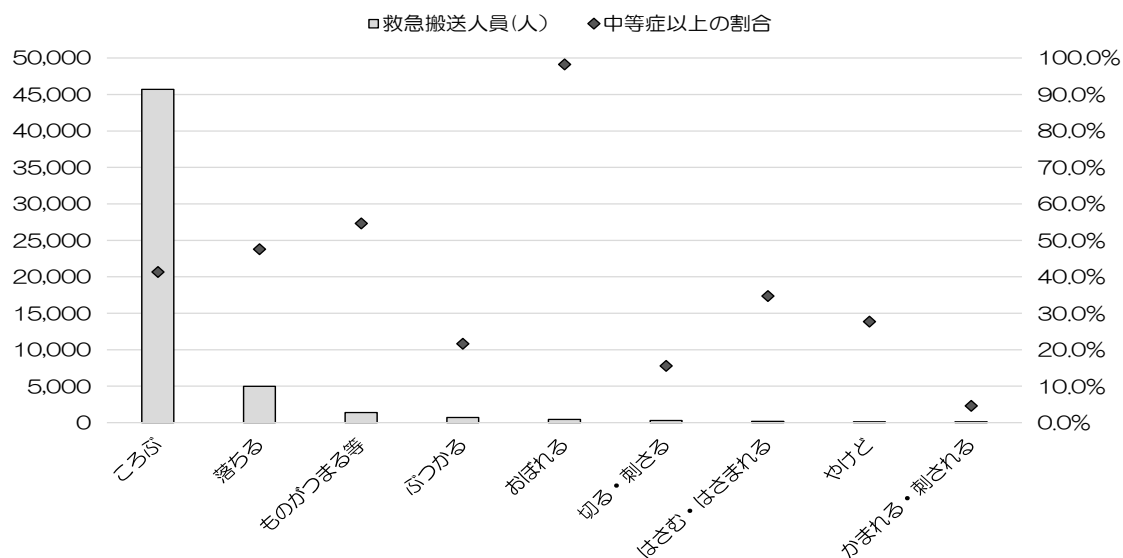
「ころぶ」、「落ちる」、「ものがつまる等」、「ぶつかる」、「やけど」の事故では前期高齢者に比べて後期高齢者の方が中等症以上の割合が多く、重症化しやすくなっています（図3-63、図3-64）。



事故種別	ころぶ	落ちる	ぶつかる	切る・刺さる	ものがつまる等	はさむ・はさまれる	かまれる・刺される	おぼれる	やけど
救急搬送人員	12,656人	2,240人	517人	328人	311人	173人	127人	117人	73人
中等症以上の割合	29.1%	41.1%	19.0%	22.6%	44.7%	41.0%	4.7%	98.3%	23.3%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-63 事故種別ごとの救急搬送人員（前期高齢者）



事故種別	ころぶ	落ちる	ものがつまる等	ぶつかる	おぼれる	切る・刺さる	はさむ・はさまれる	やけど	かまれる・刺される
救急搬送人員	45,712人	4,985人	1,385人	721人	458人	296人	193人	130人	109人
中等症以上の割合	41.3%	47.5%	54.7%	21.6%	98.3%	15.5%	34.7%	27.7%	4.6%

※ 事故種別が「その他」、「不明」を除く

図3-64 事故種別ごとの救急搬送人員（後期高齢者）

第4部 関連器物からみた事故

日常生活の中では、エスカレーターで転んだり、遊具から落ちたり、日々使用する様々なもの（器物）により事故に遭うことが多くあります。

ここでは、これまでに多くの事故が発生している器物について事故の傾向をまとめました。また、使い方によっては思いがけない危険が潜んでいる器物についても取り上げました。

1 エスカレーター

エスカレーターは、駅やショッピングセンター等、多くの場所で利用されています。エスカレーターに乗っていてバランスを崩して転んだり、小さな子供が靴を挟まれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成26年から平成30年の5年間で、6,975人が救急搬送されています。

平成30年中は1,359人が救急搬送されており、65歳以上の高齢者が全体の6割以上を占めています（図4-1）。

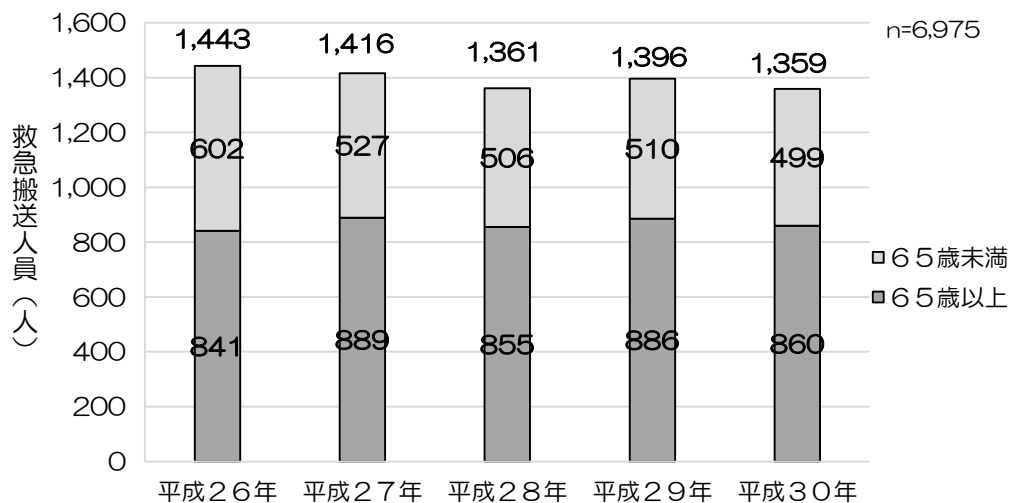


図4-1 年別救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（５歳単位）別にみると、６５歳から８９歳までの各年齢層で１００人以上が救急搬送されています（図４－２）。

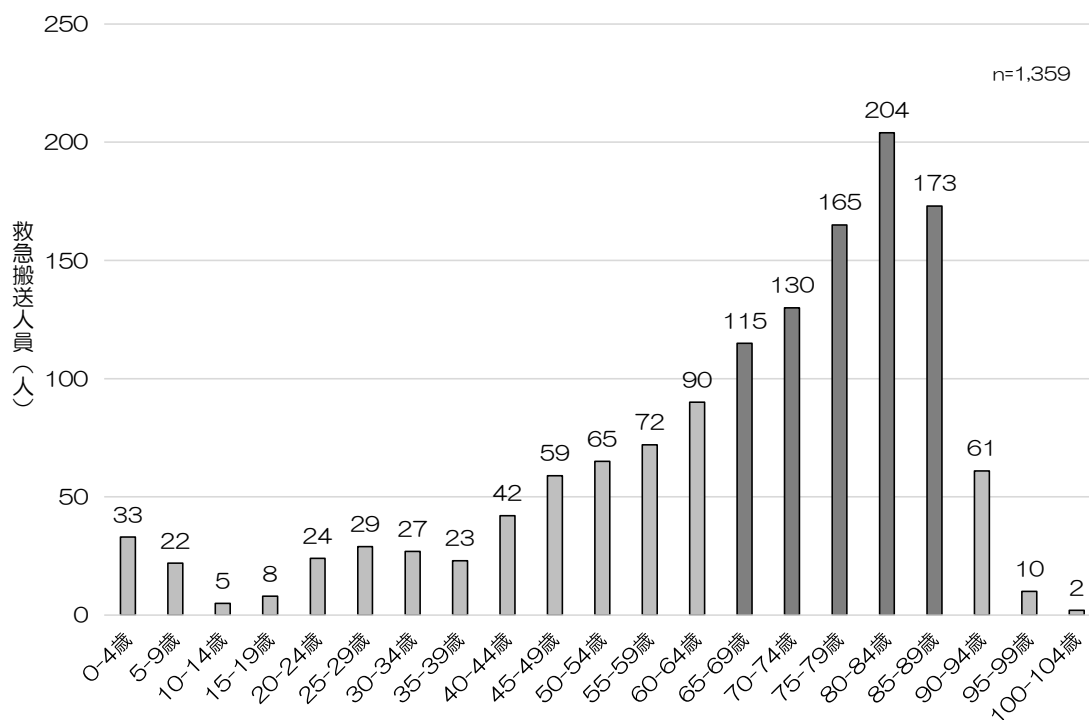


図４－２ 年齢層別救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

高齢者と高齢者以外（６４歳以下）の時間帯別救急搬送人員をみると、高齢者では１０時台から１６時台に多く発生しています。また６４歳以下では、１６時台以降に増加し、２３時台が最も多くなっています（図４－３）。

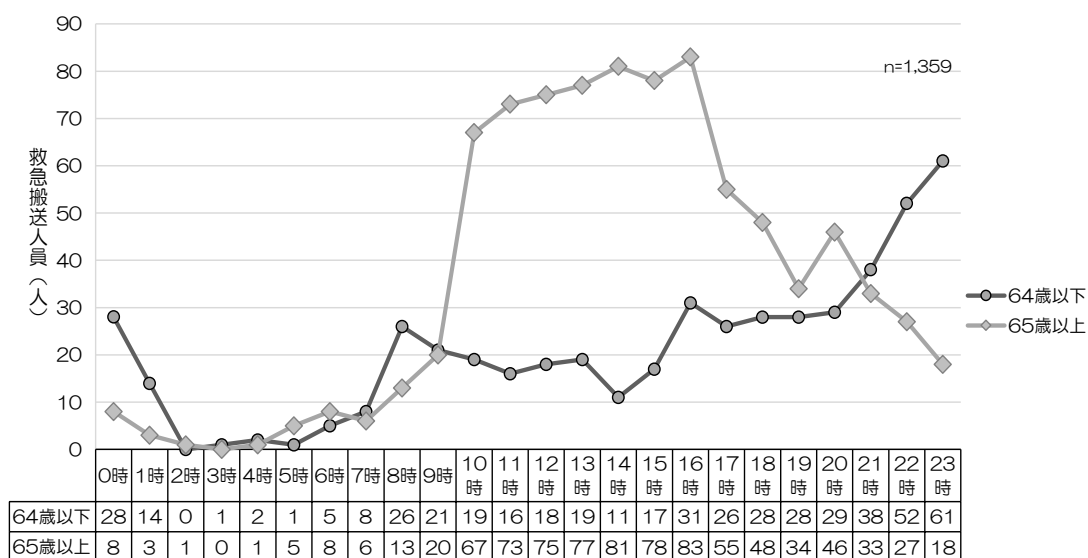


図４－３ 時間帯別救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エスカレーターでの事故を事故種別ごとにみると、「ころぶ」事故、「落ちる」事故が9割以上を占めています（図4-4）。

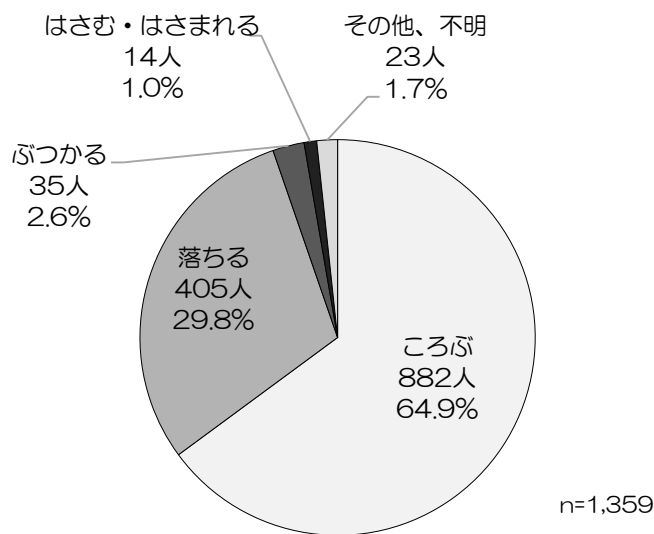


図 4-4 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エスカレーターで受傷して救急搬送された人の約2割は中等症以上と診断されています（図4-5）。

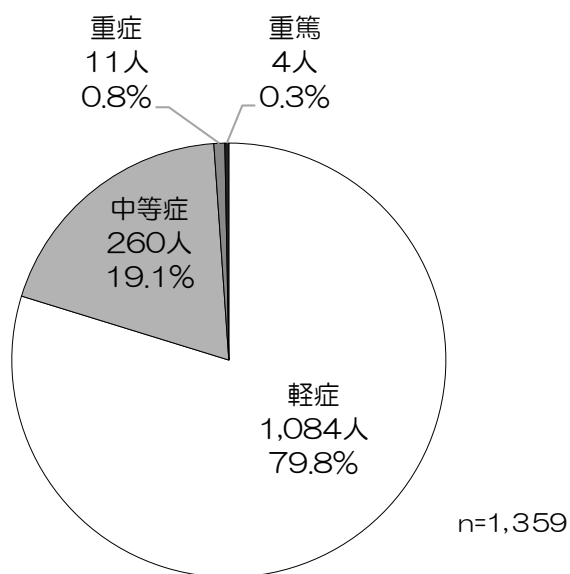


図 4-5 初診時程度別救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所で見ると、駅などの道路・交通施設で最も多く発生していますが、高齢者では店舗・遊技施設等が4割を占めています（図4-6、図4-7）。

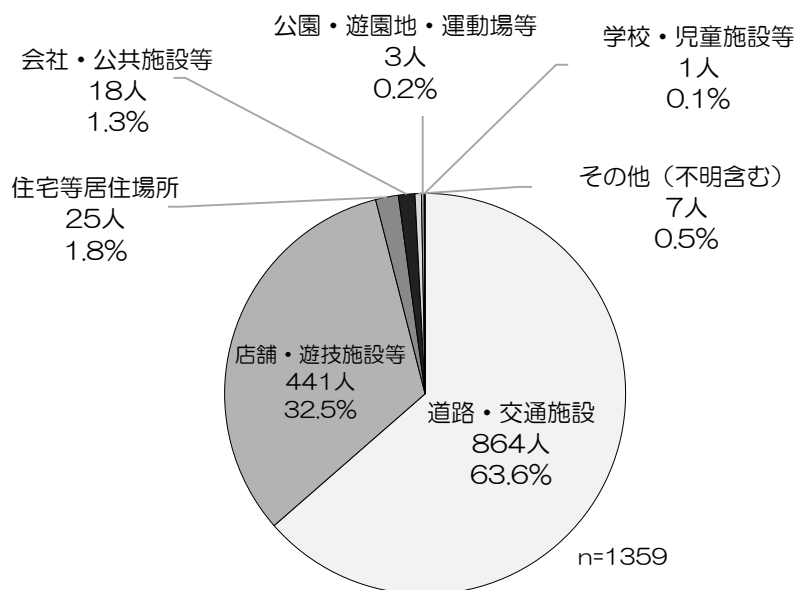


図4-6 発生場所別救急搬送人員

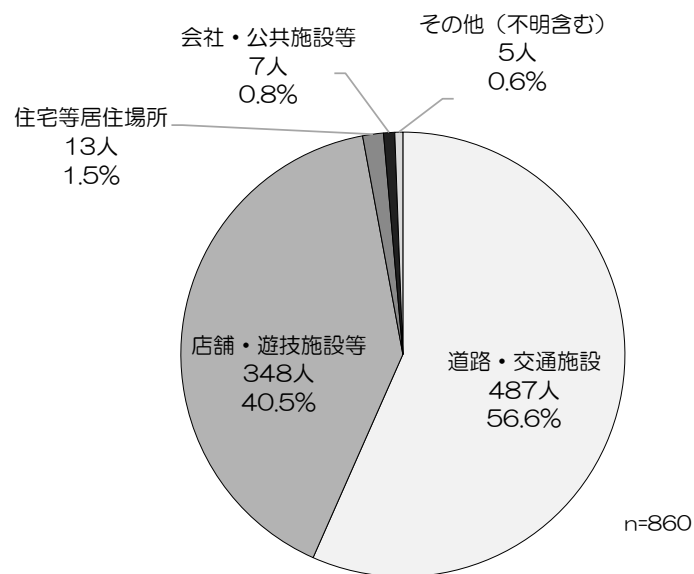


図4-7 発生場所別救急搬送人員（高齢者）

(7) エスカレーターでの事故事例

【事例1 飲酒後に転落】

飲酒後、下りエスカレーターに乗っている際、誤って約5段の高さから転落して顔面を受傷した。(50代 中等症)

【事例2 サンダルがはさまれる】

エスカレーターで地下1階へ下っていたところ最終段で、履いていたゴム製のサンダルが挟まり足の指を受傷した。(8歳 中等症)

【事例3 指が挟まれる】

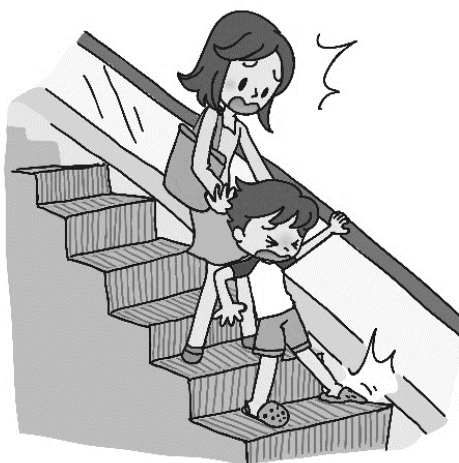
店舗内で買い物中、1階から2階へ上がるエスカレーター最上段部の手すり巻き込み部に指が挟まれ、抜けなくなった。(5歳 中等症)

【事例4 人が倒れてきて転落】

上りエスカレーターに乗っていたところ、前方の方がバランスを崩し、それらに巻き込まれ後方へ転倒し受傷した。(60代 軽症)

【エスカレーターでの事故防止】

- 手すりにつかまりましょう。
- 飲酒後の事故が多く発生しているため十分に注意しましょう。
- エスカレーター上の歩行は、バランスを崩しやすく、他の利用者と接触するおそれがあります。ステップに立ち止って利用しましょう。
- 靴の挟まれ等を防止するため、ステップの黄色い線の内側に立ちましょう。
- 買い物カート等を乗り入れると、バランスを崩すおそれがあるため、注意しましょう。
- 子供がエスカレーター近くで遊ばないように注意しましょう。



2 エレベーター

エレベーターは、共同住宅やビル、店舗等、あらゆる場所で利用されています。エレベーターの乗降時に転んだり、小さな子供が手や指をはさまれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成26年から平成30年の5年間で778人が救急搬送されています。平成30年中は150人が救急搬送されています(図4-8)。

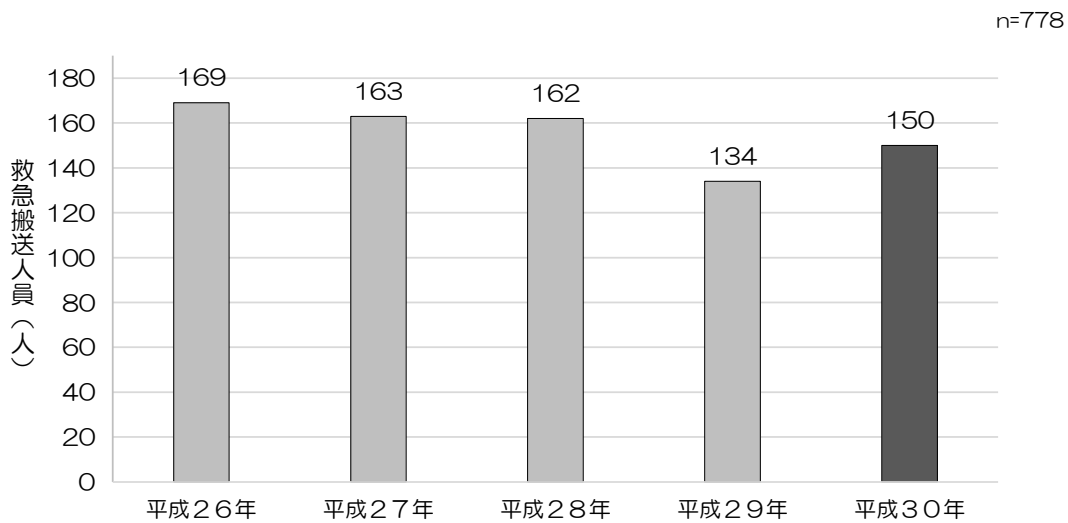


図4-8 年別救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層(5歳単位)別にみると、0歳から4歳が36人と最も多くなっています(図4-9)。

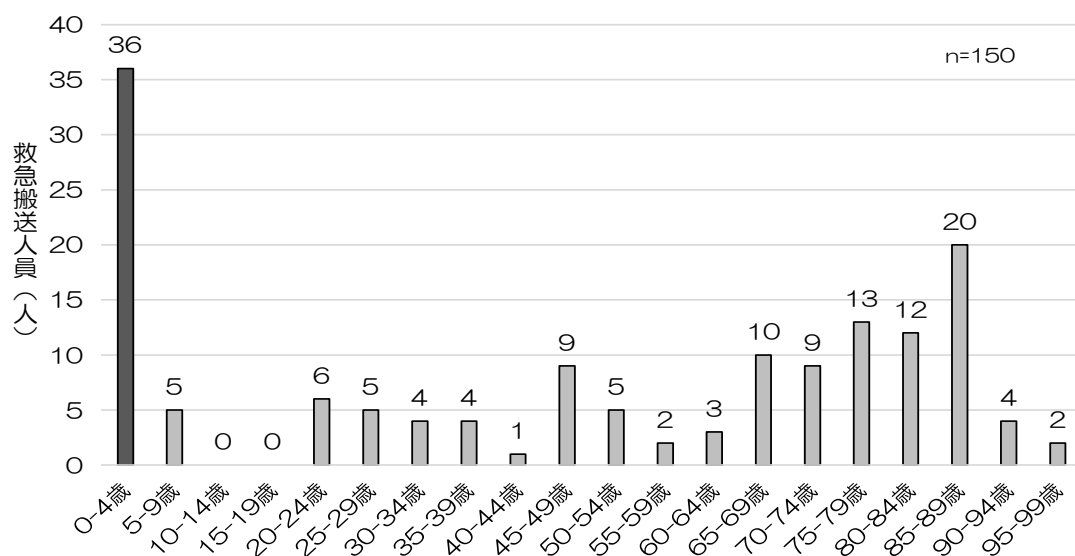


図4-9 年齢層別救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

時間帯別救急搬送人員をみると、14時台が18人と最も多く、全般的に日中の時間帯が多くなっています（図4-10）。

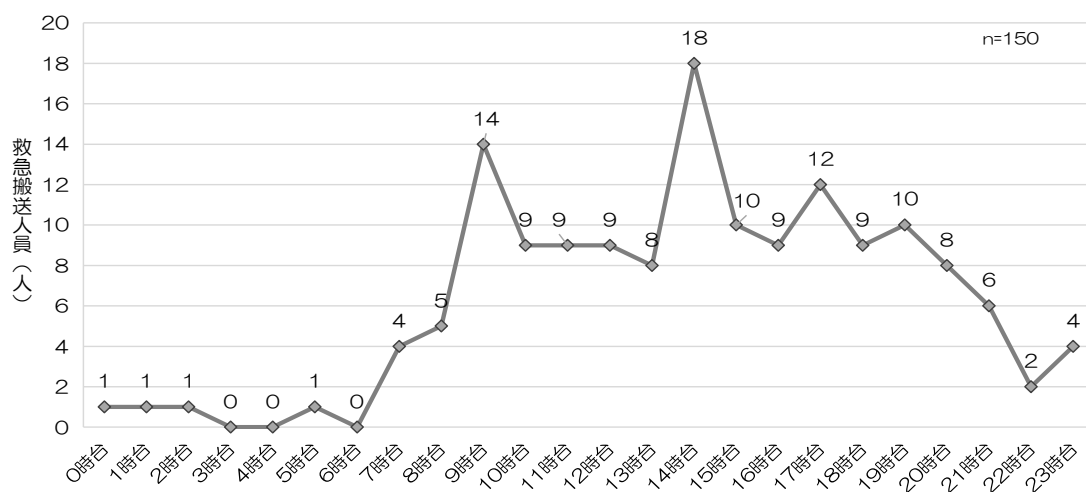


図4-10 時間帯別救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エレベーターでの事故を事故種別ごとにみると、約5割がころんで受傷しています。また、手や指等が扉や戸袋にはさまれたりして受傷する事故も多く発生しています（図4-11）。

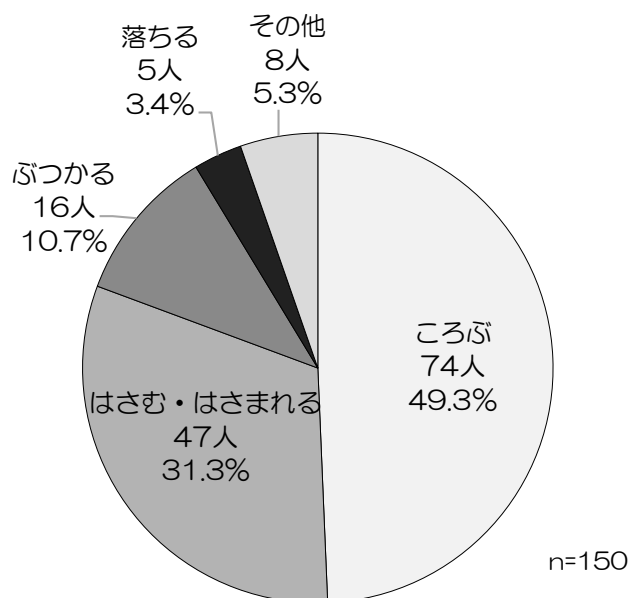


図4-11 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エレベーターでの事故で救急搬送された人の3割以上は、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されています（図 4-12）。

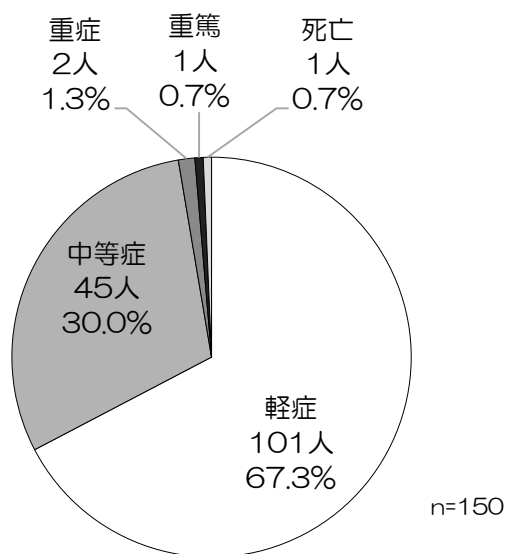


図 4-12 初診時程度別救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所でみると、住宅等居住場所や店舗・遊技施設等、道路・交通施設で多く発生しており、8割がこの3つの場所で発生しています（図 4-13）。

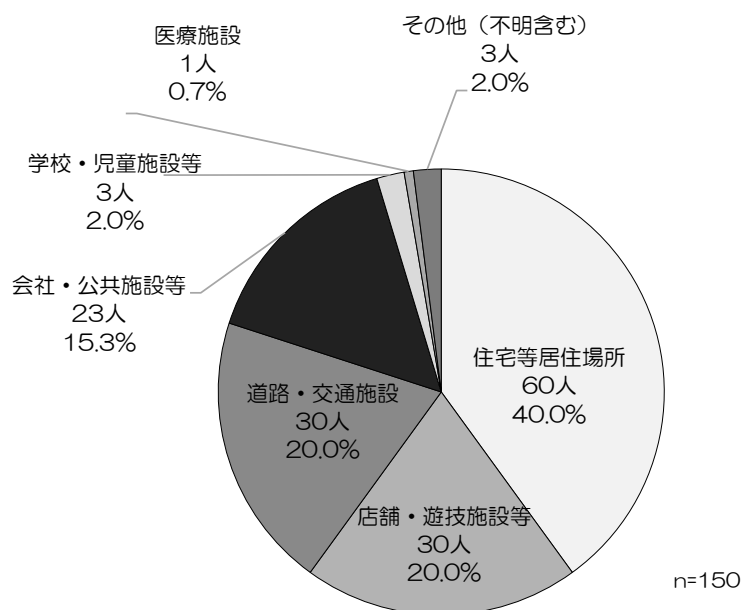


図 4-13 発生場所別救急搬送人員

(7) 0歳～5歳のエレベーターによる事故の内訳

0歳から5歳のエレベーターによる事故は、36人中32人が「はさむ・はさまれる」事故となっており、手や指等を挟まれる事故が多くなっています（表9）。

表9 0～5歳のエレベーターによる事故の内訳

	はさむ・はさまれる		ぶつかる	総計
	戸袋	扉		
0 歳	0	0	0	0
1 歳	1 0	4	2	1 6
2 歳	7	4	2	1 3
3 歳	1	4	0	5
4 歳	2	0	0	2
5 歳	0	0	0	0
小計	2 0	12	4	36
総計	32			

(8) エレベーターでの事故事例

【事例1 戸袋にはさまれる】

子どもを抱っこした親がエレベーターに寄りかかった状態でおり、エレベーターのドアが開いた際に子どもの手の指がエレベーターの戸袋にはさまれた。（2歳 軽症）

【事例2 ドアにぶつかる】

マンションでエレベーターに乗ろうとした際、閉まりかけた扉に体がぶつかり転倒した。（70代 中等症）

【エレベーターでの事故防止】

- 乗降時は床との段差に注意し、駆け込みなど無理な乗降はやめましょう。
- ドアの開閉時にはドアに触れず、荷物や衣服などが巻き込まれないように注意しましょう。また、子供はドアから離れた位置にさせましょう。
- エレベーターを使った作業時の事故は、重症事故につながることを認識し、作業手順、制限重量などに十分注意しましょう。

3 自転車の幼児用座席

保護者が自転車の幼児用座席に子供を乗せていて転倒したり、子供だけを残して自転車を離れ、自転車が倒れるなどして乳幼児が受傷する事故が多く発生しています。

(1) 年別搬送人員

自転車の幼児用座席から転落するなどして平成26年から平成30年の5年間に1,080人の乳幼児（0歳から5歳）が救急搬送されています。平成30年中は236人が救急搬送されています（図4-14）。

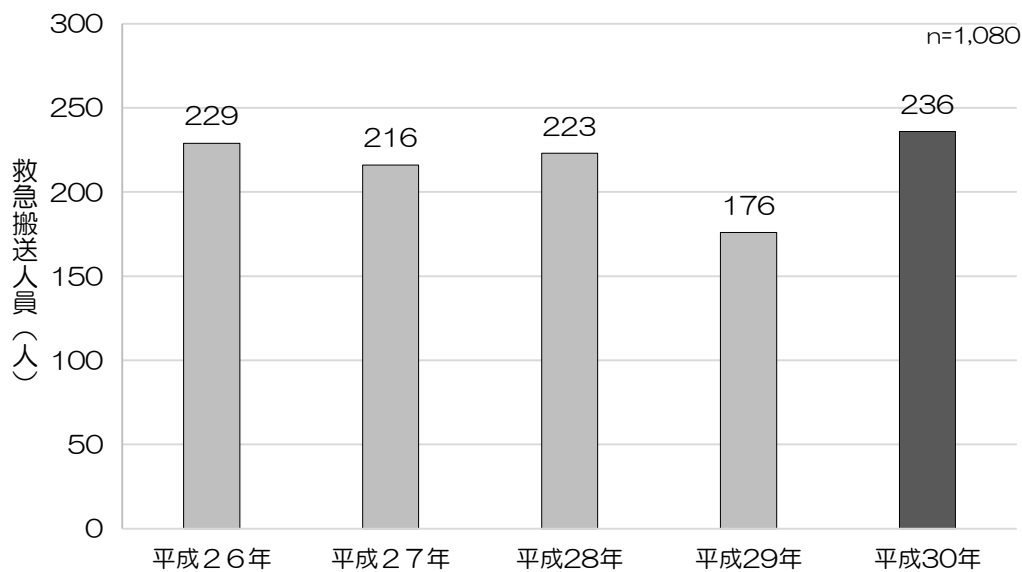


図4-14 年別救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、2歳児、3歳児の事故が多く発生しています（図4-15）。

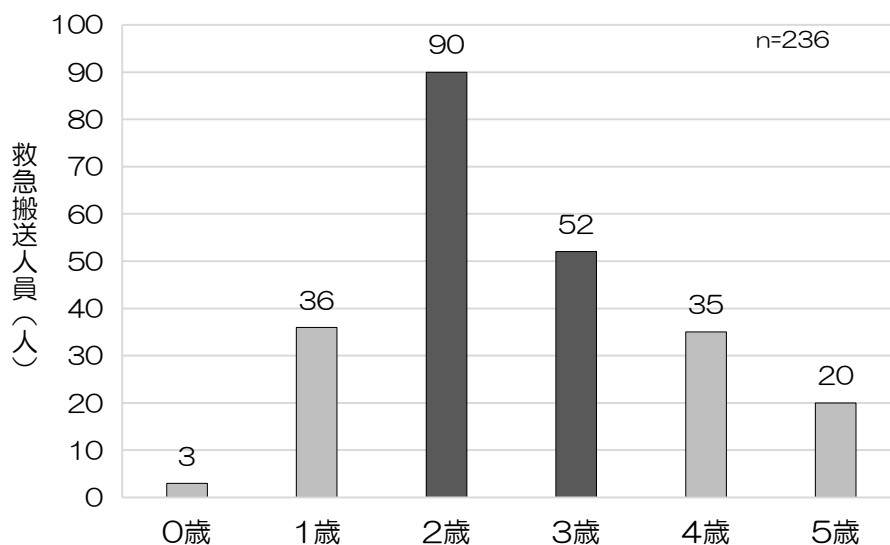


図4-15 年齢別救急搬送人員

(3) 初診時程度別搬送人員

初診時程度では、軽症が9割以上となっています（図 4-16）。

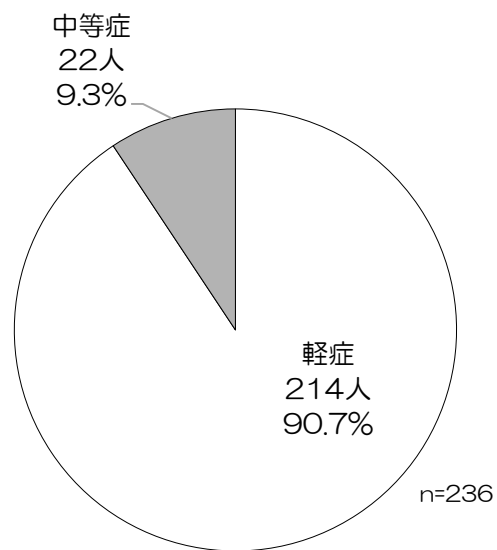


図 4-16 初診時程度別救急搬送人員

(4) 受傷部位別搬送人員

受傷部位別に分類すると、全体の約8割が顔や頭を受傷しています。また、足や腕を骨折する事故も発生しています（図 4-17）。

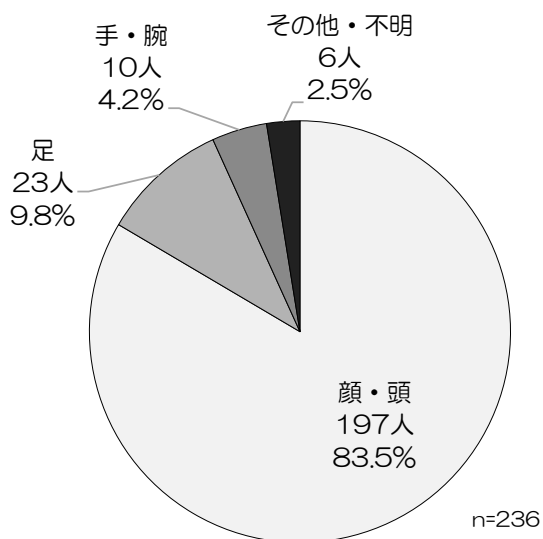


図 4-17 受傷部位別救急搬送人員

(5) 自転車の幼児用座席での事故事例

【事例1 バランスを崩す】

親が運転する自転車の補助イスに乗っており、親が一時的に降車し、スタンドをかけていたところ、バランスを崩して転倒し頭部を受傷した。(4歳 中等症)

【事例2 風にあおられる】

親が運転する自転車の補助イスに乗車中、停車中に風にあおられて自転車ごと転倒し、肘部を受傷した。(4歳 中等症)

【自転車の幼児用座席での事故防止】

- 子供を自転車の幼児用座席に乗せたまま自転車から離れないようにしましょう。
 - ヘルメットは、頭部への衝撃を緩和するのに有効であるため、ヘルメットを着用させてから自転車に乗せましょう。
 - 転落防止のため、備え付けのベルトを締めましょう。
 - 自転車走行中以外にも事故が発生することを意識しましょう。
 - ルールとマナーを守った運転を心がけましょう。
- ※ 平成25年7月1日に「東京都自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」が施行されました。



4 遊 具

(1) 年別搬送人員

遊具による事故で、平成26年から平成30年の5年間に4,365人の子供（12歳以下）が救急搬送されています。平成30年中は902人が救急搬送されています（図4-18）。

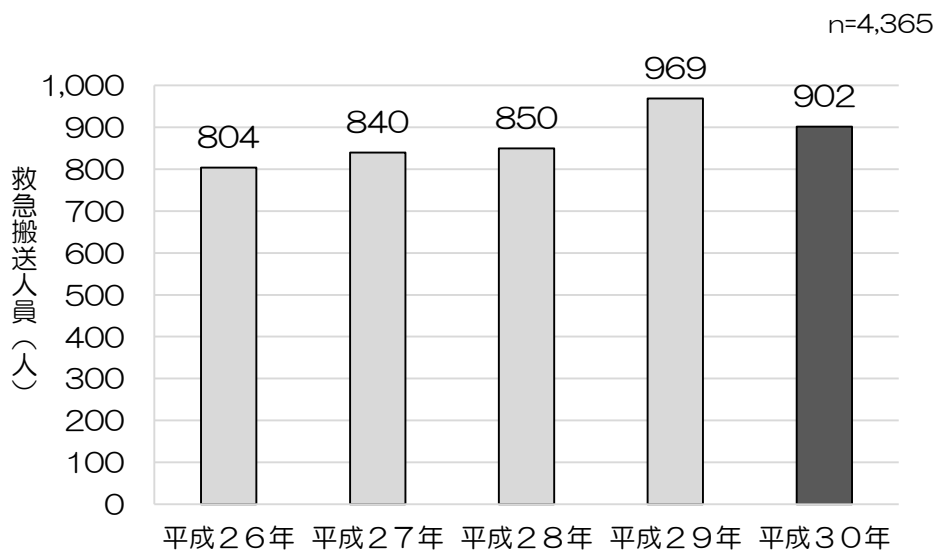


図4-18 年別救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、4歳が最も多く、98人が救急搬送され、次いで、2歳と7歳が97人となっています（図4-19）。

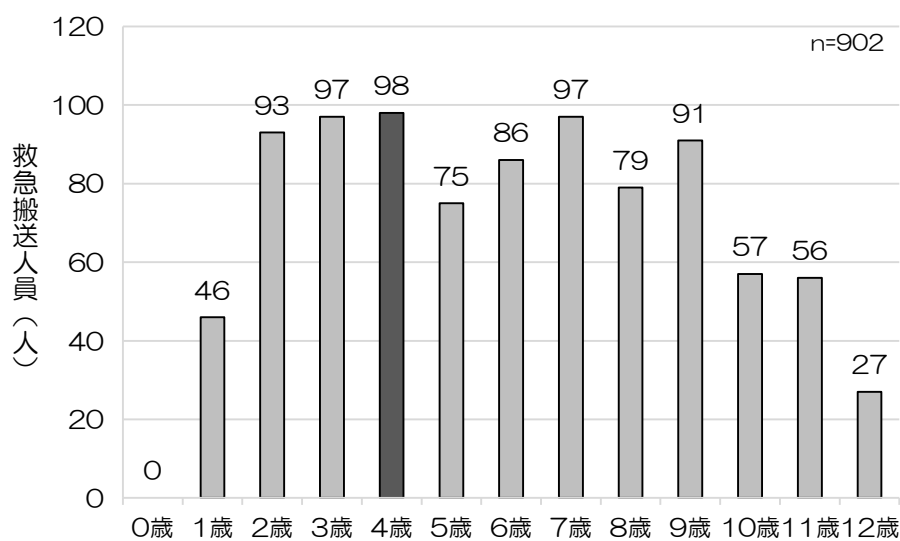


図4-19 年齢別救急搬送人員

(3) 月別搬送人員

月別では、4月が最も多く、120人が救急搬送されています。次いで5月に106人の子供が救急搬送されています（図4-20）。

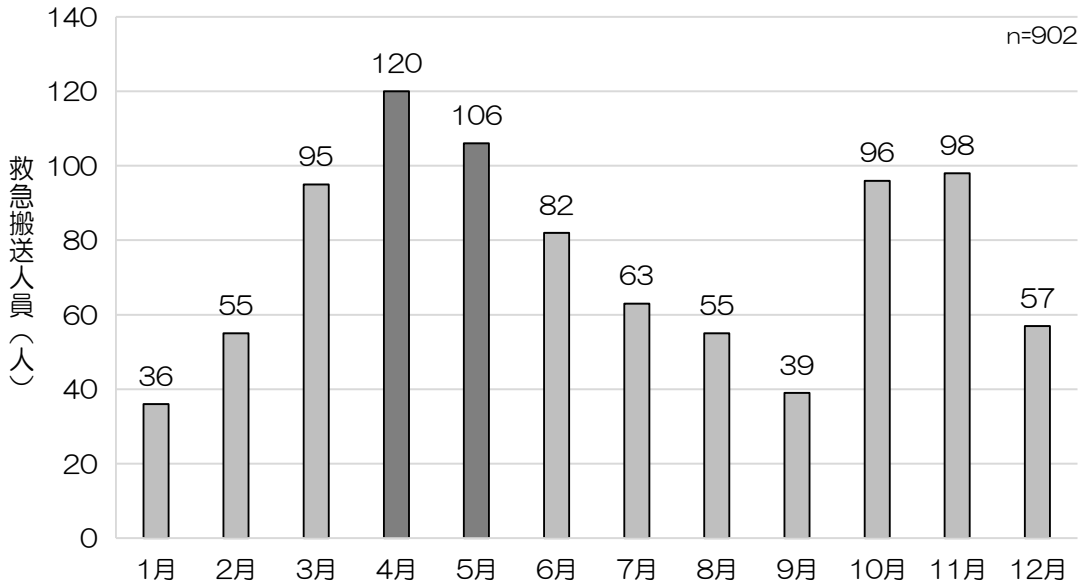
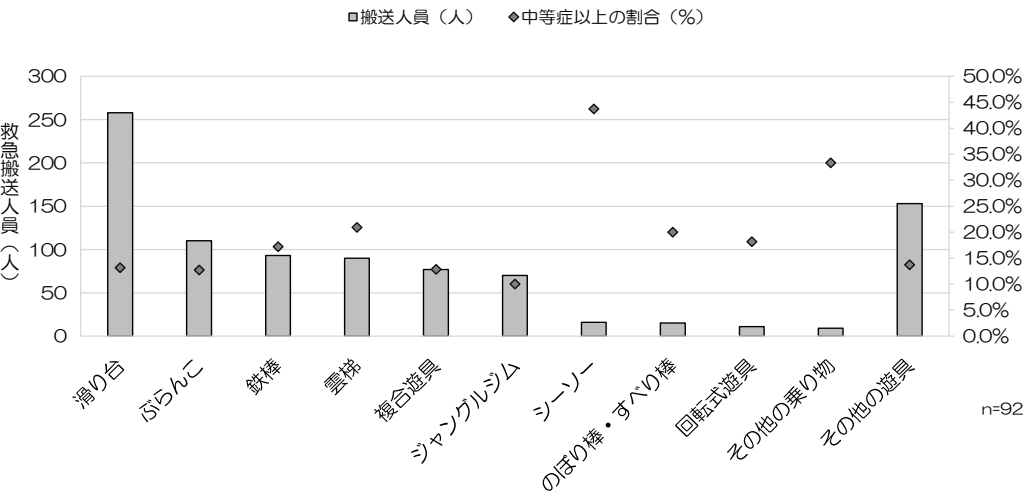


図4-20 月別救急搬送人員

(4) 遊具別の搬送人員と中等症以上の割合

遊具別にみると滑り台での事故が最も多く発生しています。また、シーソー、その他の乗り物事故では中等症以上の割合が3割以上と最も高く、雲梯やのぼり棒・滑り棒では中等症以上の割合が2割以上となっています（図4-21）。



遊具	滑り台	ぶらんこ	鉄棒	雲梯	複合遊具	ジャングルジム	シーソー	のぼり棒・すべり棒	回転式遊具	その他の乗り物 (アトラクション)	その他の遊具
救急搬送人員	258人	110人	93人	90人	77人	70人	16人	15人	11人	9人	153人
中等症以上の割合	13.2%	12.7%	17.2%	20.9%	12.9%	10.0%	43.8%	20.0%	18.2%	33.3%	13.7%

図4-21 遊具別の救急搬送人員と中等症以上の割合

(5) 遊具での事故事例

【事例1 滑り台】

公園内において、友人と鬼ごっこをしていて、高さ約 1.5m の滑り台から地面へ飛び降りたところ手首を受傷した。(9歳 中等症)

【事例2 のぼり棒】

幼稚園の園庭にある登り棒(高さ約2m)に足をかけて遊んでいたところ、誤って落下し受傷した。(6歳 中等症)

【事例3 鉄棒】

小学校の授業中、鉄棒にぶら下がっていた際に、友達に押されて地面に落下し腕を受傷した(7歳 中等症)

【事例4 ブランコ】

公園内でブランコをこいでいる小学生と衝突して転倒し、頭部を受傷した。
(4歳 中等症)

5 ガスによる事故

(1) 年別発生件数

ガスによる事故（火災、不救護を除く）は、平成26年から平成30年の5年間に240件発生しています。平成30年中は49件発生しています（図4-22）。

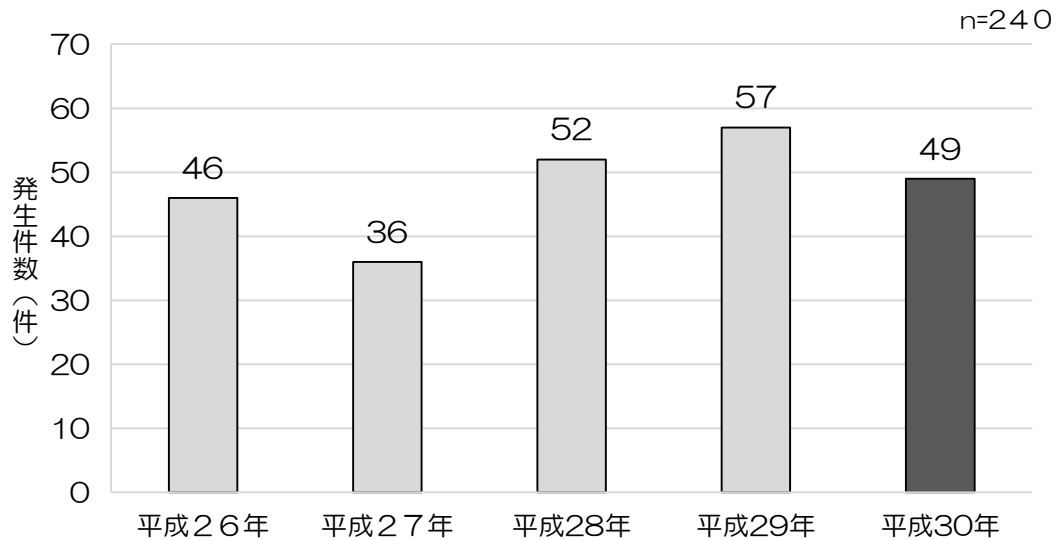


図4-22 年別発生件数

(2) 月別発生件数

月別では、7月が8件と最も多く、次いで、2月、10月、12月が7件となっています（図4-23）。

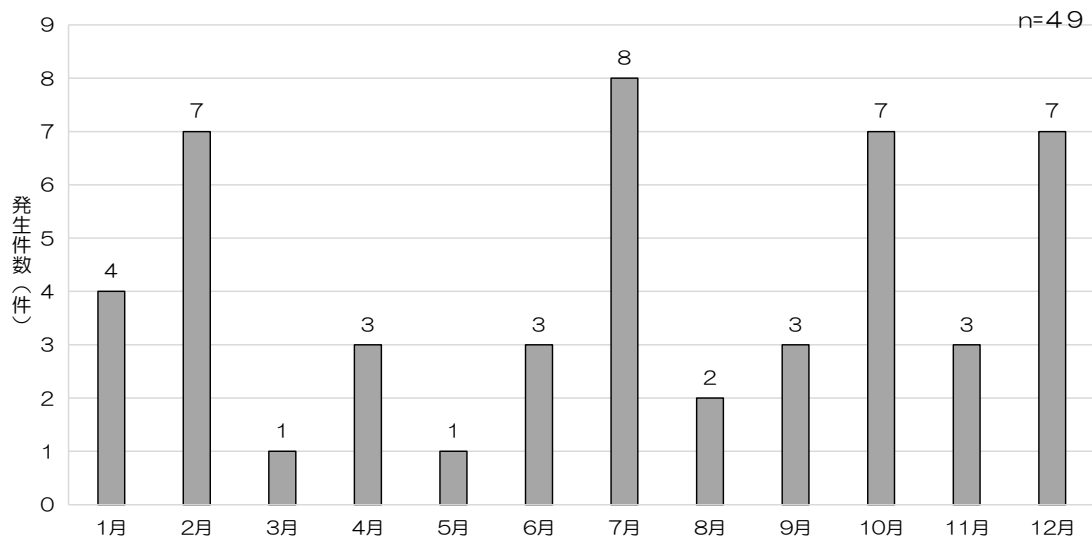


図4-23 月別発生件数

(3) 年齢層別搬送人員

平成30年中にガスに関連する事故（火災、自損、不救護を除く）により、75人が救急搬送されています。年齢層（5歳単位）別にみると、30－34歳が13人と最も多く、次いで40－44歳が8人となっています（図4－24）。

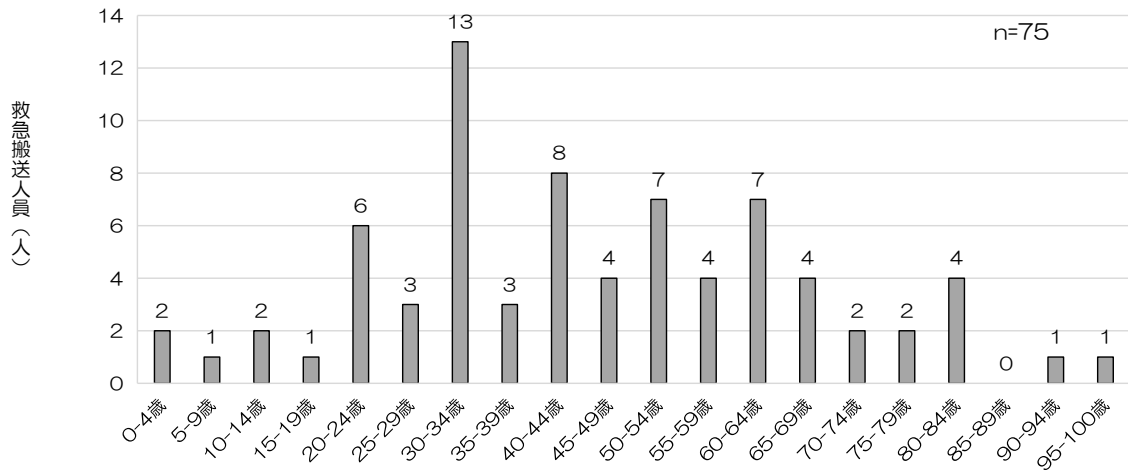


図4－24 年齢層別救急搬送人員

(4) 発生場所別発生件数

事故発生場所で見ると、6割以上が住宅等居住場所で発生しています（図4－25）。

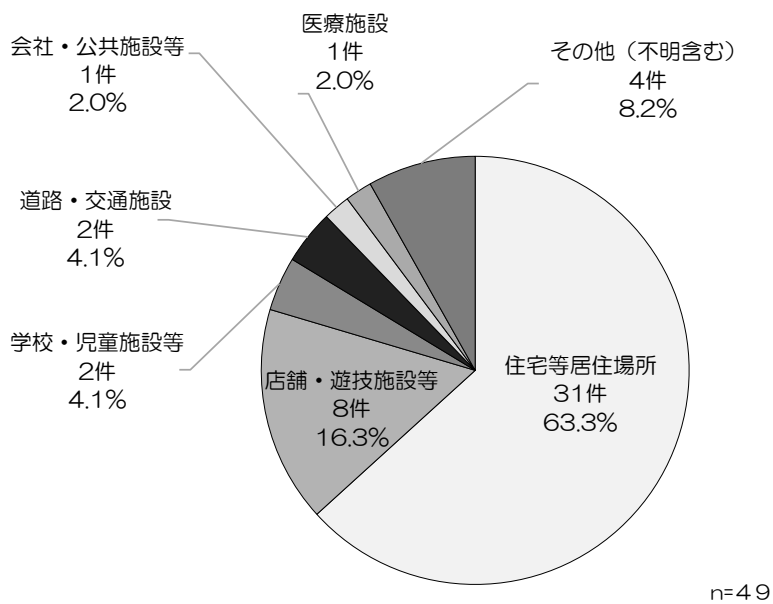


図4－25 発生場所別発生件数

(5) 初診時程度別と原因別搬送人員

ガスに関連する事故で搬送された人の5割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断され、生命の危険が強いとされる重症以上も約2割を占めています。(図4-26)。

原因別にみると一酸化炭素中毒による搬送が最も多く約5割を占めており、次いでエアゾール缶のガスへの引火となっています(図4-27)。

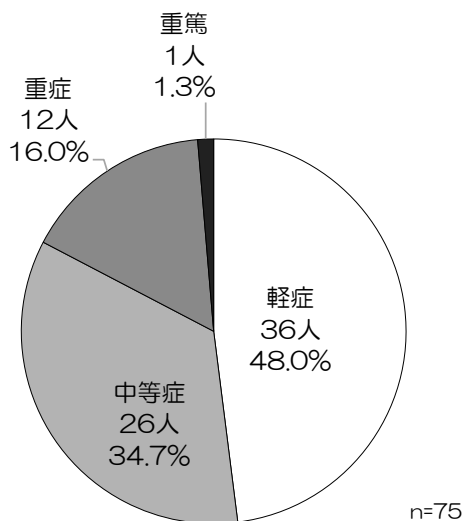


図4-26 初診時程度別救急搬送人員

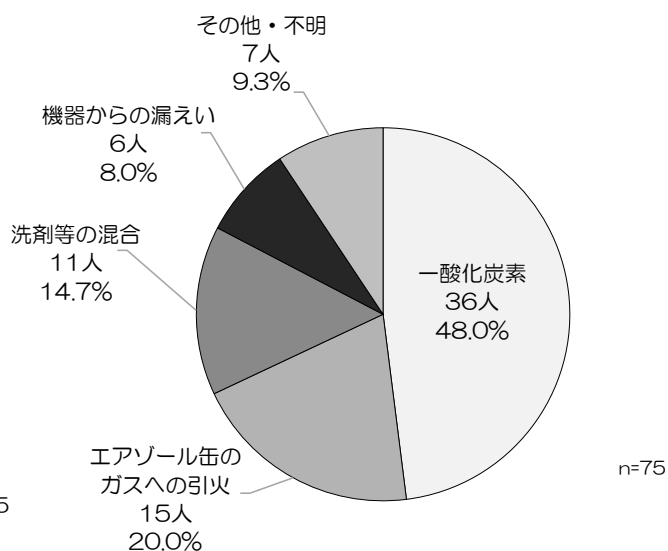


図4-27 原因別救急搬送人員

(6) ガス種別ごとの発生件数

ガス種別ごとにみると、一酸化炭素中毒が16件と最も多くなっています(図4-28)。一酸化炭素による事故のうち炭(火鉢・七輪等)と機械を使用した事故が、6割となっています。

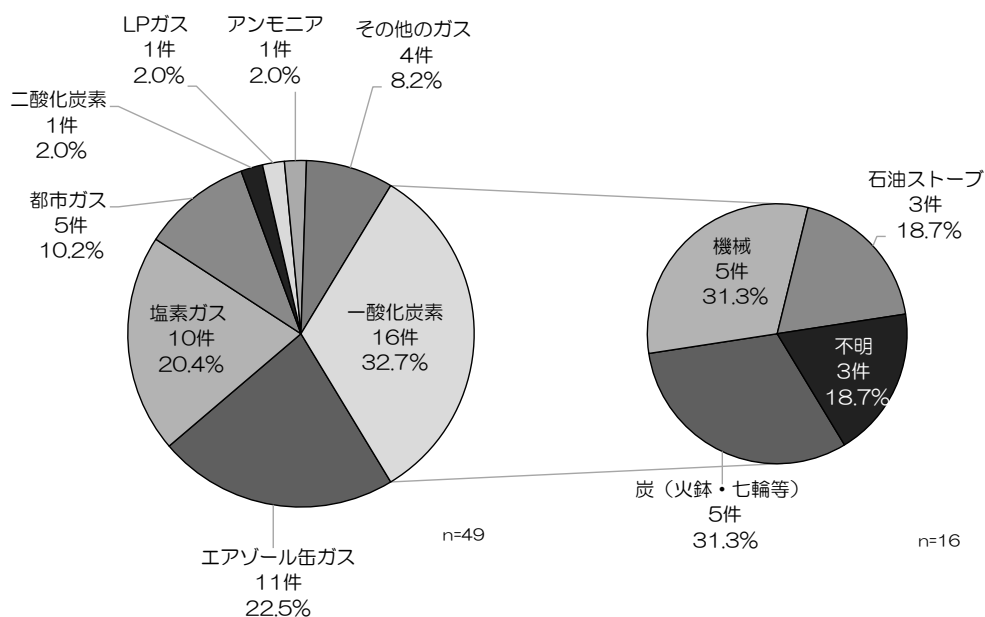


図4-28 ガス種別ごとの発生件数

(7) 一酸化炭素中毒による初診時程度別搬送人員

一酸化炭素中毒による事故で救急搬送された人の7割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されており、生命の危険が強いとされる重症以上も、全体の約3割以上を占めています（図4-29）。

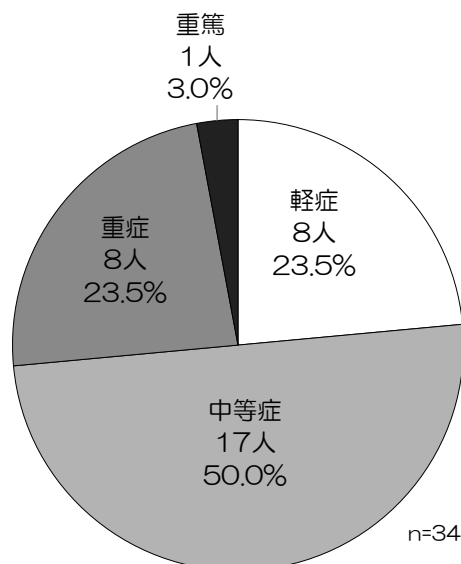


図4-29 初診時程度別救急搬送人員（一酸化炭素）

(8) ガスに関連する事故事例

【事例1 一酸化炭素中毒】

自宅で暖をとるために七輪で練炭を使用していたが、寝入ってしまい目覚めたときに気分が悪く、様子をみていたが改善しなかった。（70代 中等症）

【一酸化炭素での事故防止】

- 十分な換気により、室内の一酸化炭素濃度が下がることから、火気設備・器具を使用の際は換気扇の使用や定期的に窓等を開けるなどして換気を十分に行いましょう。また、使用中に少しでも異常を感じたら、使用を中止するとともに十分な換気を行いましょう。
- 不完全燃焼が起こると一酸化炭素が発生することから、火気設備・器具の定期的な点検と清掃を行いましょう。
- 発動発電機やバーベキュー用コンロなど屋外での使用が想定されている火気器具等は屋内では使用せず、火気設備・器具の使用法を守りましょう。
- 一酸化炭素は、無色・無臭で気が付きにくい気体です。一酸化炭素を感知する警報器を設置することも有効です。

【事例2 スプレー缶のガス抜き】

傷病者はガスコンロで調理中に、付近でスプレー缶を廃棄処分するために穴をあけていたところ、その際に噴出したガスに引火し、顔面が炎にあおられ受傷したもの。

（50代 軽症）

【穴あけ・ガス抜きでの事故防止】

- 廃棄する場合は、必ず中身を使い切り、各区市町村が指定するごみの分別を守って捨てましょう。
- 厨房器具や暖房器具付近の高温となる場所や、直射日光と湿気を避けて保管し、厨房器具や暖房器具等の付近では使用しないようにしましょう。

ＬＰＧなどの可燃性ガスは噴射剤として使われていることが多いので、使用前には必ず製品に記載されている注意書きを確認しましょう。

【事例3 洗剤の混合使用】

浴室を掃除するために二種類の洗剤を混合したところ塩素ガスが発生し、誤って吸い込んだもの。（30代 重症）

【洗剤での事故防止】

- 種類の違う洗剤を一緒に使わないようにしましょう。
塩素系洗剤と酸性洗剤を一緒に使うと、有毒なガスが発生することがあります。
- 洗剤を別の容器に移し替えることはやめましょう。
アルミ缶など金属製の容器は、洗剤と容器が化学反応を起こし容器が破裂することや解けることがあります。
- 使う前に容器に書かれている注意事項を確認しましょう。



